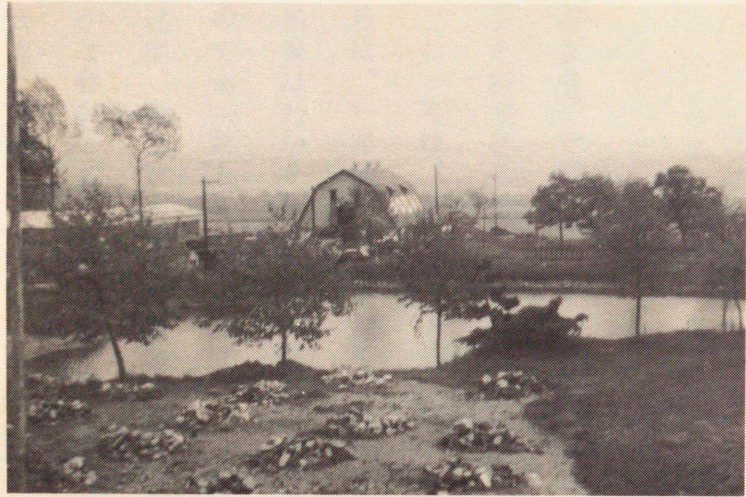


ふじみの



No. 22 1983
東京農大畜友会



富士農場風景

巻頭言

畜友会委員長

譬

吉

浩

畜友会ができて、三十年目の今年、委員長の大役を努め、会員みなさんのために働くことができ光栄でした。

この一年は、長いようで短かい一年でした。

私は、一年間、自分に克つということを、肝に銘じて過ごしました。自分では、その結果はわかりませんが、私は、その成果があり、会員の方々が満足していただけるものであったと思っています。

近年、畜友会を模した集まりが他学科にもできつつありますが、畜友会には、そのような会が足元にも及ばない伝統と実績があります。後輩のみなさん、この三十年間の伝統と実績を、いつまでも絶えることなく受け継いでいって欲しいと願います。

目次

巻頭言

畜友会委員長 警 吉浩 1

御一報

亥年に思う事	畜産学科長	田中 一栄	4
アナクロニズムと笑う勿れ	教授	鈴木 正三	6
貿易摩擦と牛肉	教授	吉村 喜彦	8
畜産領域における バイオテクノロジー	教授	渡辺 誠喜	10
プロスタグランジンE ₂ αの 応用による豚の分娩誘起	教授	石島 芳郎	12
ブエノスは今?	助教授	伊藤 澄磨	15
鶏ニューカッスル病流行の恐れ	講師	渡邊 忠男	17
羊腸について	講師	松岡 昭善	19
ネパールを訪ねて	講師	古川 徳	20

研究室だより

昭和五十七年度卒業論文題目

家畜育種学研究室	27	家畜生理学研究室	34
家畜衛生学研究室	28	家畜繁殖学研究室	35
畜産経営学研究室	30	畜産物利用学(肉)研究室	38
家畜飼養学研究室	32	畜産物利用学(乳)研究室	39

農場だより

雑録(その1)「犬らしくない犬」	講師	大谷 忠	41
ホロホロ鳥と伝説	講師	西脇 充	42
第三回日華養豚研究会議に参加して	講師	鈴木 伸一	43

優秀卒業論文紹介

昭和五十六年度卒業生優秀卒業論文

学長賞 過排卵処置マウスの胎子生存性に及ぼす各種ホルモンの影響	江川 優子	47
---------------------------------	-------	----

特別寄稿

〜翔〜諸先輩より	49
青壮年男性を襲う謎の死神 昭和大学講師 角田 健司	49
私の研究テーマ(希望と苦勞) 日本蛇族学術研究所職員 森口 一	51
〜仲間〜学内より	53

別海だより

「農大健児の意気を見よ」

酪農雑感 別海農協酪農協議会副会長 斉藤 忠吉	65
期待される育産基地別海町から 北出 博	67
別海町農業共済組合代表監事 開澤 浩義	69
別海町で働いたこと 畜産学科二年 林 弘美	71
別海実習にて 畜産学科二年 林 弘美	71

集う学友

〜われら仲間〜

農学に集う―軽薄の大学論― 日本大学農獣医学部拓殖学科二年 筋野 勉	73
------------------------------------	----

肥育試験について想うこと

日本大学農獣医学部畜産学科二年 草地学研究室肥育班 菊地久美子 74

サークルレポート

〜われら農大生〜

この素晴らしき仲間達に 野生動物研究会	76
日本酪農の現状と展望 牛飼の会	78
農大には農村調査部というクラブがあると 農友会農村調査部	80
いうことは知っていますか 農友会農村調査部	80

畜友会だより

昭和五十七年畜友会行事報告	83
昭和五十七年畜友会会計報告	84
第九十回収穫祭畜産学科会計報告	85
畜友会任期を終えて 畜産学科三年 小澤 真也	86
収穫祭を終えて 畜産学科三年 阿住 進	87
家畜苑を終え 畜産学科三年 伊藤 幸也	87
第九十回収穫祭報告	89
昭和五十七年度第九十回収穫祭役員・畜友会役員	90
畜友会規約	91
編集後記	96

亥年に思う事

畜産学科長 田 中 一 栄

今年の干支^{エト}はイノシシであり十二支の最後に当る。と云っても別に例年と変りがあるわけではないが、新しい年を迎える度に何らかの期待を込め、その年の干支を都合よく解釈して関連付けるのが習わしである。例えば、月並ではあるが今年にはイノシシの習性から連想される猪突猛進にあやかり、或る目標に向って頑張るぞと決心するのが年の初めの試しとされている。

さて、このイノシシは豚の野生原種とされており、現在なお地球上に広く分布・繁栄している。多くの家畜の野生原種がすでに滅亡している中で、イノシシとヤケイは貴重な存在である。中国では豚を猪と書きイノシシを野猪と云う。同様に英語でもイノシシを *wild pig* と云う。それほどに豚とイノシシの関係は近い。

そこで今年の干支に因んで我が国の養豚界も大いに飛躍してもらいたい。しかし残念乍らその現況はまさに戦国時代であり、また黒船襲来の危機感が非常に強い。何故ならば、戦後多く

の外来品種を導入しながら我が国に適した育種方法の結論が得られず、さらに最近では諸外国から雑種豚（ハイポー豚・ハイブリッド豚）がその飼料・管理・衛生プログラムまで含めた一貫生産方式と共に輸入されており、まことに嘆かわしいと云わざるを得ない。一方、市場における豚肉の品質低下が指摘されているが、これに対して戦前から飼養されて来たヨークシャー種やバークシャー種が見直されており、また良質の赤肉を生産するイノシシやイノブタの飼育が脚光を浴びて来ている。これらは育種素材として充分活用されるべきであり、また我が国独自の新しい豚を作出するのも決して夢ではないと思う。

近年、欧米との経済摩擦から、畜産関係では牛肉の貿易自由化を迫られていることは周知の通りであるが、いつまでも保護貿易に頼っているわけには行かないであろう。それには経営の合理化と技術の向上を計り、諸外国との競争に充分対応出来るだけの基盤を作るよう努力しなければならぬ。このように我が国の畜産の将来は決して楽観を許さず多くの問題をはらんでいるが、それらを解決して行くのは諸君達若き畜産人であることを認識して頂きたい。大いに国際的視野を広めると共に、今後益々多様化してゆくであろう畜産界の発展のために不断の努力を切望する次第である。

アナクロニズムと

笑う勿れ

家畜育種学研究室

教授 鈴木 正 三

冬来りなば春遠からじ。人の世の浮沈、人生航路の自然現象である。最近とみにこんなことを考えるようになって。やはりよわいの然らしめるためであろう。この自然のあらゆる事象がこれに逢遇する人達の人柄、人となりを微細にしかも克明に形造って行く。いわばその人のうける経験の連続が時には幸福となり、時には不幸をもたらす遠因とも近因ともなり、人の世の誰しもが受ける必然性を創造する。そしてこの事象が偉大にして高潔、温厚にして篤実などと表現される所謂人格の高い者とこれに對し劣等にして浅薄、狡猾にして悪辣と表現される所謂人格の低い者とを形造る。何れにしてもこれらの人柄形成には文字通り多量にして微細な要因が潜在し介在している。人柄とか人格という言葉にふれると想い出を誘うのは往対の学生時代の明けくれである。これもやはり年令のせいであろう。

学生時代を旧制で過した筆者はノスタルヂヤ的感情のおもむくまゝにたゞ数年例の全国的に組織化された大学ののみ。

会場は正にアナクロニズムの者達のみとも言いたい。これは全く往時の学生世相のコピーの一コマに過ぎない。この現象を筆者は敢えて往時における人間形成の一つの手段でもあったと受け止めたい。こうして自失乱舞した若者達は何れの進路を辿つたとしてもその行手の波瀾万丈の荒海に投げ出されおぼれかゝつたとしても思索夢想の命綱にしがみつき、信念という支柱に支えられた。極言すればこの寮歌生活を一つの精神的よりどころとした若き青年は何等かのものを自己の人柄形成に消化吸収したのではなからうか。確かに善かれ悪しかれその行為行動は実に多彩なものであった。道路交差点における交通整理のゴー・ストップはお巡りさんが笛で手働のシグナルを操作した標識であった。これを酔ふほどに寮に担ぎ込んでその関りを取り巻いて馬穴を打ち叩き乱舞する英雄？もいた。そしてその末は交番、警察にお世話になる。何か特権意識涵養の学生さんと批判されたのも当然であろう。しかし筆者は人格を形成する場としての昔日の学生生活と否定したくない。

学制改革、星霜移つて四十年、五十年、世代は大きく変動した現代では文字通りアナクロニズムと笑われるかも知れない。敢えて筆者はこれを覚悟しての見解である。世は柔弱の風がぬるい。銀座の柳の如くその風向また

子科、旧制高校などで構成されている寮歌祭にひとときを過ごす。歓喜と悲哀の交錯した時代、バラ色の青春譜を謳歌した時代。その規模、内容、様式はともかくとして集る古老的青年は皆異句同音古き良きこと、悪しきこと語り合う彼等の青年時代の生活の再現である。文字通り弊衣破帽白線生活の夢にひたつた想い出に蚤声乱舞する。国内での学校は勿論のこと、国外での北はヘルピン学院、満州医大予科から旅順工大予科、旅順高校、中国上海の東亜同文書院、南は台北大予科、台北高校、韓国の京城大予科など集う古老は皆感無量。時の人である六高出身の永野日商会長（寮歌振興会長）、東商大予科出身の渡辺前大蔵大臣などの打振る旗の下、また陸上、海兵出身者の軍隊調の銘歌、はたまた高等商船等の哀調帯びた「震めるみ空に消え残る、朧月夜の秋の空、……」、そして多感可憐な乙女の涙を競う「われは湖の子さすらいの、旅にしあればしみじみと……」三高の琵琶湖周航の歌など。こうした雰囲気で晩秋の宵を過す。集りし者何れも大体白髪禿頭の人士のみ。これに互して寮歌祭を賛同する紳士淑女。そして発する傲の冒頭に曰く。

敗戦三十有七年諸事更張の時なり、茫然自失、異制を甘受して、匆忙今日に至る 内は、国憲柄らかならず、国政の責奈辺に在るやを識らず、外は天下の大乱に臨んで、国防の実挙らず、右顧左顧、億兆徒らに醉生を負る

従つて従順な平和な人の世を送るのも一策であろう。平凡こそ人生には味あるものはないと先覚者は教えている。困難な問題である。自主性の確立が当然なければならぬ。そこには培養された良識をもって判定する人格の鋭利な判断力が必要となる。往時の学生生活から偲ばれる人格形成の道程と現代における目標確立のための方法とはそれぞれ自ら長所、短所の特徴があり何れがよいか、両者とも妥当性・普遍性を有するものと信じおだやかに評したい。万事が社会世相の帰納による果実である。

こんなことを偲ぶこの頃である。アナクロニズムと想う勿れ。しかし同感同情を欲求する者でもない。幅広い社会世相の底流が基調となつて若者達の環境造成を急ぐ。自重自戒。慎重に幸ある彼岸を凝視して永遠の理想に生きて行くことを祈りたい。

貿易摩擦と牛肉

畜産経営学研究室
教授 吉村喜彦

一九八〇年代の日米間の貿易摩擦は、有史以来の大きな出来ごとである。アメリカにおける自動車産業の不振と失業の増加は国際収支の赤字を一方的に日本の貿易の閉鎖性にあるとして、自動車の輸出規制を強要することから始まり、最近では全農産物の自由化を要求してきた。一九八二年十二月一日の政府発表によると、アメリカが対日市場開放として牛肉など一四項目について要求している。

①牛肉・かんきつ類、その他農産物②たばこ関税の引き下げ③電電公社調達協定の来秋見直し④電算機・データバンクへの外国企業参加⑤皮革製品の輸入拡大⑥ソーダ灰輸入制限の撤廃⑦紙パルプ輸入制限の撤廃⑧医療機器輸入拡大⑨米国製自動車部品の輸入拡大⑩米国制原子力機器の調達促進⑪資本市場の自由化促進⑫日本の企業系列化見直し⑬オンブズマン（苦情処理機関）の機能充実などから成っている。

さらに、日米農産物交渉の第四回日米貿易小委員会

七六年一三三・四ポンド、一九八〇年一〇五・二ポンドと二一%減少した。しかも、消費者価格はほとんど変化がないのである。

(3)牛肉輸出への意欲

牛肉の輸出は今まで生産量（一〇〇〇万トン）の一%であり、従来国内市場で十分な収益をえたため、輸出への関心が薄かった。高級牛肉の国際競争力は現在の生産体制・価格・品質・流通手段からみて、他の輸出国よりも優位にあるので海外市場の貿易摩擦がなくなり、一定の市場が確立されるならば輸出拡大の可能性が十分にあるとしている。この場合の一定の市場としての第一が日本であることはいうまでもない。

二、牛肉自由化による日本の肉用牛生産への影響

現在日本における牛肉消費の需給バランスは、国内産七%、輸入三〇%となっている。（年間消費量約六〇万トン）

国内産と輸入とのバランスは、日本の肉牛生産農家の在立条件であるので、自由化によって自給率を低下させることは、肉牛生産農家の存立基盤を破壊し、さらに九〇%以上が肉牛との複合経営農家であるので、農業経営組織の展望を失わせることになる。また乳用種の肥育は酪農経営との結合によるものであるので、乳用種肥育の

は米側が「牛肉とオレンジの自由化こそが自由貿易を守る上で重要である」として一月一日まで回答するよう期限付きの要求を突きつけてきた。これに対して日本側は「日本としても牛肉、かんきつ問題で進展をはかりたいと考えるが、現行の輸入制限の変更（自由化）には応じられない。しかし輸入枠拡大のための交渉なら検討に応じる用意がある。アメリカは自由化に固執すべきでない」と基本的な考えを伝えたのである。

このように推移から予想できることは、最小限度の牛肉の輸入枠の拡大は避けられないであろうということである。

一、アメリカの牛肉事情

(1)牛肉産業の特徴

牛肉産業は米国農業の中で最大部門である。一九八〇年の牛肉販売額は農産物総販売額の二二%であり、畜産物の中では四六%を占めている。また、肉用牛飼養農家は全農家の四割（一二七・三万戸）となっている。しかも、牛肉の海外市場依存度は米国農業の中で低い産業である。

(2)米国内牛肉消費の低迷

最近のアメリカ国民の所得の目減り、インフレ、高失業率によって牛肉より価格の安い家畜肉の消費が増大してきた。因みに、一人当りの年間牛肉消費量は、一九

減退は酪農経営にも影響を与える。

また、肉牛飼養は稲作との複合が最も多いので、稲作が残るとしても、次に米の自由化要求が来る可能性もあると考えられる。このように牛肉の自由化は単に牛肉生産のみの問題ではなく、日本農業全般に及ぼす影響がきわめて大である。

最後に自由化後はどうなるであろうか。

日本の牛肉輸入は、口蹄疫汚染地域からの輸入を禁止しているため、輸入相手国はオーストラリア・ニュージーランド・アメリカを主要国とする数カ国に限定している。したがって、国内自給率の低い場合、自由化後はこれら輸入国の異常気象や国際通貨の不安定・価格変動等の影響は直接国内市場に持ち込まれ、自由化以前の価格よりも高騰することは避けられなくなる。数年前アメリカの大豆輸出規制がなされた時、国内の大豆を原料とする食品（豆腐・納豆他）が高騰し、その後高値のまま今日に至っている事実を顧みてみる必要がある。

また、FAOの長期展望によると、韓国・中近東諸国の牛肉輸入増加傾向を含めて牛肉需給の世界的バランスは悪化している。自由化後の牛肉輸入における量的確保、適正価格の輸入の可能性はきわめて薄い。

畜産領域における バイオテクノロジー

家畜生理学研究室
教授 渡辺誠喜

本誌「ふじみの」の編集担当者が大変忍耐強く、筆者の処へ数回に亘り原稿の依頼に参上されるので、些か参つてしまい、常々頭の中にあつた「遺伝子操作と畜産」とでも題して書くことを約束した十二月のある日の翌朝の新聞を見て驚いた。そこには一面トップに大見出しで「スーパーマウス誕生」を報告していた。

え、畜産領域におけるバイオテクノロジーの利用法や、今後の問題点を簡単に述べて、本誌編集担当者への責任を果したい。

スーパーマウスに関する実験はアメリカ、ワシントン大学ハワードヒューズ研究所のリチャード・D・パルミター氏、ペンシルベニア大学獣医学部のラルフ・プリンスター氏、ソーク研究所のロナルド・エバンズ氏およびカリフォルニア大学サンジエゴ校医学部のマイケル・ローゼンフェルド氏らの協同研究である。

今回の実験はマウスの遺伝子からプロモーターレギュレーターと呼ばれる遺伝子調節部分を取り出し、これをラットの成長ホルモン生産遺伝子につなぎ、更にこの遺伝子は①と③の方法によつたものである。

元来、脳下垂体前葉から分泌されるホルモンには五種類があり、これらホルモンは視床下部からのホルモンや神経細胞の支配を受けて、動物の生命維持のためにその分泌は調節されている。成長ホルモンの分泌調節が乱れ、分泌時期や分泌量が異常化することによって、末端肥大症や、代謝障害が生じ、また分泌が欠損したり、減少すると発育不全をおこし、下垂体性小人症となる。

今回、二倍の体重を有するマウスの誕生そのものが畜産的に大変興味を持たれることはもとより、肝臓で生合成されるホルモンが、その後どの様な体内動態を示すか、このマウスの下垂体前葉の α 細胞はどの様に変化するのか、視床下部より分泌されるGRHはどうなるのか、など、生理学的興味はつきない。

これまで遺伝子工学と云えば大腸菌を培養して、そこで他の動物のインターフェロンやホルモンを作らせていたが、今後、これらの生産が動物の肝臓を用いることにより行なわれる様になれば、或はこれまでより容易に、しかも多量の各種ホルモンの生産が可能となることも考えられる。

一方、家畜の過剰排卵や受精卵移植などの実験には従来より異種動物由来のホルモンが用いられている。例えば牛、羊などの過剰排卵を誘起するためにPMSSG(馬

子)を大腸菌を利用して複製し、その後、マウス受精卵に注入したものである。一七〇個の処理受精卵がマウスの子宮に移植され、このうち二十一匹の子マウスが出生し、うち七匹はラットの遺伝子を持つていた、と云う。このプロモーターレギュレーターはマウスのメタロチオネインと呼ばれる蛋白質の合成を支配するもので、このメタロチオネインは一般には肝臓で他の蛋白質と同様に合成され、体内に這入った重金属と結合してこれを体外へ排除する作用をするものである。

動物の成長ホルモンは脳下垂体前葉の α 細胞より分泌されるポリペプチドで、動物の成長に深い関係を有すると云うことからこの名称が付けられているが、動物の成長を支配するホルモンはこの成長ホルモンのみでは決してない。

今回の実験では先に述べた七匹のラット遺伝子を持つたマウスは正常マウスの八〇〇/一、六〇〇倍の成長ホルモンを合成しており、体の大きさも正常の約二倍に達したと云う。更にこのうちの二匹のマウスは移植されたラットの遺伝子を子孫に伝えており、この効果が遺伝することを示していると云うが、一方ではこの移植遺伝子は肝臓に着生し、その機能を発起していると云う。

近年、バイオテクノロジーなる学問分野が開発されて来ているが、この分野は現時点では①直接DNAやRNAを取扱う部門、②細胞融合に関する部門、および③受精卵移植に関する部門が考えられる。これら①、②、③

の血清より作るホルモン)が用いられることはよく知られていることである。ホルモンのうち、ポリペプチド系ホルモンで、しかも異種動物由来のものであると、ホルモンを投与された動物は抗ホルモン抗体を産生し、ホルモンの効果を全く阻害する様になって来る場合がある。従つて異種動物由来のホルモンの頻回投与は避けなければならぬ。このことは過剰排卵技術を用いて優良な種畜から優れた卵子を多数、しかも継続的に採取することに大きな障害となつている。しかし、バイオテクノロジーの進展に伴ない、今後特定の動物のポリペプチド系ホルモンを他種動物の生体を借りて、多量に生産し得れば、抗ホルモン抗体の産生によるホルモン効果の阻害作用はなくなり、過剰排卵誘起による多数の優良卵子の採取も容易となり、この部門の大きな進展が期待される。現存する食品蛋白質の種類も相当数あるが、これら各種蛋白質についてもこの技術の応用が考えられることはもとより、存在しない蛋白質の出現も今後あり得ると思われる。例えば、蛋白質の基本的構造設計が出来ると思えば、それに従つた遺伝子配列が考えられる様になり、結果的にはProteomeにおいて新しい蛋白質の生産があるものと思われる。現存しない蛋白質の出現は、いろんな面に畜産部門とも大きなかわりあいを持つてであろうし、この点から見ても、吾々はバイオテクノロジーに対して関心を示すのみならず、積極的にこれについて検討を加えて行くことも必要な事柄と考える。

以上

表1 わが国におけるPGF_{2α}による豚の分娩誘起試験

妊娠	PGF _{2α} の		供試 例数	PGF _{2α} 投与 後分娩開始ま での平均時間	分娩誘起有効率		報告者
	投与日	投与時刻			投与量	36時間以内	
110-114日	5:00		11	30:09	90.9%		菅原ら 1976
112-114	5:00- 9:30		140	25:40- 38:21	84.3%		菅原 1977
110-114	5:00- 8:30		13	24:28- 37:01	92.3		菅原ら 1977
112-113	9:00- 16:00		28	23:21	96.4%		山田ら 1977
111-113	10:00 前後		245	18:03- 56:56	76.3		山田ら 1978
110-114	8:00- 8:30		538	25:39- 29:30*	89.6- 95.2		菅原ら 1982

*原文では小数点で記載

表2 PGF_{2α}の投与日および投与量と分娩誘起効果の関係(山田ら1978)

妊娠	PGF _{2α} の		供試 例数	PGF _{2α} の投与後分 娩開始までの平均時 間	36時間以内に分娩 開始した割合
	投与日	投与量			
111日	5	8		56:56	37.5%
	7.5	16		31:14	81.3
	10	40		46:38	57.5
	15	1		26:20	100
	20	3		51:47	33.3
112	5	36		37:31	75.0
	7.5	25		34:55	72.0
	10	39		30:34	84.6
	15	2		27:01	100
	20	1		27:15	100
113	5	15		33:20	86.7
	7.5	12		35:52	75.0
	10	38		24:10	89.5
	15	7		18:03	100
	20	2		25:53	100

プロスタグランジンF_{2α}の 応用による豚の分娩誘起

家畜繁殖研究室
教授 石島芳郎

はじめに

プロスタグランジンF_{2α}(PGF_{2α})は強力な黄体退化作用をもつことが知られており、すでにこれを応用して発情の同期化や卵巣疾患の治療が各家畜で実施されている。近年、このPGF_{2α}のもうひとつの作用である子宮収縮作用を利用して家畜の分娩時期を人為的に調節する試みが注目され、牛と豚で応用試験がはじめられている。

PGF_{2α}により分娩誘起が自由に調節できれば集中分娩が可能となり、日曜や夜間分娩をさけることに応用すれば経営の合理化にもつながり益するところが大きい。

目下、産子数の多い豚に利点が大いことから豚で研究が盛んにすすめられているので、以下にその現状を紹介してみよう。

研究小史

PGF_{2α}の子宮収縮作用は黄体退化作用が証明(はじめに証明されたのは一九六九年)される以前から知られて

いたが、これを家畜の分娩調節に応用しようとして検討がはじめられたのは今から十年ほど前のことである。最初は牛で検討がはじめられた。

豚については、一九七四年、ミズリー大学のデーラやデイの一派によって、PGF_{2α}の投与が豚の妊娠期間を短縮できることが示唆されたのが最初で、以来各国で豚の計画分娩にこれを応用するための検討がはじめられるようになった。

わが国で豚の分娩誘起にPGF_{2α}を応用したのは東北大学の菅原らが最初で、氏らの報告は一九七六年にだされている。その翌年(一九七七)の春、家畜繁殖研究会は「家畜繁殖におけるプロスタグランジンの応用について」と題するシンポジウムにおいて、いちはやく分娩誘起の問題もテーマのひとつに取り入れた。

それが契機となって、わが国においてもPGF_{2α}の応用による分娩誘起が注目されるようになった(表1)。

わが国の研究の現状

わが国におけるPGF_{2α}による豚の分娩誘起試験は、すでに述べたように菅原らによってはじめて行なわれた。氏は、妊娠一〇〜一四日の豚十一頭にPGF_{2α}を投与し、投与後二三〜三八時間以内(平均三〇時間九分)に全例が分娩を開始したことをみた。その後、菅原ら(一九七七)は妊娠一一三〜一四日の豚一四〇頭を対象に

五〇〇mgを投与し、平均二五時間四〇分〜三八時間二一分で分娩を開始したこと、また供試豚の八四、三%は四八時間以内であったことを報告している。同年菅原らは、初産豚十三頭を対象に一〇〇〜一四日に一〇mgを投与し、平均二四時間二八分〜三七時間一分で分娩開始がみられたことをみている。

一方、山田ら(一九七七)は妊娠一一二日と一一三日に一〇mgを投与し、妊娠一一二日のものは平均二四時間二五分、また、一一三日のものは平均二二時間四五分(両区平均二三時間二二分)で分娩を開始することを報告した。また、その翌年、山田らは、投与日、投与量の詳細な検討を行ない、表2に示すような成績を報告した。

その後、菅原ら(一九八二)は、PGF_{2α}のアナログ(誘導体)を用いて大がかりな野外試験を実施し、妊娠一一〇〜一一四日に一七五mgの投与することにより、投与後平均二五時間三九分〜二九時間三〇分に分娩開始され、長いものでも三六時間をこえるものはほとんどないことから、アナログも有効なことをみいだした。

以上が報告されているものの概要である。このほかに学会等で口頭発表されたものが二、三あるがこれにはふれなかった。

むすび

これまでの報告から、妊娠末期にPGF_{2α}を投与すると

ブエノスは今?

家畜飼養学研究室

助教授 伊藤 澄 磨

ブエノス・アイレス、この都市の名の響きを耳にする

と何ともたどえ様のないさわやかな気分になります。ブエノス(大変に良い・結好な)アイレス(空気)文字通りの都市でした。一九六〇年代ここを訪ねる毎にその気分になりました。

またの名は「南米のバリ」。Xマス・正月は、永雨と名状し難い陰湿な街となる本場のバリとは比較にならぬ程、さわやかな所でした。今頃は夏の真盛り、クリスマス・カールと、美しいスロー・サンバと、夜は人の世の苦しみ、悩み、を歌いあげるタンゴに包れているのでしょうか?

一九八二年、東京の暖い空気を切りさいて初冬のマルビナス群島でのイギリス・アルゼンチンの戦争が報ぜられました。ネルソン直伝の英国海軍の偉信と、片や南半球一の大国の面子(メンツ)にかけ、死闘がくり返えされた結果、近代兵器の実習現場と化し相方痛み分けの態でありました。

その時の日本政府の姿勢は誠に難渋そのものと見られ

大部分の豚は、投与後三六時間以内に分娩が開始されることが普遍的なものであることがうかがえる。

このことは要するに、PGF_{2α}を投与すると豚の分娩が一定時間内に集中させられることを意味しているので、今後、計画分娩への応用が期待できる。

わが国の報文

本稿に紹介した報文を次にあげておくので、興味のある方は一読されたい。

一菅原七郎ほか(一九七六)プロスタグランジンF_{2α}による

豚の誘起分娩について、家畜繁殖誌、二二、六〇一六五。

二菅原七郎(一九七七)プロスタグランジンF_{2α}による豚

の分娩誘起、家畜繁殖誌、二三(五)、x1-xlv

三菅原七郎ほか(一九七七)プロスタグランジンF_{2α}による

豚の誘起分娩、特に初産豚について。畜産の研究、

三一、三二〇一三二。

四山田 豊ほか(一九七七)プロスタグランジンの応用に

よる豚の分娩誘起について。畜試研報、三三、七一七六。

五山田 豊ほか(一九七八)プロスタグランジンの応用

による豚の分娩誘起について、二、投与量ならびに投

与日齢と分娩誘起所要時間。畜試研報、三三、一一五。

六菅原七郎ほか(一九八二)ICI80996による豚

の分娩誘起とその実用化試験。畜産の研究、三六、七

五一―七五四。

ました。「軍配を上げ兼ねている相撲の行司」とでも言いますか、新聞も地球の裏の事として取り扱っていません。

しかし、これらはECとのつき合い、数万と伝えられているアルゼンチンの日系移住者の立場、イギリスにもアルゼンチンにも肩入れ出来ない悩みでありました。日本の移住者が大量にお世話になっている国は中南米各地にあります。ア国はその大手とでも言えましょう。

しかしそれよりも、後世に伝えるべき事として、戦後の一時この国により助けられた事です、第二次大戦後の日本の食糧危機の時、いち早く、食糧を送って来てくれた国がアルゼンチン国でした。国連機構が未だ制備される以前日本の餓死者予想が発表されるや、当時のペロン大統領はトウモロコシを大量に送りつけ、日本の窮状を

すくって呉れました。それも無償、即ちプレゼントであった訳です。そのうちそれが淡黄色のアメリカ産デント

コーンに代り、現在家畜の飼料として中西部のコーンベルトゾーンの生産者をうるおしているのです。

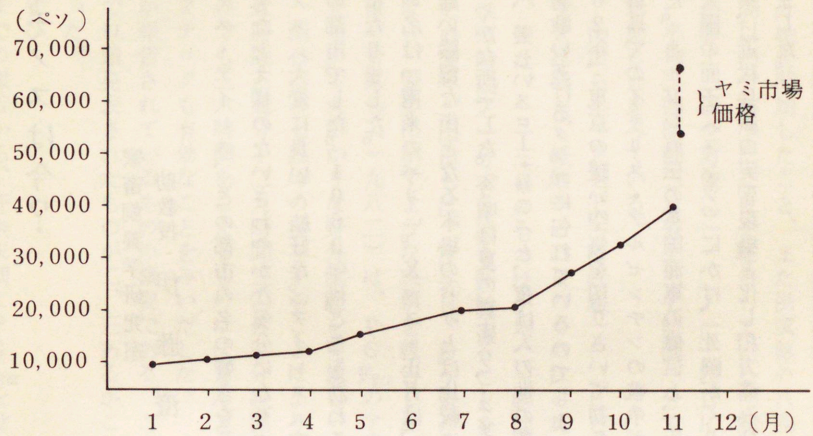
ブエノスの表情が時折報道されていますが大変な暮し難い街と化した様です。インフレーションです。今年四月頃、友人の便りによると、レートが一US\$1125〇〇ペソとなり家賃も3000\$と変わったとありました。物価指数は一九八一年2月から八二年10月の間に193・

鶏ニューカッスル病流行の恐れ

家畜衛生学研究室
講師 渡邊 忠男

現在、我国にみられる鶏の伝染性疾病には、各種のウイルス性、細菌性、寄生虫性、その他数多くの疾病が挙げられるが、中でもウイルス性疾病である鶏ニューカッスル病は、その伝播力および病原性の強さなどから養鶏関係者が最も恐れている伝染性疾病である。

鶏ニューカッスル病は、一九二六年にインドネシア・ジャバア島で最初の発生が確認され、その後同年イギリスのニューカッスル地方で発生があり、初めてウイルスが分離された。この地名を取ってニューカッスル病と命名され今日に致っている。その後アジアの各地で大流行が認められた。各地で分離されたウイルスは、伝播力が強く、致死率が非常に高いものであり、アジア型（強毒内臓型）と呼ばれ、各地で多大な被害をもたらした。一方、一九三五年にアメリカにおいて呼吸器症状と神経症状を主徴とした疾病が散発し、分離されたウイルスがニューカッスル病ウイルスであったので、前者に対してアメリカ型（脳肺炎型）と呼ばれ、以後各地で散発してい



1982年の公定為替レート変動 (1ドル当りのペソ)

3%と、200%近い上昇が見られます。為替（カワセ）レートの変動も大変なものです。表は1アメリカ、ドルに対するペソ（アルゼンチン通貨）の価格です。これはいずれも公定価格であり、ボルサ・ネグラ（黒い袋）即ちヤミ取引市場では5万5千ペソから6万ペソ以上の事です。

従って土曜の夜等家族連れでレストランに行くには懐中少くとも100ドル6百万ペソが必要でしょう。この先どこまで広がる事でしょうか。野生ルーサンの茂るパンパ（草原）と広い耕地が産み出す、世界一の牛肉とトウモロコシはこの国の経済をいっどこで立ち直らせられるか、見当もつきません。今年のブエノスはどんな夏なのか？、とても気がかりな東京の冬の夜です。



る。

我国においては、アジア型の発生が一九三〇年〜一九三一年にかけて関東地方にあり大流行し、以後一九四六年まで散発的に発生が認められた。しかし一九四七年から一九五〇年まではその発生報告（公式記録）が認められなかったが、一九五一年にアメリカ型の本病が認められ、以後各地で散発した。更に一九六五年の夏頃より従来のアメリカ型に加えてアジア型の発生が再び認められ、以後はワクチンの普及などにより、アジア型とアメリカ型の区別も困難な場合が多くなった。本病の発生は、一九六七年にピークに達し、公式記録で一九三四九二三羽の発生が認められ多大な被害をもたらした。しかしこの年より従来の不活化ワクチンに加えて生ワクチン（B₁株）が使用され、以後その発生は減少の傾向を示し、一九七九年にはわずか四五九〇羽の発生が認められたにすぎなく、本病の予防体制も十分になったと思われるが、翌一九八〇年に八五八二羽、一九八一年には四〇二二二羽と発生が増加し、一九八二年は九月までに六〇二九四羽と再びその発生に増加傾向が認められ、再びその予防対策の見直しが必要となってきた。

本病の診断は、一九八一年千葉県のプロイラー農場で発生したものの様に、飼養者が異常を認めた時にはすでに遅く、わずか二日間で一鶏舎約一〇〇〇〇羽のうち半

分以上が斃死し、緑色下痢便、神経症状等を示すものが数多く認められる様な典型的な場合には、その発生状況、臨床症状、解剖所見などに特徴があるので、本病の発生現地である程度診断をすることができるが、本病ウィルスは、極めて強い症状を示すものから、ほとんど症状を現わさないものまで種々あるので、確定診断には、ウィルス分離と血清反応によって決めなければならない。

本病の予防対策としては、①隔離飼育、人・物品等の立入り、搬入の制限、野鳥・動物・昆虫等の侵入防除および消毒などの一般的な衛生管理による病原体の侵入を防禦することおよび②不活化ワクチンや生ワクチンの使用による適確なワクチン接種プログラムの実施により鶏を免疫状態に保ち、病原体の感染増殖に抵抗させることであり、両者が連携してはじめて予防効果が期待できるものである。最近の本病発生鶏群の疫学調査をみると、ほとんどの鶏群で、ワクチンの未接種や、不確実なワクチン接種プログラムの実施および衛生管理の不十分がその要因として挙げられ、各鶏群に多大な被害を与えている。さらに産業鶏以外の所謂愛玩鶏の普及も進み、各地で小数羽飼育がなされているが、それら愛玩鶏飼育者の予防対策は、養鶏場のそれとは比較にならない程低く、本病の発生も認められており、他への感染原としても数多くの問題を残している。

羊腸について

肉利用学研究室

講師 松岡 昭善

最近ではニスブームとかでラケットを持った人をよく見掛けます。このラケットの部分をガットといいますがこの素材に羊の腸が用いられていたことを御存知の方はあまりいらっしやらないのではないかと思います。今日でもまだ羊腸が用いられているかどうかは知りませんが……。手許にある岩波英和辞典によりまずと gut とは腸の意味で little (small) gut を小腸 blind gut を盲腸、また、種々の用に供する動物の腸（楽器の弦の原料・魚釣用の「てぐす」）とあります。この gut という単語がそのままラケットにも用いられていると考えられます。

辞書にもありますようにバイオリンの弦にも羊腸が用いられていました（現在でも使われているかは知りません）。また、バイオリンの弓には馬の尾毛が用いられています。ストラディバリウスやアマティなどの名器といわれるバイオリンの妙なる音色が羊腸と馬の尾毛から生みだされるのだと考えると、ちょっと不思議な気がしない

現在、畜産学科の各研究室（全部ではないが）をはじめ学内各所で鶏が飼育されており、各種研究に供されているが、人の出入りが多い現状からも、各飼育管理者は、常に鶏の健康状態をよく把握すると同時に予防対策を十分考慮して飼育管理をする必要があります。もし、本病をはじめ各種疾病の発生を認めた場合には速やかに各種対策をして、他所への伝染を極力防ぐ処置をしないと、貴重な研究結果が得られなくなり、その代償も非常に高いものとなるので十分な配慮が望まれる。

なお、鶏の疾病に関する詳細については、鶏病診断（家の光協会編）、鶏病臨床図説（日本畜産振興会編）等を参照。



でもありません。

羊腸というと我々にとってなじみの深いものにウィナーソーセージがあります。と申しますのはこのソーセージの原料肉は羊の小腸（ケーシング）に詰められているからです。ですから羊腸や豚腸など動物の腸に詰たソーセージを総称して腸詰というのもこのようなことからです。ソーセージ用ケーシングとして用いられる羊腸の全量が輸入に頼っており、主な輸入先は中国、オーストラリア、ニュージーランド、インド、パキスタンなどの国々です。これらの羊腸は九十二メートルを 1 pack（かせ…綿糸や毛糸の単位）にして塩蔵されて輸入されますが、ニュージーランド、オーストラリア、アメリカ、デンマーク以外の発展途上国から輸入したものは衛生的に難があるので、我国では通関の際に検査消毒が行なわれているそうである。最近では赤色に着色したウインナーソーセージは食品公害が問題となって以来減少しましたが、そのかわり羊腸自体の色合いが消費者の好みを左右するようになり、色合いと品質のよいニュージーランド、オーストラリア産のものが増加しています。

羊腸をケーシングとして使用する場合は、使用前の日に水に戻して塩出をして充てん作業をやりやすくするために一本、一本ほぐしておかなければならないので人手を用いることから、皮や腸の主成分であるコラーゲンを

再生して薄いフィルム状にした可食性のコラーゲンケーシングと代替される傾向にあります。また、最近ではスキんレスソーセージが普及していますが、これはセルロースを特殊加工して作ったセロファンに似た通気性のあるノジャックスケーシングに練り合せたソーセージ原料肉を詰め、燻煙、水煮、冷却を行なった後、機械でケーシングを剥がします。ですから表面にケーシングを剥がすときに切った跡が残っています。アメリカではウインナーソーセージ、フランクフルトソーセージの九十%以上がこのケーシングを用いて製造されているそうです。しかし、スキんレスソーセージには天然腸を使用したソーセージ特有のパリッとした歯ざわりがないので、この感触を好むヨーロッパではあまり製造されていないようである。我国においてもスキんレスソーセージの需要は飽和点に達し、可食性のケーシングに詰めたソーセージが再び見直されてきた。しかしながら今日のような人件費並びに原料肉の高騰に対処するためには生産の合理化、機械化が望まれる訳であるが、天然腸は取扱いに人手を要すること、強度と長さが不足していること、サイズの揃った良質の腸を大量に安定供給するのに限度があること等々から、将来は天然腸の特質を持ち、欠点を補った前述のコラーゲンケーシングに代替される運命にあることは否めないと考えられる。

ネパールを訪ねて

乳利用学研究室
講師 古川 徳

ネパールの北辺はヒマラヤ山脈を境としてチベットと接し、東辺はシッキムとインドの西ベンガル、そして南辺と西辺はそれぞれインドのビハール州とウッタラプラデシュ州に接しており、経度八十度十五分から八十八度十五分、緯度二十六度十五分から三十度三十分の間に位置する東西約八五〇キロメートル、南北約二〇〇キロメートルの長方形の国である。総面積は一四〇、七九八平方キロメートルであり、耕地面積がその約十四%を占め、草地もまた約十四%である。総人口約一、二八八万人で、その九二%以上が農業に従事し、農業生産が国内総生産の約六四%、輸出の七五%を占めている。また、気候的に大きく次の三つの地域に別けられる。すなわち、(一)タライ平野……インドに接する海拔三〇〇メートル以下の地域、(二)サブ・ヒマラヤ山地……ネパール中央部で海拔六〇〇から二、五〇〇メートル、さらに(三)ヒマラヤ山岳帯……二、五〇〇メートル以上の地域である。

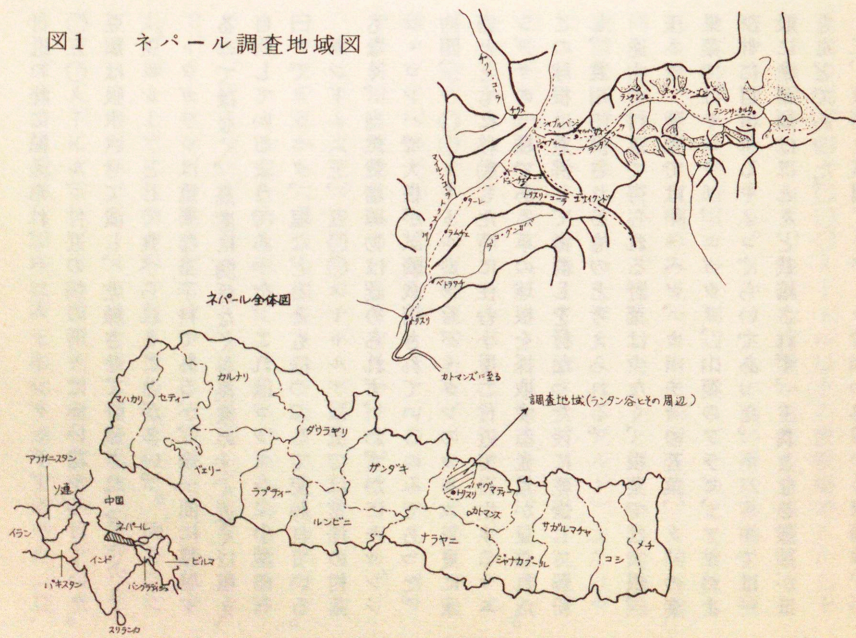
ネパールを含め、ヒマラヤ山系に住む人々は古くから独特の乳利用文化を持ち、そのなかでもヒマラヤ山岳地

帯のナク(ヤクの雌)乳から製造されるチーズは西欧原産のものとは外観、風味、組織が異なっており、この種のチーズは歴史的にみてインドにその加工技術の起源を有しているといわれる。

そこで、今回機会を得たのでネパールの生活文化の現況を首都カトマンズのあるヤグマティ県のランタン谷とその周辺(図一)に求めてみたので、ここでその一部を紹介してみたいと思う。

一、栽培植物 この地域に栽培されていた穀類は稲、トウモロコシ、シコクビエ、アワ、小麦、大麦、ソバおよびセンニンコクの八種類で、水稲の栽培は一、八四〇メートルのラムチェ周辺までの山腹の急斜面を利用した段々田で見られた。ネパールにおいて稲に次ぐ重要な作物であるトウモロコシは稲の栽培地域とも重複し、水利と日照条件の悪い山腹の斜面から三、〇〇〇メートル付近まで栽培されている。収穫後は穂軸のまま軒下に吊したり、庭先や畑の蓆にひろげて乾燥し、軒先の大きな円筒形の竹カゴに収めて貯蔵されていた。また、シコクビエは苗代から収穫前および収穫後の切株の残ったトウモロコシ畑の間に栽培されるか、畑一面に直播栽培されるようである。今回の調査で最も印象的な作物は俗に仙人が食べるという赤い花序が細長く垂れ下がったセンニンコク(ひもけいとうの仲間)で、二、〇〇〇メートル

図1 ネパール調査地域図



ル付近の畑の所々に栽培されていた。高度が高くなるにつれて小麦、大麦およびソバが重要な穀類となり、小麦は約二、〇〇〇から三、五〇〇メートル付近に、ソバは一、五〇〇から三、五〇〇メートル付近で栽培されていた。ランタンにおいて、大麦の粒のついたままの穂（穂づみしたまま）を薄く堆積し、一端から火をつけて燃やす「燃き落し法」というめずらしい麦炒り法が見られた。これらの雑穀類は収穫した後天日乾燥し、穀筭を用いる方法、家畜の足踏みによる方法や杵でつく方法で脱穀され、炒るか生のまま製粉され、チャパティ（小麦粉の薄焼き）、キール（ソバ団子のミルク煮）、トウクバ（煮込みうどん）、ジャクバ（チベット風すいとん）、ツァンパ（炒り粉）およびモモ（蒸しギョウザ）として食べられる。また、米、トウモロコシ、シコクビエはチャン（地酒）に加工されて飲まれる。

ジャガイモもトウモロコシとともに高地において重要度が増し、栽培面積も多くなる傾向がみられた。特にシン・ゴンバ（三、四七六メートル）では穀類は全く栽培できず、主食として白い系統と赤い系統の二種類のジャガイモが栽培されていた。食用法は茹でて皮をむき、トウガラシを主体とした調味料を着けて食べるか、アルーカリ（ジャガイモカレー）として食べる方法である。豆類では大豆がボガジュンダ（一、八九〇メートル）

最も多く、次いで水牛、山羊と綿羊の順であり、ヤク、ヤクとコブ牛の交雑種、豚および馬は非常に少ないようである。家禽では鶏が主であり、極く一部でアヒルが飼われていた。

水牛は五〇〇メートルから二、五〇〇メートル付近（まれに約三、〇〇〇メートル）までの地域で主として厩肥と使役を目的として飼われ、低地では河岸や田に、高地では畑の周辺や路上に放牧されるが、夜間には家屋の一階部分または牛舎で舎飼いされていた。ヒンズー教において牛は神聖な動物としてあつかわれる為、カトマンズ盆地などのヒンズー教地域では町中の路上でも多く見かけられた。低地（二、〇〇〇メートル以下）ではインドコブ牛と思われる牛が多く、カトマンズの国立博物館前の草地やバドガオンの練兵場近くの草地に乳用として群飼されていた。これより高い地域ではヒル・キャトルと呼ばれるやや小型のコブ牛が使役、厩肥用として山の斜面や路上に三から五頭づつ放牧されており、さらに高い地域でも厩肥、乳用として山の斜面や草地に群飼されていた。このヒル・キャトルのうち、毛がやや長く、白黒斑のあるキルコ・タイプの子牛がシャルペガオン付近で見られたが、品種的には交雑種が多く、体毛の色、斑、体型および角などの外ほうから牛の品種を判定することは困難であった。

付近の畦に植えられ、ベニハナイゲンがドンチェ（二、〇五〇メートル）付近の畑の所々に赤い花をつけていた。豆類は吸水させて潰し、乾燥させて貯蔵され、ダルカリ（豆カレー）として食べられることが多い。

トウガラシは重要な香辛料であるが、畑一面に栽培するのではなく、高度に関係なく各農家のすぐ近くに植え、自給しているようであった。これはゴツツン（小型の石臼）でニンニク、塩などとともにつぶして使われている。ムンドム（三、五〇〇メートル）以上では常任の村落もなく、当然栽培植物は認められず、わずかにキャンジン・ゴンバで大根が試験栽培されているのみであった。約四、一〇〇メートルのヌマバ・ダンのカルカ（夏に家畜とともに移動した時に住む小屋）付近で自生するマムシングサの一種である草の球根を採取する光景が見られた。この球根は煮沸して毒消しを行なった後に乾燥して製粉し、食用に供されるものと考えられる。

途中の村落で得られる野菜は少なく、根菜では大根、玉ネギ、葉菜ではキャベツ、カボチャの若菜、ソバの葉、果菜ではキュウリ、ニガウリ、山菜のワラビ、フキおよび林に自生するキノコぐらいであった。ネパールでは一般に葉菜類はほとんど栽培されず、主食となる穀類がほとんどであった。

二、家畜と家禽 ネパールで飼われている家畜は牛が

ナク（ヤクの雌）とゾン（雄ヤク×雌コブ牛、雌）は夏期の為、四、〇〇〇メートル以上の放牧場で八から十頭づつ飼われており、午前七時頃から搾乳を開始し、午前十時頃に終了する。日中はさらに高い所に移動して放牧され、午後三時頃カルカ周辺に降りてそのまま放牧されるが、子牛は夜間のみカルカ内に保留され、人間と共同生活を行っていた。搾乳したナクとゾンの乳は加熱殺菌後に前日残しておいたダヒ（ヨーグルト）またはマヒ（バターミルク）を加えて発酵させ、ダヒとされる。

このダヒからマツカム（バター）が製造され、分離されたマヒからニヤカムやチュルビーなどのネパールチーズが製造される。牛との交雑種であるゾブキヨ（雄ヤク×雌コブ牛、雄）は三、四八〇メートルのゴーラ・タベラで農耕用に使役されているのを見かけただけである。

豚はカトマンズの河岸のチベット部落の二ヶ所とラニパウワで五から六頭づつ飼養されているのを見かけた。ネパール人は宗教的な事由により聖牛である牛は無論のこと、豚についても食肉としては重要視していないようである。カトマンズの食肉店では一日に一頭の山羊が解体され、頭とともに枝肉の形で取り扱われていた。例外的にトリスリの河岸でヒンズー教を信じない民族（多分、チベット人）によるコブ牛の屠殺光景を目撃することができた。その屠殺解体順序は表二に示す通りであった。枝

表2 牛のと殺法(トリスリにて)

- (1)牛のけい部にククリ(グルカ刀)を打ち下し、仮死状態にする。
- (2)ククリでけい骨をはずし、胴体と頭を切り離す。
- (3)胴体側の心臓にめがけてククリを入れる。
- (4)頭部および胴体部分から出る血液を受器に受けとる。
- (5)頭部、胴体部分がかくれるように稲ワラで被い焼く。
- (6)胴体を反転させ、再度ワラをかけて焼く。
- (7)ククリをよく研ぎ、焼けた皮膚をこするようにして除く。
- (8)下腹部分から胸部にかけて切り開く。
- (9)消化器官を取り出す。胃は切開して内容物を出し、腸も内容物をしごいて出し、川で水洗する。
- (10)つぎに、肝臓、心臓、肺などを取り出した後、胴体を腰骨の部分で2等分する。
- (11)この大きな肉は肉店の店さきでナタにより適当な大きさに切断して販売される。

特に動物性蛋白質の低摂取量は家畜の飼養頭数の要因よりは食生活の習慣による要因の方が大きいと考えられる。ここで述べたネパールをはじめ南アジアの山岳地域は乳利用の発祥地帯と考えられる西南アジアに近く、地理的な制約から農耕のみでなく、牧畜への依存度も高く、今日なお古くからの乳利用の形態を堅持し続けており、乳利用文化の伝播を知る上で興味深い地域である。

表1 ネパールチーズ

チーズ名	製造法と特徴
ゾマール*	山羊乳を一週間位カメ内で自然酵酸させて製造する淡黄白色の軟質チーズで、非常に強い臭気を有する。このチーズはシエルパ族のみが製造し、スープとして食す。
ニイヤカム	ダヒからマッカムを製造した後の脱脂酵乳を加熱し、沈殿する部分を集めて圧搾した後、ザル上で天日乾燥して製造する指型(太さ0.5cm、長さ約4cm)をした黄かっ色の超硬質チーズである。
チェルビー*	製造法はニイヤカムと同様であるが、型は直径約1cmの不定形で、かっ色を呈した硬質チーズである。シエルパ族が製造する。
ドルカ	製造法はニイヤカム、チェルビーと同様であるが、型は長方形(長さ約1.5短径約1.0cm)で、かっ色を呈した硬質チーズである。
チュルセフ	製造法はニイヤカムなどと同様で、小粒子状(砂状)をした黄かっ色のチーズであり、ツェンパ(いり粉)に混合して食す。

* このチーズはエベレスト周辺のシエルパ族が製造する。

ニイヤカム、ドルカはいずれもネパールでポピュラーな乾燥チーズである。チュルビーとドルカは口にふくみ、チューインガムと同様にかむことにより弾力がある。

ネパールのカトマンズではドルカがタバコ店や菓子店などで売られており、子供達のチューインガムである。

肉はぶつ切りにしてスープ及びカレー材料に用いられ、肉片は細かく引き肉状に切りモモ内の具とされる。またチベット系ネパール人は特に綿羊の脂肪を第四胃に詰めて罫炉裏上に吊し、冬季のスープ原料として重要視する。しかし、家畜は高価である為に山岳地域では年に数度、一頭の家畜を数軒の家庭で購入し、屠殺解体して分配する。晩秋に解体した家畜の肉は罫炉裏上につるして乾燥し、冬季の食料とされる。

馬はドンチュに乗馬用として小型のものが一頭飼われていた以外にはキャンジン・ゴンバよりやや高いランタン飛行場跡の河岸に二十数頭が放牧されていただけである。馬は荷物の運搬に使われ、肉は全く利用されていない。鶏は各村落で見かけたが、飼養羽数は少なく、一村落の内数軒の農家で地鶏が三から五羽づつ庭先に飼われている程度であった。日中は放し飼いで田畑の虫、残飯や牛糞中の穀粒を拾い食いさせ、夜間は逆さにした竹カゴ内や牛舎内で飼う方法がとられていた。産卵数は一ヶ月に十から十五個程度と少なく、主に雄鶏と雌鶏を肉用にしている。

三、乳の利用 カトマンズ市内にはデリー・サービスと呼ばれる牛乳小売店が数ヶ所あり、ここでは各自がビン、ヤカンやポリ容器を持参して行列し、午前九時と午後三時頃の計り売りを待っていた。販売価格は三〇〇ミリ

リットルで一、四ルピー(約二十六円)であった。ネパール人が好んで食べる乳製品にダヒがあるが、これは素焼きのドンブリ状の容器に入れ、三角形に竹を組んだ台座にのせて重みかさね、竹ザル上に乗せて天秤棒で担いで市内を販売して廻っている商人または食料品店(ダヒ専門店と揚げ菓子製造・販売している店)などで購入できる。ネパールにおける伝統的なバター製造法には三種類あるが、ムバマ・ダンのカルカ内では木製のタル内にダヒを入れ、攪拌翼のついたチャーナーで約一時間攪拌して、上面に浮ぶバター粒子を集める方法であった(図二、三)。ネパール特有のチーズ(表一)であるニヤカム、チュルビーやドルカは上述の方法でバターを製造した後に残るマヒをゆっくり加熱し、生じる沈殿を集めて圧搾した後、天日乾燥したものである。このうち、代表的なドルカはカトマンズ市内のタバコ店やバザール(市場)の食料品店の片端で少量づつ売られていた。

四、エネルギー摂取量 一九七八年のFAO統計によるとネパール人一人当りの一日の摂取カロリは植物性食品から一、九三二キロカロリ、動物性食品から一三八キロカロリ、計二、〇七〇キロカロリであり、動物性食品から得るカロリは日本人の約半である。また一人当りの蛋白質と脂肪の摂取量はそれぞれ四九、五グラム、二七、三グラムであり、日本人の約半の摂取量である。

図2 バター製造に用いるテキ(バター製造用チャナー)

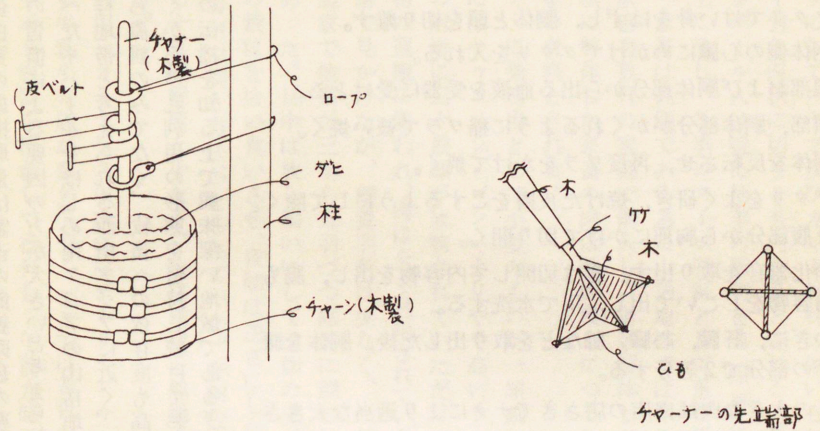
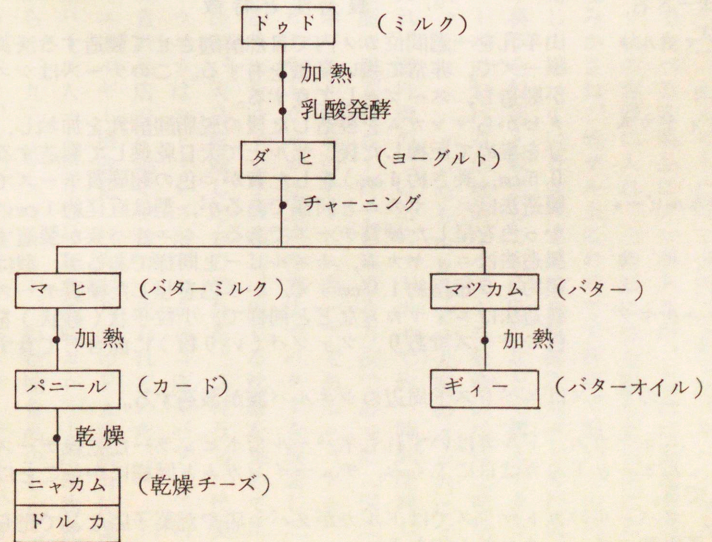


図3 ネパールにおける伝統的乳製品の製造工程



研究室だより

昭和五十七年度
卒業論文題目
科目

家畜育種学研究室

鈴木教授、田中教授、天野助教授



家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝・育種学、特に血清学的、細胞遺伝学的、分子遺伝学的な見地から、広範囲にわたり研究活動が実施されております。

当研究室では室長の鈴木正三教授をはじめ田中一栄教授、天野卓助教授を中心に、大学院生六名、研究生二名、学部学生四十五名で構成されており、室員各自の自覚と互いの協力により、それぞれ目標に向かって頑張っております。

研究室における日常の活動は、実験動物の飼養管理による家畜との接触や毎週行われているセミナーのほかに、卒業論文の研究・実験における問題を解決する為に、昼

夜を問わず熱心に討論されております。さらに研究活動は学内だけに止まらず、先生方は学会や研究の為海外に出張されたり、また学生も海外調査や他大学および他研究機関に出向いて研究を行っております。

研究室における年間の主な行事としては、新入室員歓迎会、定期総会ならびに特別講演会、収穫祭への参加(文学術展・模擬店)、研修旅行(五十七年度は、神奈川県畜産試験場およびいのしし村の見学)、卒業論文発表会などがあります。

因みに昭和五十七年度の卒業論文題目は次の通りです。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
チ79 007	天田 祐一	血液蛋白質変異からみた牛系統間の遺伝的差異	天野
チ79 034	榎本 歩光	水産生物の遺伝育種学的研究、特にムラサキガイの蛋白質多型について	天野
チ79 065	桑原 俊明	わが国のホルスタイン種の正常発育値に関する統計学的分析	天野
チ79 075	小屋敷正実	ランドレース種の産肉諸形質における統計遺伝学的研究	田中
チ79 076	近藤 彰敏	ポリアクリルアミドゲル電気泳動による牛ならびに山羊の蛋白質変異の分析	天野

チ79 081	齊藤 万里	マウスの初期発生における人工キメラに関する研究	田中 石島
チ79 090	鈴木 拓郎	哺乳動物の融合細胞に関する研究	田中
チ79 100	大長 修	キヌザル科 Callithrixidae における3属の細胞遺伝学的研究	田中
チ79 125	永岡 敬朗	霊長類の体毛に関する形態学的研究	田中
チ79 132	長谷川聖喜	電気泳動像における家兎および野兎の血液蛋白・酵素の比較検討	田中
チ79 137	廣田 耕治	緬羊血清中の Allotype に関する研究	田中
チ79 138	広田 真杉	東南アジア系水牛の遺伝子構成に関する研究。特にフィリピン水牛について	天野
チ79 157	宮沢 厚	東アジアにおける野猪頭骨の地理的変異に関する研究	田中
チ79 167	山形 勝吉	豚血液の生化学的遺伝形質に関する研究	田中
チ79 168	山岸 洋彦	ホルスタイン種の審査得点に関する統計遺伝学的研究	天野
チ79 169	山崎 清人	ブタとイノシシの雑種に関する研究	田中
チ79 174	山元 昌敏	鹿児島県における黒毛和種の統計遺伝学的研究	天野

チ78 066	倉橋 正己	日本犬の形態学的研究	鈴木
チ81 604	佐々木康浩	ホルスタイン高等登録牛の泌乳能力と分娩季節との関連性に関する統計学的分析	天野
チ75 209	盧 暁龍	家兎および野兎頭骨の形態学的研究	田中

家畜衛生学研究室

近江助教授、渡辺講師



本研究室は、近江弘明助教授、渡辺忠男講師、鈴鹿茂美副手各先生の御指導のもとに、四年生二十二名、三年生二十一名、二年生二名、一年生一名、室員一同が一体となって活発なる研究室活動を行っている。

研究活動としては、室員各自希望する家畜、家畜別に分け、牛班、豚班、鶏班、実験動物班の四班に分かれ各家畜、家禽の疾病に対する予防法及び、糞尿処理など家畜衛生の研究を行っている。(家畜、家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去し、家畜、家禽の生命の延長をはかり、かつ生産を向上せしめることが、主な目的

である。

また、両先生が兼務しておられる本学家畜診療所においても、一般外来動物の診療を中心とした各種の研究活動が行なわれている。

その他研究室の活動内容は、年間行事として新入室員歓迎会、野球大会、収穫祭参加(文化展、模擬店)、親睦旅行、送別会、定例会、セミナーなどがある。

本研究室の大きな特色として、その研究内容は、言うまでもなく、室員各自が室員としての自覚と責任を持ち一人一人がその運営に、大きく貢献していることである。

このような、多面活動において学生生活の充実を計り室員各自の個性を引き出し、その個性を持ちより、研究室独自の個性を創造するという事に我々は、目標をおいている。

十一月には、新役員も発足し室員はますますはりきっている。

卒業論文題目

チ79 001	赤井 恵	豚の尿性状に関する研究特に発情時および妊娠時について	近江 鈴木(伸木)
チ79 006	阿部 明郎	斃死獣の腐爛防止に関する研究	近江 渡辺
チ79 008	新井 節子	家兎の耳疥癬に対する駆除法の検討	近江 渡辺

チ79 020	井上 幹夫	養豚地域における豚および人のトキソプラズマ抗体の保有状況	近江 鈴木(伸木)
チ79 029	氏家 照子	自然保護と農業振興について	吉村
チ79 039	大西 敦子	家畜の糞尿処理に関する研究	近江 渡辺
チ79 051	加藤 裕	豚の体表各部位における皮膚の組織学的観察	近江 渡辺
チ79 053	金丸 俊哉	実験動物における鉤虫の人工感染試験	近江 渡辺
チ79 058	吉川 裕康	ニホンカモシカの内部寄生虫に関する研究	近江 渡辺
チ79 071	小林 清隆	内部寄生虫卵人工感染犬の一般臨床所見ならびに血液性状について	近江 渡辺
チ79 089	鈴木佐重喜	牛乳房炎の予防に関する研究	近江 渡辺
チ79 090	鈴木 聡樹	ホロホロ鳥の鶏病病原ウイルスに対する感受性に関する研究	近江 渡辺
チ79 094	瀬尾 貴代	薬物性肝障害の診断に関する研究	近江 杉村
チ79 098	瀬戸由美子	糸状虫の同定に関する研究	近江 中村
チ79 105	高橋 敏幸	電子顕微鏡による形態観察	近江 稲葉
		秋田県平鹿郡近郊における酪農の衛生対策	

79 107	高橋 雅子	ブタジラミ卵の発生に関する研究	近江 稲葉
79 111	田口 一温	古農書「農業全書」の九州に於ける分布状態の調査	島
79 112	武士恵理子	路上排泄犬糞の内部寄生虫について	近江 渡辺
79 135	浜野 栄一	愛媛県宇和島近郊における酪農の衛生対策	近江 渡辺
79 151	本田 英孝	牛の繁殖障害に関する研究 雌性生殖器の病理学的検査	近江 渡辺
79 153	松村 晃雄	ホロホロ鳥の鶏病病原細菌に対する感受性に関する研究	近江 渡辺
79 154	丸山 一延	土壌の変化が内部寄生虫卵の発育に及ぼす影響	近江 渡辺
79 158	宮畑 貴之	東京近郊における蚊の発生状況とマイクロフィリアの保有について	近江 渡辺
79 161	森 克樹	内部寄生虫卵の保存に関する研究	近江 渡辺
79 165	柳井 篤司	畜舎の細菌相に関する研究	近江 渡辺
79 178	依田 秀樹	愛玩動物の衛生管理に関する研究	近江 渡辺
79 188	中村 好宏	糸状虫症の診断に関する研究 ミクロフィリアリアの誘発法について	近江 渡辺

81 602	小澤 和広	外科的侵襲が家畜の血液性状に及ぼす影響	近江 渡辺
78 096	清野 緑	子牛の下痢に対するトリメトプ リム製剤の治療試験	近江 渡辺
75 039	大竹 文夫	群馬県沼田市における家畜の糞便処理に関する実態調査	近江 渡辺

畜産経営学研究室

吉村教授、桜井教授、石岡講師



畜産経営学研究室は、昭和三十五年砂川泰夫先生が創設され、開室二十三年になる。現在、砂川先生の意を受け吉村喜彦教授、桜井守正教授、石岡宏司講師、諸先生の元に学生（三年十九名、四年二十一名）が研究室活動を行なっている。

当研究室は、畜産経営学を中心に、酪農班、肉牛班、養鶏班、養豚班の四班に分れ、各方面からゼミ活動を行っている。さらにそれらを総合した週一回の全体ゼミを行い、又、原書、経済ゼミ等も行なっている。日常の活

79 009	荒木 正己	家畜糞尿処理について	桜井
79 017	伊藤 久子	酪農家の労働形態の実状と改善	桜井
79 018	伊藤 裕彦	地域類型別産地の養豚の展開について	桜井
79 019	伊藤 誠	牛乳消費拡大について	桜井
79 021	猪口 由美	牛肉の輸入自由化問題と日本畜産	桜井
79 024	岩崎 浩一	輸入飼料穀物と畜産との関連について	桜井
79 026	岩崎 洋一	群馬県地方における養豚経営と糞尿処理問題の対策	桜井

卒業論文題目

動は以上であるが、春、夏の研修旅行、収穫祭参加、畜友会ソフトボール大会参加など室員相互の親睦も、他の研究室以上に深められている。卒業後も、OBで「一歩会」を作り、卒業後も相互に連絡を取り合っている。当研究室の大きな特色として、自分から行う研究室であるという点で、畜産経営の範囲であるならば、自分の好きな研究が出来るという事である。したがってその反面研究に意欲があり、目標がある人でないと供に活動は出来ない。又、畜産経営学が、畜産を実際に行う際、必要な学問である為、毎年五十名の自営者が出て、先輩方の実践的な話が聞くことの出来る場でもある。

79 035	遠藤 正雄	豚肉の需要と流通	桜井
79 042	岡田 真	宮城県における酪農の展開について	桜井
79 045	小野 桂一	酪農の地域性について	桜井
79 054	金坂江利子	綿羊飼育経営に於ける実状と展望	桜井
79 079	斉藤 均	都市近郊養豚の現状と展望 神奈川県横須賀市における	桜井
79 097	瀬戸 修	酪農経営における負債の問題	桜井
79 104	高橋 利幸	畜産経営におけるコンピュータの導入について	桜井
79 115	力石 悦志	都市農業と農地の問題	桜井
79 123	中沢真一郎	群馬県柏川村における酪農の現状と展望	桜井
79 127	永友 伸二	宮崎県児湯地区における養豚の現状と問題点	桜井
79 128	西口 昇治	大規模和牛肥育の経営分析に関する研究	吉村
79 131	長谷川 伸	軽種馬の牧場経営に関する研究	吉村
79 134	浜田 勘木	首都圏の一農村における畜産の変遷	吉村
79 136	林 光宏	軽種馬牧場の草地管理について	吉村

チ79 140	深田 尚樹	酪農電化センターの現状と展望	吉村
チ79 150	細田 博幸	房総地方における酪農の変遷	吉村
チ79 160	室野井八東	福島県会津若松市における畜産業の現状と展望	吉村
チ79 162	森永 秀実	現今の酪農経営におけるジャージ種導入の経済性について	吉村
チ79 163	八重樫 哲	乳牛資質改善の酪農経営に及ぼす影響	吉村
チ79 164	安井 敏昭	若令肥育における黒毛和種とホルスタイン種との収益性の比較	吉村
チ79 166	柳橋 円	秋田県南地区における酪農の実態と展望	吉村
チ79 175	横山 隆英	牛乳過剰下における乳業メーカーの対応について	吉村
チ79 180	若月 一之	都市近郊酪農成立に関する一考察	吉村
チ81 213	山崎 雅士	牛肉の部分肉流通について	吉村
チ78 215	宇治田正樹	ブラジル、パラナ州の日系農場の発展過程と今後の課題	吉村
チ79 121	鳥居 昭子	酪農経営の財務分析に関する研究	吉村
チ78 143	羽場 茂宏	肥育期における乳用雌牛の飼養標準と飼料経済について	吉村
チ78 163	町田 高明	群馬県における肉牛生産の現状と展望	吉村

家畜飼養学研究室

杉村教授、伊藤助教授、栗原講師



今日我国の畜産界は、世界的な穀物需給不安定による飼料価格の値上りの懸念、食品安定上の要請からの配合飼料添加物の規制強化など依然として厳しい環境にある。そのような中で飼養学及び飼養研の占める位置は、ますます重要になりつつある。

飼養学は、学問的分野としても広い範囲にわたっている。すなわち家畜飼養・管理・飼育という三本柱のもとに杉村敬一郎教授、伊藤澄磨助教授、栗原良雄講師、関恒雄副手を中心とした指導のもとに種々の研究活動を行っている。主な研究テーマとしては、アミノ酸、脂肪酸、エネルギー代謝、サイレージ、牧草、飼料作物関係、飼料管理等がある。

研究室行事としては、富士農場に於ける畜産実習、群馬県畜産試験場に於ける家畜管理実習並びに、一般飼料成分分析演習等を行っている。また室員相互の親睦を計るために、野球大会、研修旅行、餅つき大会等を行っている。

現在の室員数は、杉村先生、伊藤先生、栗原先生、関先生、大学院生四名、四年生二十名、三年生二十六名である。

卒業論文題目

チ79 010	有富 由子	成兔における適性エネルギー量	栗原
チ79 011	安藤 正夫	成兔における基礎代謝量と維持に要するエネルギー量	栗原
チ79 012	飯沼 康夫	パヒアグラスの神奈川県下における栽培に関する研究	大谷
チ79 022	今尾 真之	アンゴラ種(成兔)における粗飼料の消化試験	栗原
チ79 037	大谷 浩	細胞内小器官におけるアミノ酸輸送の影響	杉村
チ79 049	帯谷 俊彦	アンゴラ種(成兔)における穀類の消化試験	栗原
チ79 057	岸上 裕司	成兔における適性蛋白質質量	栗原
チ79 059	紀平 英雄	アンゴラ種(成兔)における糖類の消化試験	栗原
チ79 082	佐藤 清志	麦稗サイレージの調整時における尿素添加が品質に及ぼす影響	大谷
チ79 092	鈴木 正人	飼料中の粗繊維の種類が幼雛の成長および消化率におよぼす影響	栗原

ぼす影響

チ79 108	高橋 正美	麦稗サイレージの調整時における尿素添加が飼料価値に及ぼす影響	大谷
チ79 110	滝沢 栄喜	飼料中の粗繊維の種類が幼雛のエネルギー代謝におよぼす影響	栗原
チ79 126	長田 安弘	ラット腹水肝がん細胞および赤血球におけるアミノ酸輸送のトリウムイオン依存性とグルコースの影響	杉村
チ79 183	入鹿 恵子	飼料中の粗繊維の種類が幼雛の消化管および消化管内容物におよぼす影響	栗原
チ79 190	宮本 正展	精製飼料中の炭水化物の相違が幼雛の成長及び体組成に及ぼす影響	栗原
チ78 064	清田 純男	精製飼料中の炭水化物の相違が脂肪酸組成に及ぼす影響	栗原
チ81 603	大和田浩幸	ルンメン内発酵の制御に及ぼす影響	淡谷
チ81 607	石間戸芳朗	サイレージの硝酸態窒素の消長ならびに微生物相に及ぼす影響	淡谷

及ぼす影響

- #81 609 境田 康弘 イノブタの代謝に関する研究 伊藤 鈴木(伸)
- #78 111 田中 宏和 麦稗サイレージの調整時に於ける尿素添加が嗜好性におよぼす影響 伊藤 大谷
- #78 131 中村 一也 問題児指導の方法論的研究 岸田 岸田

家畜生理学研究室

渡辺教授



畜産学の中で一つの大きな分野を占めている家畜生理学の内容は実に多義にわたっています。そんな中において我が家畜生理学研究室では「家畜・家禽の内分泌生理に関する研究」「家畜・家禽の代謝に関する生理遺伝学的研究」「家畜・家禽の体液に関する免疫学的並びに血清学的研究」「家畜・家禽の細胞膜に関する研究」の四つを主要テーマとし、それぞれ畜産物の生産性向上という畜産学における一大目標に向かって日夜研究に励んで

います。

室員の構成は渡辺誠喜教授をはじめとして岩崎説雄副手、丸野師寿江副手他院生一名、四年次生十二名、三年次生十二名よりなり、割合小さな所帯であります。飼育家畜は綿羊、山羊、兎、鶏、鴨、アヒル、と種類も飼養頭羽数も共に豊富であるため、これらの日常管理に大変苦勞することもありますが、その半面これら動物に直接接する機会が多く、学生室員自身の経験から多くの事柄を学び取ることが出来て非常に有意義であり且つ楽しいものがあります。室員の構成人数が比較的少ないため学生一人一人の存在が大きく、かつ重要なものとなっております。それだけに自分というものを磨いていくことのできる研究室だと思えます。

研究室の年間行事としては、新入室員歓迎会、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生歓迎会などを行なう一方、年間を通じて週一回の室員によるゼミナール及び談話会、学外講師による特別講演会、富士農場実習などがあり、これらの成果を室報にまとめて発行しております。

卒業論文題目

- #79 013 池田 典代 家禽の産卵に伴う赤血球膜の生理化学的变化に関する研究 渡辺
- #79 028 宇佐美 望 家禽の肝RNAに関する比較免疫学的研究 渡辺
- #79 031 上野 信之 アヒルにおける属間雑種の成長 渡辺

曲線と血清蛋白質について

- #79 044 小田川宣弘 白色レグホン種矮性系の成長曲線及び産卵成績について 渡辺
- #79 046 小野 浩一 めん羊における免疫グロブリンのアロタイプに関する研究 渡辺
- #79 056 神田 幸子 馬赤血球中の遊離アミノ酸に関する研究 渡辺
- #79 119 戸村 智子 ウズラにおける羽色の遺伝的変異系並びに神経異常系の血液蛋白質の多型に関する研究 渡辺
- #79 145 藤田 真司 野鶏における血液及び筋肉中の蛋白質に関する研究 渡辺
- #79 159 村瀬えるみ ウズラにおける羽色の遺伝的変異系並びに神経異常系の血液蛋白質の多型に関する研究 渡辺
- #79 171 山下 博久 ウズラの免疫グロブリンに関する研究 特にIgGとIgNの分子量並びに加齢に伴う推移 渡辺
- #81 606 浅見 毅 めん羊の成長に伴う赤血球成分並びに血清IgG量の変化に関する研究 渡辺
- #78 117 辻 秀憲 白色レグホン種矮性系の血清酵素の活性値の推移について 渡辺

家畜繁殖学研究室

一戸教授、石島教授、門司講師



我が家畜繁殖学研究室は、一戸教授、石島教授、門司講師、河野副手、岡本副手の指導のもと、大学院生一名、四年生四十五名、三年生二十八名の室員で構成されています。室員は、各自の希望する家畜・家禽別に、牛班、豚班、家禽班、実験動物班の四班に分かれ、(一)家畜の繁殖生理に関する研究、(二)家畜の人工授精に関する研究、(三)家畜の性現象の人為支配に関する研究といった主要研究テーマをかがげ、各動物に愛情をそそぎつつ、日夜研究に励んでおります。

また、当研究室においては、研究室の中だけでなく、広く世界的にも視野を向けており、特に近年では、フィリピン・スリランカなど東南アジアにおける水牛及び野鶏の研究が毎年行われ、室員を外地に派遣し、フィリピンにおける人工授精の確立及び在来鶏・野鶏の生理を繁殖学的に究明せんと日夜努力を積み重ねています。

また、各動物別に分かれ週一回のゼミナールがあり、文献を読んだの討論、現在注目を集めている報告について

て、卒論の説明その他中広く知識を吸収する為に努力しています。
 その他、大学生生活につきもののコンパも多く行われ、大人数をかかえた我が研究室では、室内あふれんばかりの熱気のある大コンパとなります。とにかく楽しい研究室です。

卒業論文題目

79002	赤岩 治	乳牛における椎骨間測尺値と繁殖能力との関連性について	荻原
79014	石井 義信	ヤマセミの繁殖期に見られる諸行動および造巢場所選択について	一戸
79015	一ノ瀬松美	牛の雄性生殖器に関する基礎的研究	門一戸
79023	今西 美佳	牛と水牛における精液の化学的組成について	門丹羽
79030	浦井 奉文	牛の受精卵移植について、ホルモン処理後の発情回帰	一戸
79033	江藤 哲実	宮崎県下における豚の繁殖に関する実態調査	門司
79036	大高 篤	家兎およびゲッ歯類胚の簡易急速凍結保存に関する研究	石島
79038	大塚 道夫	牛の受精卵移植について、特に過剰排卵誘起処置に対する卵巣反応について	小林一戸

79041	大矢 一茂	水牛精液の凍結保存に関する研究	門大谷
79047	小野 拡美	過排卵処理ラットにおける処女分割卵の形態分類	石島
79055	兼次 邦浩	スナネズミ胚の体外培養に特に培養液中のエネルギー源の検討	石島
79060	金 純	ラットにおける受精卵の非外科的移植に関する研究	石島
79066	小泉友紀恵	過排卵処理家兎の妊娠におよぼすLH-RH前処理の影響	石島
79073	小室 秀行	豚精液の低温保存に関する研究	門丹羽
79074	小森 郁夫	乳用種育成牛の代償性発育にもなう血清サイロキニンレベルの変化と初回発情との関連性について	小林一戸
79077	近藤 忠博	熊本県下における褐毛和種の繁殖状況について	門丹羽
79085	庄司 和則	マウスにおける受精卵移植に特して偽妊娠誘起に関する研究	門丹羽
79088	鈴木 兼浩	牛および水牛精子の微細構造に関する研究	門丹羽
79093	須藤 幸広	豚精液の凍結保存に関する研究	門丹羽
79096	説田いずみ	ハムスターの初期胚の培養に関する研究	石島

79106	高橋 藤和	豚精液の低温保存に関する研究	門丹羽
79109	滝沢 功	雌鶏の卵胞顆粒膜細胞におけるProgesterone合成の組織化学的研究	一戸
79113	武田 博久	ニホンウズラにおける排卵周期内の血清β1リポプロテイン・総脂質およびカルシウム値の変化	一戸
79116	手嶋 誠次	栃木県下における豚の繁殖に関する実態調査	鈴木門司
79118	富田 光洋	雌ニホンウズラの性成熟期における血清β1リポプロテイン・総脂質およびカルシウム値の変化	一戸
79124	中原 完	雌鶏の卵胞顆粒膜細胞におけるProgesterone分泌に関する研究	一戸
79139	深沢 糾	牛精液の生化学的研究	門丹羽
79141	深谷みどり	雌ニホンウズラにおける片側去勢が残存精巣におよぼす影響	一戸
79143	福田 正浩	過排卵処理マウスの交尾率・妊娠率の改善に関する研究	石島
79144	藤野 茂樹	雄鶏における血中Testosterone濃度におよぼすLH及びPRL投与の影響	一戸
79146	渕野 明子	雄ニホンウズラにおける精巣間	一戸

79147	古田 敦久	スナネズミ卵子における体外受精に関する研究	石島
79173	山本 明子	ラットにおける子宮内Deviceに関する研究	石島
79177	吉田 敏男	ゴールデンハムスターにおける胎児生存性におよぼすHCGの影響	石島
79179	与那嶺篤哉	沖繩における闘牛の飼養実態	石島
79184	大城 英隆	過排卵処置マウスの妊娠維持におよぼすHCGの影響	石島
79502	山下 晴子	各種哺乳動物の卵胞顆粒膜細胞の比較組織学的研究	石島
79601	小野寺政一	HMGによる家兎の過剰妊娠に関する研究	石島
79605	柿崎 富久	数種の哺乳動物における性周期及び妊娠時の血液成分の比較	石島
79611	小田 智	豚精液の凍結保存に関する研究	門丹羽
79714	秦 篤史	神奈川県下における豚の繁殖に関する実態調査	門司
79719	宮本 間勉	雄ニホンウズラの精巣5-β-Hydroxysteroid dehydrogenase活性の検出	一戸

畜産物利用学(肉)研究室

鬼原教授、松岡講師



畜産物利用学(肉)研究室は、通称「肉研」と呼ばれ、鬼原教授、松岡講師の御指導のもとに、四年生二十四名、三年生三十三名という大所帯で構成されていますが、一人ひとりの自覚が強く、自分の置かれてある立場をよく理解し、密度の濃い実験を日夜行なっています。

今日の畜産界において、食肉加工肉を含めた食肉産業は、高い地位を占め、日々その発展成長が著しい部門です。当研究室では、その食肉界に新風を送り込むべく、家畜家禽肉の肉質に関する研究、肉の凍結保存に関する研究、肉加工上の諸問題に関する研究など、いわゆる「肉の化学」を微細に追求すべく活動しています。また例年、収穫祭においては、肉製品の製造及び販売を行ない、地域住民との暖かい結びつきを行なっています。

以上のように、当研究室では、問題解決のためには昼夜を問わない、という室風が受け継がれ、四年生は卒業論に、三年生はその実験手伝い等に励んでいます。

卒業論文題目

79102	高野 重明	豚肉の凍結貯蔵に関する研究 凍後の肉質の変化	松岡
79114	田村 貴	食肉の脂質酸化細菌数におよぼす嫌気包装の影響	鬼原
79130	則武 新吾	各種魚肉配合ソーセイジの品質に関する研究	鬼原
79133	花土 博文	動物性脂肪の酸化に及ぼす亜硝酸の影響について	鬼原
79142	福井 健	豚肉の栄養成分に関する研究 一般成分及び単純脂質と複合脂質の脂肪酸組成	松岡 (伸木)
79148	古谷 昭二	豚肉、鶏肉(胸筋)の細菌数に及ぼす凍結温度及び凍結保存の影響	鬼原
79149	細川 京子	ホロホロ鳥再凍結保存中の変化に関する研究	鬼原
79152	牧野 喜朗	混合ソーセイジの保存性向上に関する研究	鬼原
79176	吉池 栄	植物性タンパク質添加ソーセイジに関する研究	鬼原
79186	仲川 京子	貯蔵した豚肉、鶏肉におけるTB A値に対する加熱の影響	鬼原
79187	中澤 信介	肉製品の風味及び保存性向上に関する研究	鬼原
79608	浜岡 俊哉	醸酵飼料の給与が豚肉質に及ぼす影響と肉成績および豚肉の理化学的測定値に及ぼす影響	松岡 (伸木)

79048 小畑 淳
ホロホロ鳥肉に関する研究
死後の変化について

79050 柏原 桂二
豚肉の凍結保存に関する研究
凍結肉を使用した肉製品の品質について

79052 金沢 裕
混合ソーセイジの保存に関する研究

79061 工藤 典久
スライス肉の短期間凍結貯蔵における再凍結の影響

79063 黒石 伸之
ホロホロ鳥肉に関する研究
死後の変化について

79068 小久保政弘
短期間の凍結貯蔵中における再凍結が肉質に及ぼす影響

79069 小谷 仁志
家禽肉の理化学的性状に及ぼす燻煙の影響について

79072 小林 純一
鶏およびホロホロ鳥の筋肉脂質成分並びにTB A値に及ぼす水煮および保持温度の影響

79086 白石 元志
豚肉タンパク質の描出性及びWATER BINDING CAPACITYに対する再凍結の影響

79099 曾根 正明
豚肉タンパク質の描出性及びWATER BINDING CAPACITYに対する再凍結の影響

79101 高木 正一
ソーセイジの凍結保存中の変化に関する研究

畜産物利用学(乳)利用学研究室

山中教授、古川講師



当研究室は、室長の山中良忠教授、古川徳講師両先生の御指導のもとに、大学院生一名、四年生九名、三年生十三名、準室員三名という少数ながらも室員全員がそれぞれ協力しあい、各自の研究題目に向って日夜励んでいます。

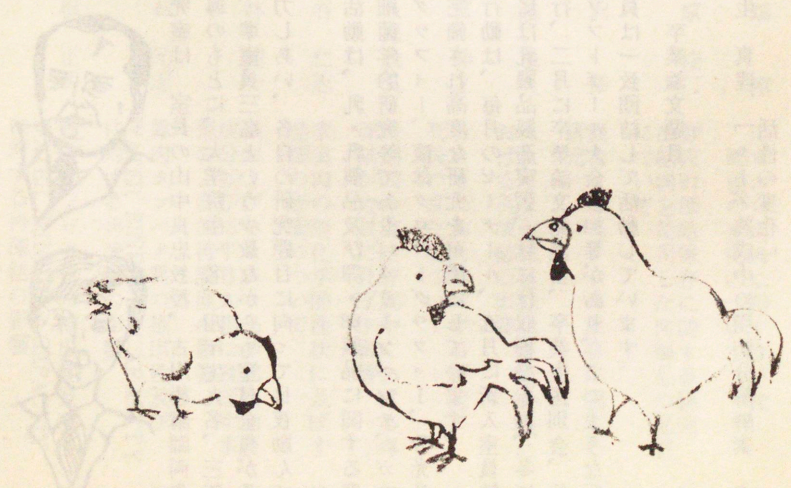
主な活動は、乳・乳製品及び卵・卵製品に関する理化学的、細菌学的研究等であり、クリンベンチ、ガスクロマトグラフィ、液体クロマトグラフィ、分光光度計等が完備され高度な研究を可能にしています。

主な行動は、毎月のゼミナール、五月に新入室員歓迎会、夏には乳製品製造実習、秋には収穫祭参加、冬には室員旅行、二月に卒業論文発表会、卒業生送別会、他に畜友会ソフトボール大会参加等があり、このような行事に、室員は一致団結して活動しています。

卒業論文題目

79003 麻生 真理
「チーズ熟成中の脂肪分解酵素活性の変化」

79027	上原万里子	家禽卵の脂質組成に関する研究	山中
79070	小西 節生	チーズ熟成中の蛋白質の変化	古川
79080	斉藤 弘幸	濃縮乳中における乳酸菌の消長	古川
79084	佐野 彰	鶏の肝臓組織と卵胞膜における脂質の変化	山中
79117	土肥 正明	濃縮乳から製造したカードの特性に関する研究	古川
79155	三石 恵子	チーズ熟成中の遊離脂肪酸の變化について	古川
79156	宮入 淳	家鴨卵の加工法と加工特性	山中
780501	西村 嘉壽	可食性被膜剤塗布による鶏卵の保存性の改良	山中



農場だより

雑録 (その1)
犬らしくない犬

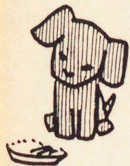
農場酪農部 大谷 忠

わたしが念願のマイホームを新築したのは数年前のことだが、あれこれと、わたしなりに苦労して設計したチヨコレイト色の造りは、一見洋風の感じがする住宅で、目を細め近視眼的に眺めると、まるでアラビアンナイトに出てくるような広びろとした原野にそびえ立つお城か、グリム童話の絵にあるお菓子造りの建物のようにみえる。ただ人は、人里離れた田舎の真中に建てたこのお城を、日本の代表的なウサギ小屋と言わらしいが、それでも軽トラック数台分の骨董品の家具を家族のみで運搬し、移り住んだ時は、王様か金持に変身した気がしたものである。借家住いの時からわが家にベッドが欲しくて、よく子供達からも猫や犬を飼いたいとねだられていたので、さつそくこの機会に番犬を飼うことにした。そこで可愛くもあり、強くもみえる犬は何種がよいかと相成って、シエパード、ドーベルマン、コリーの大型犬を主張したわ

たし、マルチーズかチワワを強く希望する娘と意見が分れたのが、結局、「予算的にどれも無理です」の妻の一言で偶然庭に迷い込んだ小さな捨犬を飼うことにした。さて、この雑犬が小犬の時は何種に近いのか判断つかなかったが、年齢が進むにしたがい、尻尾がきれいに丸まったシバ犬の呈を示し、みにくいあひるの子が白鳥になった話のように、このお城に合った貴品ある犬に成長したのである。喜んだ妻は非常に可愛がり、名をラッキィーと付けて我家のベットの仕上げてしまった。このラッキィー君、ひと並に「オスワリ」、「お手」、「マテッ」、「ヨシ」程度は判断するようだが、人間の比較ができないのか、誰が尋ねてきても吠えたり、うなったりすることはしない。新聞配達、郵便屋さんらに尻尾を振って、愛想がよく、特に押売り屋さんには大変感謝されている。したがって、玄関に張りつけてある「猛犬に注意」のステッカーは全く意味がないのである。また田園地帯をのどかに散歩でもしようと思つて迷子になるのが心配なのか、小便を2、3メートルおきにして行く用心深さ、つづいて大便をする時は逆立ちをしてやる犬なんか本当にみたことがない。おまけに、田舎の中のネズミ取りに熱中する犬なんか聞いたことがない。このように飼主に似て、気が弱くておとなしく、その割には気が多いラッキィー君が、たまに大声を出す時もある

る。真夜中に救急車が遠くでサイレンを鳴らして通り過ぎる時は、必ずそれに合わせて独唱する音楽的才能があるようだ。最近、このソリストの真似をして、近所の犬どもがハモルから、だんだん大合唱になってきて、異様なふんい気を作り上げる。それが近所迷惑ではないかと、飼主は責任上小さくなっている。もう一つ大声で吠えることは、自分の小屋の前を跳ねるバツタやコロギに夢中になって恐る時である。いや全くおかしな犬なのだ。

わたしはこのラッキー君に、農場で失敬してきたビートバルブの麻袋を布団代わりに小屋の中へ敷いてやっている。しかし、彼はいつもそれを外に引きずり出し、その上で昼寝をしているのである。夜になってもそのままだから、外は寒かろうとまた中に入れてやると、朝はやはり外に出してある。何回かくり返しても同じであるので、あきらめかけたある雨の日、その布団が中にあるのではないか。誰が布団を入れたのかと家族に聞くが覚えがないと言う。次の雨の日も、その次も同じであった。布団の出し入れは彼がやっていたのである。雨が降りそうな日には必ず三六五日仕舞いこむことを実行していたラッキー君は本当に犬らしくない犬であると思う。



ホロホロ鳥と伝説

農場養鶏部 西 協 充

ホロホロ鳥の体型は丸くずんぐりしており、その大きさはニワトリ程度である。頭・首には毛がなく、口ばしはキジのように鋭く、顔も比較的キジに似ている。羽色は全体的には灰白色に見えるが、きれいな純白な斑点模様がある。鳴き声は可成りすさまじく「ギャーギャーケッケッ」と遠くまでびびきわたり、番犬の代りになるくらいである。

しかし、このホロホロ鳥にも、この様な伝説がある。ギリシャの神話に出て来るのであるが、ギリシャの王子の姉妹達が、鶏の姿に変えられてしまった。彼女達の母は、その不幸を招いた原因は、王子にあると云って厳しく叱責した。その非難の厳しさに、王子は耐えきれずついに死んでしまった。その死を悲しんで絶望のあまり、鶏に姿を変えられた姉妹達は、鳴き悲しみ涙を流し、その真珠のような涙は永久に彼女達の羽の上に模様となって消えなくなり、このため羽色が真珠形になったと云う。この様な伝説を聞くとホロホロ鳥のすさまじい鳴き声も、飼育をしている一人として何か物悲しい声に聞こえてくる。

第三回日華養豚研究会議に参加して

農場養豚部 鈴木伸一

はじめに

第三回日華養豚研究会議が昭和五十七年十一月十五日から二十一日まで、中華民国台湾省苗栗県竹南鎮の台湾養猪科学研究所で開催され、日本からは日本養豚研究会の会員十九名が参加し、活発な研究討論が行なわれた。(東京農大からは丹羽教授、近江助教授が参加した) そのほかに台湾の近代的な養豚場や肉質検査所、そして屠殺加工場も併せて視察してきたのでその概要について報告します。

研究会議について

研究会議の内容は予め決められた研究課題について両国がそれぞれ講演を行ない討論をした。まず特別講演として丹羽会長が、日本における養豚の概況と試験研究について講演し、続いて一般の講演が行なわれた。それは、

- 一、台湾の豚の栄養に関する研究
- 一、飼養管理と糞尿処理について

一、豚の病気に関する研究
であり全部で九題行なわれた。なお一題の発表時間は四十分、討論十分の予定で行なわれたが、活発な質疑応答があつてかなり時間を超過した。以上の研究会議を丸二日間で行なわれたので、その内容について簡単に説明します。

一、日本における養豚の概況と試験研究

東京農業大学 丹羽太左衛門

- 1・豚の飼養戸数と飼養頭数。
- 2・飼養地域と経営形態。
- 3・豚肉の生産量と需給。
- 4・飼養品種の推移。
- 5・豚の改良と増殖。
- 6・飼養管理の方法。
- 7・生産物の処理と流通。
- 8・衛生問題。
- 9・豚生産に関する要因と対策。
- 10・豚に関する試験研究について講演された。

二、豚の栄養要求に関する研究の新動向について

台湾養猪科学研究所 顔 宏達

台湾における豚の栄養要求に関する研究課題は、(1)亜熱帯と熱帯地域の高温多湿が養豚の生産効率におよぼす影響について。(2)土地面積が狭い割に人口が多いため雑作物の生産量が少ないので、大部分の養豚用飼料原料を輸入品に頼っている。(3)国民の生活水準が高くなり豚肉消費者の肉質に対する要求が厳しくなっている等が当面の解決すべき問題である。

次に最近の栄養飼養試験については、(一)高温の影響に

ついで（豚の窒素摂取量が低下することが判明した。）

(二)品種の選抜、桃園種のエネルギー、穀物質・有機物粗繊維と可溶無窒素物に対する消化率がランドレースより優れている。(三)飼料のアミノ酸バランスの研究（リジンの要求量は米国のNRCの飼養標準より高く現在では英国のARCの飼養標準を採用している）。(四)雄豚を肉豚に仕上げることの検討（最近の育種技術の向上と飼料栄養の進歩により雄豚自身の成長が早いので、性成熟前に仕上げを終えて屠殺出来る。飼養試験を実施したところ、雄豚の体重九五kgになるまでの飼養日数は去勢豚よりも七日少なく、一日増体量は一一%多く、飼料効率も九%高く、赤肉生産量は七%高い。また臭いもないことが実証された）。(五)適正飼養制度の確立、(1)雄豚（台湾における最近五年間の人工授精普及率は二五%に達している。したがって飼養管理と飼料栄養がいかに雄豚の最上の精液性状を維持させられるか。(2)母豚（八産以上の生産を基準にし分娩後は四週間授乳させ、なお高温環境下での飼料給与量および飼養管理の方法について）。(3)子豚（リジンの粗蛋白質の比例について）。(4)肉豚（体重五〇kg以前は不断給餌方式、その後は制限給餌が増体重、飼料要求率と屠体成績が最も優れていた）ので現在はこの飼養方式が採用されている）。

三、日本における豚の飼養管理と糞尿処理

ナ培養で二次浄化処理を計ることが、最も経済的かつ実用的である。

なお、実際に糞尿処理工事をした二カ所の説明があった。

五、豚肉の生産と流通動向

日本食肉加工協会 矢野幸男

(1)豚肉の生産と流通の動向。(2)豚肉生産の推移。(3)肉質の問題。(4)豚肉の流通についてスライド等を用いて講演されたが、そのなかで今後日本国内での豚肉の流通は部分肉が中心となることと解説された。

六、豚の血液性状と発育性能の関係について

台湾大学 池 雙慶

血清中の総蛋白質と一日平均増体量との間に負の相関が見られた。また血中カルシウム量とは正の相関があり血中アルブミン、アルブミン%、アルブミンとグロブリン比は背脂肪の厚さと顕著な相関々係を示している。産肉能力検定豚の予測をしたところ誤差は一六から二一%であった。したがって、幼若時の豚の生理的パラメータを利用して発育後期の生長性能を予測することが可能であると説明された。

七、台湾におけるマイコプラズマ症

台湾省家畜衛生試験所 蘇 杰夫

マイコプラズマ感染豚に対して「Tiamulin」給与により生長促進および飼料効率の向上を図る実験をしたと

農林水産省畜産試験場 瑞穂 当

日本の養豚の飼養管理の歴史と糞尿処理の方法についてスライドで講演された。

四、台湾の大規模養豚場における糞尿処理の対策

台湾省畜産試験場 洪 嘉謨

政府発行の「養猪報導」（一、九八二）によると、一九八二年三月末の台湾の豚飼養頭数二、〇〇〇頭以上を上廻る養豚場は一四一戸で、その戸数は全体の〇・一二%だが、飼養頭数は全体の二四・二%を占めていた。飼養戸数は減少し、飼養頭数は増加の傾向にある。

次に公害発生について農林庁の三回にわたる調査によると、一九七三年十月から翌年六月の間で飼養規模五〇頭以上の養豚場は六、六九七戸、公害発生率は二〇・八%で、うち二、〇〇〇頭以上の養豚場の五七%が最も高かった。更に一、九七九年九月の間二、〇〇〇頭以上の養豚場八七カ所の調査結果によれば、公害発生率は五四%を占め、クレームが起ったのは三二%で汚染率は専業化経営の三六%、次に農畜総合経営が一〇%で農畜経営は八%と最も低かった。第三回は一、九八一年四月から一月の間に行なわれた調査ではほとんど改善されず養豚家の公害防止に対する意欲もはなはだうすかった。

台湾での糞尿処理の一番良い方法と思われるのは、嫌気性発酵（メタンガスの利用を含めて）を主にスピルソ

ころ三〇ppmの飼料添加が有効であったと説明された。

八、多頭飼育における疾病防除とくに哺乳豚の免疫不

全に関する機構について

北海道大学 波岡茂郎

豚は初生から五週令にいたる哺乳期に種々の感染症に罹患しやすい。すなわちSEPC・AR、大腸菌感染症は局所感染であるので、初乳に由来する抗体は当該疾病の感染予防にはあまり役立っていない。

今回免疫増強剤および調整剤を哺乳豚に応用し、この時期における免疫応答能に対する影響を観察するとともに、その成績から、免疫不全の機構について解決された。

九、ELISAによる豚伝染病診断への応用

台糖公司畜産研究所 張 靖男

酵素結合免疫吸着検査法（ELISA）は広くヒトと各種の動物の伝染病の診断に応用されるようになってきた。間接ELISA法でトキソプラズマおよび仮性狂犬病抗体の測定を行ない検討した結果、特異性、感染性とも高く、しかも迅速、簡便、経済的検査法である。そのほか機械で判読するので正確かつ客観的であるので広く応用することが可能であると推察される。と講演された。以上簡単に説明したが専門外のところは的外れであるかと思うが寛容願います。

次に訪問先について説明する。

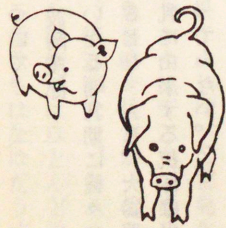
- 1・台湾養猪科学研究所および附属人工授精センター(精液の冷凍保存・人工受胎等について研究中)。
- 2・台湾省産肉能力検査所および改良増殖センター(現在建設中であるがすでに一部ウインドレス分娩豚舎は使用を開始している)。
- 3・台糖公司養豚場(五〇、〇〇〇頭の一貫生産を行なっている)。
- 4・学甲農会・農魚牧総合経営場(五〇〇頭の肥育場)。
- 5・台湾省畜産試験場(メタンガス利用に関する研究中心)。
- 6・立大農畜産加工廠および養豚場(日本向部分肉の製造中であり、大変衛生的でかつ省力的に屠殺から加工まで行なっていた。養豚場は母豚五、〇〇〇頭の一貫生産で一人で五、〇〇〇〜六、〇〇〇頭管理している)。
- 7・台糖屏東総敵六塊厝畜殖場(一五haに母豚三、〇〇〇頭の一貫経営を行なっている)。
- 8・大新畜牧場(台湾で一番大きな養豚場で一〇〇haに母豚一四、〇〇〇頭で全部で一三六、〇〇〇頭飼育している。一日の出荷頭数は七〇〇頭。なお社長の王さんはホテル一軒とデパート三つを経営している)。
- 9・現代飼料養豚場(二〇、〇〇〇頭飼育しているが、メタンガスの利用と汚水処理について視察した)。
- 10・台湾区肉品発展基金会、技術服務中心(肉質検査特

に抗生物質等の残留について行なっている。屏東にあるのは養豚場・屠殺場が台湾南部に集中しているため) 11・鳳山家畜拍賣市場(コンピュータで売買をしている。取引きは屠殺直前のものを行なっている)。

以上の訪問先を駆走で視察した。

最後に第三回の日華養豚研究会の開催にあたり大会主席の蘇、振杰博士をはじめ台湾養猪科学研究所および台湾区肉品発展基金会・台糖公司畜産研究所・中華民国政府農林庁その他多くの関係者の心暖まる熱烈な歓迎を受けたことを誌上を借りて厚くお礼申し上げる。

なお第四回日華養豚研究会は日本で開催される予定である。



優秀卒業論文紹介

56年度卒業生優秀卒業論文

- 学長賞
 ↳過排卵処置マウスの胎子生存性に及ぼす各種ホルモンの影響——石島 江川 優子
- 大日本農会賞
 ↳イノシンの頭骨に関する研究 特に下顎骨の形態について——田中 内野 裕一
- 学科長賞
 ↳ハチミツの生産——桜井 越智 圭吾
 ↳ウズラの血清 IgG 値並びに免疫担当臓器に対する性ステロイドホルモンの影響——渡辺誠 洲澤 徹
- 西川賞
 ↳豚舎内飛来衛生害虫の分類とその出現時間について——近江・渡辺忠 池谷 正昭
- 伊藤賞
 ↳ホロホロ鳥筋肉の特性に関する研究。筋肉中のヌクレオチドについて——鬼原 堀田 秀紀
- この中より今回は、学長賞をお受けになりました江川優子先輩の「過排卵処置マウスの胎子生存性に及ぼす各種ホルモンの影響」を、石島教授より御協力戴き御紹介させていただきます。

過排卵処置マウスの胎子生存性に及ぼす各種ホルモンの影響

江川 優子

性腺刺激ホルモンによる過排卵誘起を応用して家畜や実験動物の産子数を増加させる試みがこれまで多数行なわれてきているが、過排卵処理後の妊娠に問題があつて初期の目的を達するに至っていない。しかし、最も研究の活発なマウスにおいては種々の条件が解明され、現時点、妊娠中期までは大部分の個体に正常の二〜三倍の生存胎子を維持できるまでに研究が進んでおり、残された問題は、後半期に起る胎子死亡をいかに防ぐかだけにしぼられている。そこで、本研究では、妊娠後半期に必要なと考えられる各種ホルモンならびに妊娠末期マウスの胎盤抽出物を投与して、胎子死亡の改善ができるかどうか検討した。

この実験には本学家畜繁殖学研究室で閉鎖集団として維持しているCF井1系の成熟未経産マウスを供試した。マウスにはPMS五国際単位・HCG五国際単位の過排卵処置し、妊娠の中期および後半期にHCG、プロラクチン、シナホリン(HCG九・前葉抽出物一混合剤)

プロジェステロン、妊娠中・後期マウスの胎盤抽出物などを投与した。いずれのマウスも、妊娠十九日にと殺開腹して、生存胎子の割合を検査し、過排卵対照区と比較した。その結果、妊娠一四、一五および一六日あるいは妊娠一七、一八および一九日に日量三国際単位のHCGを投与、妊娠一四、一六、一八日に日量五国際単位のプロラ

チンを投与、ならびに妊娠一三、一四および一五日に妊娠中期マウスの胎盤抽出物〇・八グラム/ミリリットルを投与することにより、妊娠後期の胎子死亡が有意に改善された。このことから、妊娠中・後期に内分泌環境を改善することにより胎子死亡をある程度防ぐことができることが示唆された。

過排卵処置マウスの妊娠後期の胎子生存に及ぼす各種ホルモンおよび胎盤抽出物の影響

区 分	投 与 時 期 (妊娠日数)	例 数 (腹数)	胎 子 生 存 率*	
H C G 日量 3IU	14, 15, 16	10	73.7%	
	14, 16, 18	10	54.8	
	17, 18, 19	10	73.8	
プロラクチン 日量 5IU	14, 15, 16	10	67.4	
	14, 16, 18	10	83.8	
	17, 18, 19	10	69.2	
シナホリン 日量 1KE	14, 15, 16	10	21.1	
	14, 16, 18	10	61.1	
	17, 18, 19	10	44.4	
プロジェステロン デボ zmg	10	10	58.5	
	15	10	55.7	
胎盤抽出物	日量 0.8/ml(1)	13, 14, 15	5	55.4
	"	15, 16, 17	5	65.7
	日量 1.6/ml(2)	17, 18, 19	5	56.4
	0.8g/ml 1日2回(1)	13, 14, 15	5	84.3
	"	15, 16, 17	5	42.9
	1.6g/ml 1日2回(2)	17, 18, 19	5	38.1
過排卵対照区	—	10	50.3	

*生存胎子数/着床数×100
(1)妊娠 13～15日の胎盤 (2)妊娠 16～19日の胎盤

特別寄稿文

〜 翔 〜 諸先輩より

青壮年男性を襲う謎の死神

昭和大学講師 角 田 健 司

癌、脳溢血、心臓病などによる働き盛りの男性の死は、残された家族や親族にとって痛ましい限りであり、社会的損失も大きい。交通事故による死もかりであるが、他に、普段全く健康な成人男性を睡眠中に突然襲い、黄泉の国へ引きずり込む謎の奇病もその一つと言える。いわゆるポックリ病またはポックリ死である。正式には青壮年急死症候群 (Sudden Manhood Death Syndrome) 略して SMDs) と呼称されている。私もこの疾患の存在を知った時、少なからず心に動揺を覚えた。自分が何時かこの病魔に襲われるかも知れないという不安が就眠前に募ってくるのである。しかし、SMDs を知るにつけ、無力である由の諦念か、不安はいつしか遠のいていった。むしろ何も知らない方がもっと恐ろしい気がした。万病の元は過労からといわれているように、体

力的にも無理を過信する若き獅子への警鐘として、こうした疾患のあることをあえてここに紹介したい。SMDs の定義は「一見健康そうでも病歴上予知することができず、しかも剖検によっても適当な死因がつけられない睡眠時に起こる男性青壮年の突然死」とされている。すなわち、二〇歳前半から四〇歳前半の男性に多く、睡眠時(深夜〜早朝)に限って発症し、呼吸困難の苦悶と考えられる大きなうなり声を伴う。季節的には四月〜七月に好発するのが特徴である。自覚症状として、最近特に疲労感を覚え、頭重、頭痛を訴えたり、睡眠中、突然気道の圧迫感や閉塞感(無呼吸または拘束性換気障害)を覚え、呼吸運動がよくできない息苦しさを感じる。さらには息を吸おうとしても吸えなかったり(吸息性呼吸困難)、息を吐こうとしても吐けなかったりする(呼息性呼吸困難)苦しみを自覚したりする。重症の場合には、こうした呼吸困難を自覚せず、家人がそれに気付いて覚醒させることもある。男性に対し青壮年期の女性には殆んど発症しないが、似たような呼吸困難を体験しても死に至らない。男性でも六〇歳以上の高齢者ではSMDs の報告例はまだなく、特に精力の旺盛な二〇歳から三〇歳代に症状も重く、後述のけいれんや死亡例が目立つといわれている。SMDs の死亡までの症状は次のようになる。睡眠中、

突然に無呼吸または拘束性換気障害に陥り、吸息性呼吸困難に次ぐ呼息性呼吸困難となり、息を吐けないでいるような奇声を発する。意識はなく、さらに強直性けいれん（筋肉の持続的収縮）または間代性けいれん（筋肉の断続的収縮）があり、尿失禁なども起る。その後、静止状態で呼吸は停止しているが、心臓の拍動は持続している。開口、鼻翼呼吸に続き、筋肉が弛緩して死に至る。

死因については現在のところ不明である。仮説として心臓疾患、睡眠中の呼吸障害、無呼吸発作↓心停止、自律神経系の異常、内分泌系の失調、電解質や酵素の異常などが提唱されているが、どれが妥当かは明らかでない。われわれの教室でもSIDSの死因解明へのアプローチを試みており、乳幼児のボックリ病（乳幼児急死症候群略してSIDS）と同様に脳幹の異常による呼吸中枢の障害にあると考え、内分泌系の失調や酵素の異常に主眼を向けている。

予防としては過労やストレスの蓄積を避けることが重要である。治療の方法は現在のところ確立していない。しかし、けいれん後に呼吸は停止しているにもかかわらず心臓が拍動している時期に人工呼吸の救急処置をすると蘇生する可能性があると考えられている。

SIDSの存在を知るとは若い男性にとつて、かなりのショックである。一回発作を起したからといってす

べてが死に繋がるとは限らない。重症でも死を免れた人もいる。最も危険視されるのは、睡眠中の呼吸困難を自覚していない場合であるといわれている。こういう症状の人は要注意である。

一回でもこの発作を体験した人の身体的、精神的苦痛は並大抵ではない。この発作が何であるのか分らない場合には、本人の不安は一層増してしまう。その負担を軽くすることもこの疾患の性質を知っておいた方が良くかも知れない。それでも不安が解消しないと嘆くのは、いつ交通事故に遭遇するかわからないと不安がるのと同じように思われる。SIDSを全く知らず、闇雲に通りに襲われるのでは、その死は余りにも悲しい。

このような発作を体験した方は左記宛に御一報下さい。

〒142 東京都品川区旗の台一―五―八

昭和大学医学部法医学教室
電話 (七八四) 八一四〇

私の研究テーマ (希望と苦勞)

(財)日本蛇族学術研究所職員 森口 一

私が興味を持っているのは、ヘビの生態で、特に各個体群間の生活史の相違点に興味があります。私は生態学を「自然界の経済学」であり、それは生物の進化と密接に結びついていると考えています。一方、生態学という「エコロジー」という言葉を思い出します。この言葉は公害や環境破壊が、さかんに論議される頃になつて使われ始めました。「エコロジー」は本来の生態学 Ecology が持つ意味とは異なつた「人間環境のみに着目した科学」というニュアンスの強い言葉です。それにとつて、本来の Ecology が「エコロジー」の意図する「人間が生活しやすい地球環境を作る」ためには、役に立たない学問であるという考えが一部の人間にあることも事実です。しかし、人間環境が他生物の環境を除外して成り立っていない以上、本来の Ecology は「私達の願いを達成する」ための、十分条件には成り得ずとも必要条件には成るはずで

話が少し横にそれてしまいましたが、少し戻つて「生

活史の進化」について述べましょう。生活史は様々な種によつて異なり、同種内でも地域個体群によつて異なることもあり。これら生活史の解明は、多くの人々の忍耐強い努力の結果なされてきました。しかし、それら人々の努力は単に新しい(あるいは珍しい)生活史を発見しただけという評価しか受けないことも多かったのが事実です。そのような中で一九六〇年代後半から、主に米国の生態学者によつて、多様な生活史がどのような過程で分化・進化していったのかを解明しようとする動きが出てきました。残念ながら、この方面の研究は日本では遅れています。私の研究テーマは、日本に生息するヘビ類各種、各個体群の生活史の進化過程を明らかにしようと考え設定しました。

具体的には、本州ではカエルをたくさん食べているシマヘビが、カエルが分布しない伊豆諸島などでは、どんな餌を食べて、島の不安定で単純な環境にどうして適応し、それにともなつて形態や捕食行動、産卵数、成熟年齢などに、どのような変化が起っているかなどを調べることです。

以上のようなことが、私の選んだ研究テーマです。将来、何かの障害で、このテーマを中断しなくてはならないかもしれませんが、先のことは判らないにしても、これらを実行していくのにあつて、現在でも困っ

たことがいくつかあります。以下にはそれらについて少し触れたいと思います。

先ほど書いたように、この方面の学問の主力が米国であること。また、日本の爬虫両棲類学が欧米に比べて未発達なことです。したがって、参考にする文献等のほとんどが英語で書かれたものです。中学・高校時代に英語が大嫌いであった私の苦勞は、英語が大嫌いな人なら判つてもらえると思います。文献以外でも、外国からの客人が来日した際など、自分の語学力のなさが侮やまれます。

また、現代の生物学が定性的なものから、定量的なものになってきたことです。具体的には昔は「アオダイシヨウはネズミと鳥を食べます」で話はすみました。しかし、現在では「どの期間に、どんな大きさのネズミを、どれだけの量を食べるか」まで問題になってきます。これらを解析するには統計学が不可欠です。特に多変量解析や、最近繁んになってきた生物の行動を数式で表わす方法などは、微積分・ベクトル・数列・行列などが必要になります。ですから、数学の大嫌いな私の苦勞は、みなさんも察して下さいましょう。

以上書いてきたようなことが、私の研究テーマにおける希望と苦勞です。私は大学時代の勉強は自ら進んでやるものだと考えています。本や雑誌を読めば得られる知

仲間 学内より

亡き友に捧げる手紙

畜産学科一年 植 木 秀 治

今日、君のお母さんに手紙を書きました。お慰みの手紙のつもりでしたが何を書いて良いやらわからずほんとうに困りました。でも君には沢山書きたいことがあります。“あります”といっても今さら君の家に出入りわけにもいかず天国へ送るわけにもいかず、幸いとは言いがたいけれど“ふじみの”といういわば学科だよりから作文を依頼されたのでこういう形で君に届けます。人の心が天に伝わるとしたらこの作文を読まれることによって君の所へ伝わればこれほど嬉しいことはないでしょう？ 僕は十九日の晩、君の死を母から知らされました。最初は驚きはあったにしても実感はほとんどありませんでした。でも日増しに君のことが思い出され悲しみと残念さがこみあげます。夕べも車ごと海へ落ちた君のことを思うとなかなか寝れません。どんなにあわてたことか、そしてドアのすき間や窓のすき間から肌を刺すように冷

識しか在学中に得ることができなかつたら、かなり割高な授業料を払った計算になります。大学で教えてもらう方法です。これらを得ておけば、どんな時にも応用が利くはず。それには、授業にだけ出席して、試験の当日だけ通用する知識を持っているだけではすみません。一番よい方法は、学問に対する姿勢や、学問の方法を知っている先生や先輩達と、どんな小さなことでもよいから、いっしょに仕事をしてみることで。また、それによって多くの知人を得ることもできます。私が仕事を進める上で、大学生時代に知り合った人達の理解や協力は今でも、すばらしい力になっています。

以上、思いついたままに書いてみました。この小文がみなさんの卒論の実践や、今後の勉強の参考になってくれればよいと思って書きました。また、現代の生態学の側面についても触れてみました。最後に、大多数の人々にとって、人生のうちで最も自由な時間が多いのが大学生の時代であるということを忘れないでほしいと思つて、いることを書き添えておきます。

めたい真冬の海水が入り……辛く苦しかった君の境遇を想像すると居ても立ってもおられません。ほんとうに残念です。

あいにく僕は葬儀には参加できなかったけれど母が行きました。守岡先生に会ったそうです。顔は泣きはらしておられ言葉もなかったそうです。山田君や寛さん宅では知らせを聞いた日の夕飯がのどを通らなかつたそうです。東京の土肥君や松仁君たちはボーとして試験が手につかないそうです。こんなに皆を悲しませて……。人の最大の不孝は親より先に死ぬことだそうです。

ところで今年の初夢が車を運転する夢でした。運転できる友達がたおれて僕が運転技術がないのにハンドルを握り友達が右から二番目のを踏めとかもっと右にハンドルを切れという命令に従いおそろる運転する夢でした。君と何か関連があるのではないかと思うとぞくぞくとします。伊藤君達をさそって君の家に遊びにゆこうと思つていました。あの大きな家でおもいきり騒ぎたかったです。高校と浪人の四年間にいろんなことがあったに違いないから話はずんだことでしょう。

しかし運命とは皮肉なものです。覚えてますか？ 僕達が五歳の頃僕が貯水池に落ちたこと。あれは池のふちに角度を変えると絵の変わる当時めづらしい怪獣カードがあったのでそれを拾おうとして落ちたんです。あの水の

苦しみは今でも覚えています。あの時君が人を呼びに行ってくれなかったら僕は今の世にいなかったでしょう。そして君は先日溺死してしまつた。君に恩返しさえも出来なかったのが僕の一生の悔いです。

言うまでもないことだらうけれど君の家族や友達を天国から見守って下さい。君の冥福を心から祈っております。さようなら。

追伸、読者の方へ「君」なる人は僕の大切な竹馬の友でしたが先日交通事故で逝去してしまいました。明るく要領のいい友達でした。

言いたい放題

畜産学科二年 渡 辺 拓 哉

農村調査部などというクラブ活動をやっていると、調査のため、または純粋に実習をするために、一週間なり一か月なり農家に入って農業実習をする機会が多い。その時、農家の人に必ずといっていいほど聞かれる事は「何故農大に入ったのか」ということである。世界に冠たる

くであろう。そして全ての人々が、今の生活水準を維持向上させてゆこうとすれば、食糧、とりわけ穀物の生産量を増加せざるをえない。これが現在の、そして将来的にも変わらないであろう世界の食糧事情の流れである。

この世界的流れに逆らって、日本一國だけが食糧（特に穀物）自給率向上の努力をすることなく、いつまでも力まかせに食糧を輸入することが許されるだろうか。またその力の根源である日本工業が、いつまでもその力を保持でき得るだろうか。日本農業は、たとえ見通しが暗くても、必ず顧りみられねばならない日が来ると私は信じている。いや、そうするべきなのだ。そこで農民、いや国民全体を啓発しなければならぬのが、自由な立場でマクロ的に農業の在り方をとらえることのできる立場にある我々学生、そして大学人ではないだろうか。そういった意味で、今日においても、また将来へ向けても農学部が存在意義は十分にあると思う。

別に使命感で、人間は生きてゆかねばならないとは思わない。しかし農学部が農学部であり続けるためには、単に動物が好きだから、または何となく農学部（畜産学科）に入るのではまずいのではないか。少なくとも今の農大には、そういった人間が多すぎるのではないか。やはり我々は農業問題への関心を失ってはならない。農学が農業実際の対話を失った時、それはもはや農学とは言えないのだから。

工業国日本、今はおそらくその絶頂期であろう。農業なんて顧りみられることのないこんな御時勢に、何で農業なんか勉強するんだと言わんばかりである。「何故農大に入ったか」などという事は案外答えにくい事であるから、たいがい適当なことを言ってお茶をにごしているのだが、しかし、この農家の人の問いかけは、私の、あるいはひょっとすると農大、いや、全国の大学の農学部に在学する学生の在り方を、そして農学部そのものの在り方を問う、ある種重要な事柄ではないかと思うのである。私は常々、農大生の中で、農業に関心のない人間が多すぎると感じている。今までの二年近い在学期間中、農調部員以外の、学科の友人と農業問題について語り合ったことはほとんどない（そんな大げさなものではなくても、例えば酒でも飲みながらの話題の中でもである。）

それどころか、農業に関心のあるはずの我農村調部員とさえ十分な議論ができないのだ。まあ、こんなならそうなることを書きまくっている自分自身も、他人と十分議論し得るほど勉強していないのが事実で、この様なことを言える立場にはないのかもしれないが、しかし、うすばんやりとでも問題意識はもっているつもりでこんなことを書いていくわけだ。

世界の食糧需要量は、人口の増加と、生活水準の向上に伴って年々増加しつづけており、今後もその傾向は続

酪農の未来を担うE・T

畜産学科二年 安 藤 洋 一

戦後の高度経済成長長期には、商工業が急速に発展し脱農化が進んだ。その中にあっても酪農はめざましい発展をみせた。それは、政府が国民の食生活改善に力を入れ、それを酪農が背負っていたからだと思う。

そのころの酪農は、他の企業がそうであったように非常に景気がよく、牛乳を多く出荷すればするだけ儲かっていた。けれどもいい時期はそう長く続くものではない。昭和五十三年度あたりから牛乳が市場に余りはじめたのだ。それに対する政府のとった政策が牛乳の生産調整というものである。これは、各農家ごとに基準を設けそれ以上牛乳の出荷をしてはいけないという生産者にしてみれば非常に厳しい仕打ちであった。

現在、わが国の酪農は、生産調整、乳価の据え置き、濃厚飼料の高騰など頭の痛い問題ばかりだ。その結果酪農家の戸数は年々減って来ている。この現象は、逆に考えれば酪農家の質が向上していることを意味しているのかもしれない。

現在のような低成長期にあっては、思うように規模拡大はできない。かといって、乳量が少なくなればその分だけ収入も少なくなり採算があわなくなる。

この暗黒期を乗り切るには、どうすればよいか。まず考えられることは、頭数は増さないで個々の牛の能力を向上させていくことだ。そのためには、優良種雄牛を選定し供用することである。中でも社団法人畜改良事業団が中心になって行っている種雄牛の後代検定により作出された後代検定種雄牛は、娘牛の検定成績が乳量や乳成分までわかっているのを利用しては、非常に信頼度の高い種雄牛である。従来の種雄牛は、親の七光的存在が多かった。種雄牛にとって最も重要なのは遺伝力の強さだ。いくら親が優秀な牛であっても生まれて来る子が親より優秀でなければ改良は進まないのだ。

酪農を安定発展させる効率の高い乳牛の改良を支えるには、飼養技術・繁殖技術・管理技術あるいは経営技術などが必要である。

繁殖技術の面で最近よく耳にするものに「E・T」という言葉がある。これは、「受精卵移植」(Embryo Transfer) 略してE・T)のことである。凍結精液が実用化の段階に入って急速に普及したのは昭和四十二年以降のことだ。ところがそれからわずか十五年ほどで受精卵移植が、わが国でも試験段階から実用段階

蛭は一生光り続ける。卵で光り、幼虫で光り、蛹で光り、そして成虫である。その光は世界のあらゆる光よりも美しいと思う。それは光こそ彼等の生きている証だからと思う。

蛭の観察は春に始まる。春は彼等が幼虫時代を過ぎた水の世界に別れを告げる時なのである。幼虫は春先の雨がそぼ降る暗い夜に上陸を始める。まるでお互いに励まし合う様に光の明滅をゆっくりと繰り返しながら小川の岸をどンドン登って行く、幼虫は小さな芋虫の様で見た目はとても不器用そうでは有るが土堤を着実に這い上がる。そして安心して蛹の時期を送れる場所を捜すのだ。彼等にとって蛹の時期は動きこそ無いが最も大きな変化の時なのである。完全変態の彼等にとって一生の終章を迎えるために体の形を完全に作り変える時期である。それゆえその時期を過ごす場所を丹念に捜し、見つけたなら土中に潜って行き小さな土の部屋を作るのである。そして五十日程が過ぎた六月始めの頃に変身を遂げ、みなさんがよく知っている蛭が土中より這い出して来る。

成虫となった蛭は夜毎に舞う。その舞う様は何ぞか悲しい程に美しい。光の中に時の流れも止まってしまふ様である。それと言うのも命を賭けた敵愾な舞だからである。人に、「ホタルはなぜ光るの」と、よく尋ねられるのだが、はっきりと解かっているのが現状で有るが、

に入っているのである。ただしこの技術は、経済的な面でもまだ問題があるらしい。いずれにせよE・Tの時代はそこまで来ているのだ。

現在のような厳しい酪農情勢を乗り切るには、自分の牛群の中で高能力の雌牛を選びE・Tの技術を用いて短期間で牛群をレベルアップし、駄牛を淘汰して、少数精鋭でコストダウンに徹することだと思ふ。

最後に言いたいことは、酪農は、化学肥料に汚染された土地をよみがえらせ、貴重な栄養食品を国民に供給するという責任と誇りある産業ではないだろうか。

光りの舞い

畜産学科二年 相内幹浩

この一年間何をしたらかと言われても大学では寝ていただけだった。でも自分は他の誰よりも美しいものを見たと思う。それは命の灯とも言える光の粒であった。簡単に言ってしまうと蛭なのだが、自分はやつらとつき合う様になって早五年が過ぎた。

雄と雌との愛のささやきと言われている。成虫になった蛭は、もはや水以外の一切の食物を取らない。さらに雌が雌を求めて舞うのも一日のうち夕暮れ時より一時間程だけで有り成虫となった今、残る命は三日程しか残っていないのである。だから雌は雌を求めて必死になって光の舞を繰り返す。しかし弱い雌は雌に受け入れられずにあえなく死んで行く、それは良い子孫を残すという自然の掟のために雌より雄の方がずっと多くいるのである。交尾を済ませた雌は光らなくなり、ただ残る力は全て産卵に使い果たすのである。この様にして残された無数の小さな命は一年後には、また悲しいまでに美しい舞いをするのである。

自分が彼等を見ていて教えられたことは、生命は美しいが残酷なまでに敵しい営みであるという事だ。

故郷

畜産学科三年 Mr BOO

羽田空港からジェットに乗り二時間余りノシばらくすと、ジェットの窓下にコバルト色の海が目につきます。

晴れた空、輝く太陽そしてコバルト色の海、色あざやかな草花、南の島、「沖繩」そうです。ここが私の故郷です。戦後二十七年間、合衆国の領土として米国内にあった沖繩、今でさえ、新婚さんのメッカとなり、夏には、若者のパラダイスと観光化している沖繩ではありませんが、戦争の傷跡は、つい最近まで生々と私達の目の前にその傷口をさらけだしていたのです。

沖繩が本土復帰を実現化したのは、今から十年前、一九七二年今年、沖繩は復帰十周年を迎えました。十年前まで沖繩ではドル(\$)が使われていたのです。今この文章を目にしている皆様には、信じられない事でしょうが、実際にあつた事なのです。その当時、私は小学校五年生でした。物価について、何も知らない私でしたので、当時の物価が高いのか、低いのかは、次の事を見てもらえればわかるでしょう、一セントリアメ玉三コ、五セントトリスバ一杯、他に十セント、二十五セント、五十セント、一ドルと有り、おこずかいに「十セント」をもらうと、ちょっとした金持ち気分でした。単純計算で行くと一セント二十円、五セント五十円、十セント百円、一ドル千円に相当すると思います。何せ、その当時は、テレビゲームも無い時代で、だ菓子屋でクジを引くことが、楽しみの一つでした、十セントを持って友達四、五人ぐらいで良く行ったものです。その時人気があつたも

接 触

畜産学科三年 五十嵐 勝 芳

新年を迎えて、新たまつた気持ちで家畜苑に携わつていた頃を懐古してみると、不思議となつかしさが蘇えてくる。四号館前の便所の横——そう、自転車置場の屋根にたる木を組んで青のシートをかぶせただけの小屋——そんな所に一ヶ月も住んでいた。天候には恵まれ雨もりだけは避けられたけど、どこからともなく忍び寄る風には参った。鼻水をたらす毎日が続き、そのうち咳がでて風邪をひいた。こんな自分の当時の楽しみといたら、ベニヤ板に飾られた聖子ちゃんのポスターを眺めることと、先輩や友達が持って来る差し入れを飲み食いすることであつた。

気ままな生活にも、いよいよ終止符を打つときがきた。家畜苑の主人公たちが乗り込んできたのである。土曜の昼下がり、ポカポカとした陽気の中で彼等はさつ爽と登場したのである。たちまちのうちに通りがかりの人たちの視線をくぎづけにして彼らだが、異様な雰囲気になつて

のは、二セントのクジで、一等に当ると「J・I・ジョー人形」がもらえるやつでした。その頃から、私のバクチ好きは、始まったものと思われまふ。

とにかく、その時代から急に円(¥)に変わった時には、大変な戸惑いを感じたのを覚えています。

でも、変つてうれしく思った事も有りました。それは、ドルには、鋼貨にしても、お札にしても英語で書いてあつて、意味が分からなかつたのに、日本円に変わつて書いてある文字が、全部読めた事、あれには大変感激しました。実際使う段階になつて大変困りました。使用価値が全然分らないからです。変換時の値は、一ドル三六〇円でした。だから、千円札を使おうとすれば、約三ドル使う事になるわけです。でも、店では千円、二千元などは、そこらにポンポン張つてある。本当に恐ろしくなる事もありました。今、毎月の仕送りが五万円、ざつと考へても、ずい分、ぜいたくをしているものだと思います。冬休みになると、又、多くの人が沖繩を訪れます。そして、海、空、花を見て「沖繩は良かった」といって、帰る人は少なくないでしょう。でもその中で何人の人が、沖繩の本当の状況を知つてそういつているのか、これを読んだ皆様には、少しでも観光沖繩の裏には、こんな事があつたんだと知つてほしいと思います。

されてか、おどおどした感じ。うつろな瞳をキョロキョロとさせていたが、そこには全く注目されていない自分の姿が映っていた。

一般公開にはいつてからも彼らの人気は衰へえず、むしろ高まる一方であつた。その中で何かと質問される立場にいる自分は困惑することしきりであつた。最も困つたのは、餌をあげたい。直接手に触れてみたい、という訴えである。朝六時前、清掃をしていると、近所の奥さんが子供を連れて、持ちきれんばかりの野菜をかかえてやつてくる。仕事をしながら動物の前にいる子供たちを横目でちらつと見ると、子供たちは警戒しながらこつちを見る。その仕種を凝視することができないのだ。奥さんに、ごめんなさいをするのが一杯の自分なのです。

動物たちとは自然に幼んでいったけれども、各々、人間をひきつける愛嬌を持っている。例えばホルスタインの愛らしい瞳・水牛の遠慮がちな顔・仔猪のちょこまかとした蹄き方・緬山羊の人なつこさ・ガチョウのよたよたとした歩き、どれを取つても我を忘れてポケーと見ていて、いつまでもそこを離れられなくなる。シマリス・モルモット・マウスなどの小動物たちだつて例外ではない。七面鳥も結構人気があつたが、あの顔つきだけは気味が悪くて仕方がない。

家具屋のおじさんが「今日は高い家具が売れるぞ」と、

自分に嘸いたことがある。店内には婚期を迎えた女の人とその両親、こういう組み合わせが二、三組。案の定、しばらくするとホーとため息のつくような高級家具が売れる。別に金持ちでもないのに不思議そうな顔をしていると横から「ブスだから親が奮発するんだろう」と、おじさんの声。生き物って何らかの形で人の心に傷を創っていくんだなあ、と思った。

家畜苑の動物たちも、一時ではあるが人の心に触れたことと思う。普段、動物に触れることの無い人たちにとって、家畜苑は動物たちと親しむ絶好の機会だろう。管理面、衛生面から疑問が出やすいが、一般の人たちに動物に触れさせたり、餌を食わせてやるのができたら良いと思う。今でも時折、残念そうな子供の顔が浮かんでくることがある。我儘な言い分ではあるが、是非ともかなえてもらいたいものである。

家畜苑がより一層の充実を蓄し、再び人々の心に触れることを秘かに期待して、あの閑散としている自転車置場を、そっと見つめていたいと思います。

非関税障壁

畜産学科三年 陳 忠 正

日本でも名の通った欧州の某新聞の駐日特派員が最近中華民国のジャーナリストと顔を合わせたさい、ため息まじりに述べました。「世界でいちばんよく日本を知っているはずの中華民国が日本の市場にくいこめないというのだから、EC諸国が手も足も出せないのは、むしろ当然というべきだろうな」

彼は対日赤字の増大に悩む中華民国が、日本への輸出拡大を求めていることを知って、このような感慨をもちしたのである。中華民国、ASEAN、アメリカ、EC諸国が議会をあげて市場開放を要求しているように、日本の市場はきわめて閉鎖的であり、外国人には理解しにくい特殊な構造をもっている。それを象徴的に示すのが「非関税障壁」と呼ばれるさまざまな人為的障壁である。元旦の新聞によるとアジア六カ国首脳たちはアジア安定に対して日本に期待し経済面の役割を望むとの見解があった、だが日本がアジアの一員であることは明白である。地理的位置のアジアが、そのまま経済的・政治的・

文化的なアジアとすっぽり重なりはしない。今の時代は鎖国時代とまったく違う、だが鎖国時代の考え方が沢山の日本人の頭に残っている。核戦争があったら、不景気があっても、自給率が高い国は必ずしも生き残れるとは限られないと思う。とすれば貿易も人づきあいも根本は同じであり、自国の輸出もいし、輸入もいし、相手国にどのような影響を与えているかということ念頭におく必要があるお互い相手の立場を考慮し、いたわりの心をもって豊かな世界を進めるべきものであろう。

プレハブ小屋での収穫祭

畜産学科四年 柳 井 篤 司

収穫祭も今年で90回を迎え、その内容も年々濃いものになってきている。四年生となって学生生活も残り少なくなってきた今、収穫祭を振り返ると思えば一つにプレハブ小屋がある。現在の畜友会は常磐松会館に立派な本部を設けているが、自分が一年の時は四号館とグラウンドの間に10坪程のプレハブがあり、それが本部だったのである。その小屋の建設に由来する事として、自分達より10

期程(?)先輩の方々がどこかの工事現場よりもらい下げて来たものを大学側に承諾も得ずに建てた、という事を聞いた様に記憶している。

私が初めてそのプレハブに訪れたのは、一年の時の収穫祭の時でその準備に参加した為である。中に入ってその汚なさに驚いた。土とホコリの床に、畳を三枚敷いた台、机、棚、冷蔵庫などが雑然と並んでいて、またその時の委員長だった先輩がその風景に程よくマッチした人だったのである。収穫祭の準備は、昼間は授業があるので夕方から始めていた。夕食は、当時二年で役員をやっていた女の先輩が二人いて、おにぎりを作ってくれたのである。その後夜中の12時頃まで作業したら、馬事公苑前の屋台までラーメンを食べに行くのが日課となっていた。結局、仕事が終わるのが午前二時か三時になるので全員プレハブに泊る事になり、シュラフや汚いふとんに包り床の上に寝たものだ。(二年生以上は畳で寝ていた)また何か事がある度に宴会が始まり、特にあの頃は、各研究室の憩いの場として何人も集まって来たので、それがドンチャン騒ぎになることもしょっちゅうであった。収穫祭の準備が始まり収穫祭が終わるまでの約一ヶ月の間、ずっとそんな生活が続いたのである。

だからと言って肝心の収穫祭がおろそかになったわけではない。むしろ、そう言う生活の中から団結力が生ま

れ、全員の気持ちが一つにまとまったと言える。先輩、後輩というものを越え、寝起きを共にし同じ釜の飯を食うファミリーとしての付き合いが出来た様に思われる。そんな中で何人もの人と知り合い語り合う事ができた。自分がそうである様に、あのブレハブに関係した人なら皆そうであると思う。大勢の先輩方が同じ様に生活し、寒い晩には同じ様にドラム缶の火を囲んでいた事だろう。夜遅くまで作業するのは確かに楽な事ではないが、そう考えれば楽しくなる。そんな世界を造る舞台だったあのブレハブ小屋は、今はもうないが、自分の頭の中には立派な城として残っている。

収穫祭は、それだけ見るとただの祭りだが、それを遂行する事により得る物は大きい。成功させるも失敗させるも我々のやり方次第なのである。勝ち負けは別にしても、自分なりに納得のいくものにしてほしい。

猪・奇談

畜産学科四年 M & Y

— 猪肉あれこれ —

猪の心臓(ハツ)の刺身、というのを食べさせてもらった事がある。九州の知り合いの猟師さんから「こりゃ、狩人しか食えんとですよ」と、特別に頂いたのだが、これが滅法旨かった。柚じょう油が微妙なハーモニーをかもし出し、歯ざわりといい風味といい、肉の刺身の中では、申し分なくトップランクだろう。焼酎とびったり合いい、なんとも言えず嬉しかったものだった。

猪肉で最も旨い所は、首の回りと頬の肉だと言う。みそ味で煮込むボタン鍋も旨いが、やはり塩焼が一番いいのだそう。

「塩焼にしたらなんぼでも食えるがよ」

とは言え、卸し値でキロ八千円もするのだから、我々にはなかなか手の届かない所にあるのは確かである。

— 猟師さんの大きな話 —

猟師さんの話を聞くのは、なんとも楽しい。皆一人一

人が、自分こそ最高の狩人だと思っているのである。その自慢話の面白さといったら、へたな落語以上なのだ。逃がした猪の大きさなどは「牛の様だった」とか、物凄いのになると「象みてェだった」という。

さすがに驚いた私が「そりゃ本当の象だったんじゃないですか」というと

「いや、鼻が長くなかった」

と言った。そういや、どこそこの某さんからそんな話を聞いた事がある、というところ「そりゃ嘘だ。猟師ってな、大きな事ばかり言うんじゃないか」と、憎めぬ顔で飄々とおっしゃる。

もう引退されていたが、老年の猟師さんに話を聞いた。今は犬の数に頼る猟なので、瓜坊もみんな殺してしまい、猪がだんだん減っているのだという。

「昔ア、オメエ、犬と俺との勘だけでやってたもんだ」ポツリと吐いた老猟師さんの顔がなぜか心に残った。

— コンクリートを食べる猪 —

四国・徳島県に猪同士の決闘を見せ物にしているところがある。丁度、シーズンオフだったので決闘ショーは見られなかったが、飼育係の方に放飼場を案内してもらった。

写真は放飼場の一部である。コンクリートの地面に大

きな穴が開いているのがわかる。

私は、なぜこうなったのか理由を聞いてみた。すると彼は、昼寝をしている猪を指差し「シジが食った」と、平気な顔で言うのだ。

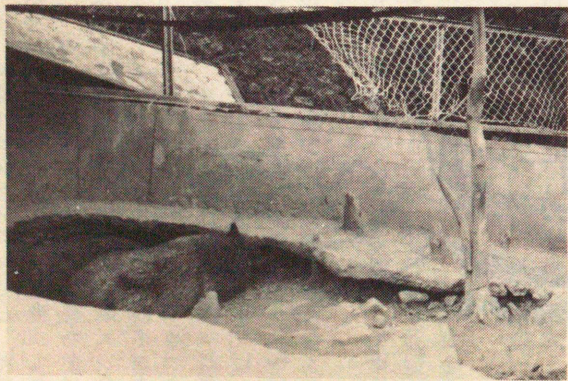
私は、猪が腹一杯コンクリートを食うとどんな糞が排泄されるのか、想像してみた。

さらに彼は、柵の金網が破れているのも猪の仕業だと

言う。そしてこれらの穴は、年々広がる一方で、猪の好きなようにさせていると言うのだ。

私は、隙間から猪が山に帰ってしまわないかしら、と思った。

ところが、猪は絶対に脱走することはない、そうして逃げるどころか毎年一頭、山から新参



徳島県のコンクリートを食べる猪

の猪が現われ、住みつくのだという。

つまり、繁殖季節になると、野性の雄猪が柵内の雌猪を求めて、侵入してくるといわけだ。

雄猪はなぜ、雌猪を山に連れて帰らなかったのだろうか。

ある時、山で暮らす雄猪が放飼場の雌猪と知り合った。

雌猪はなんとかして雌猪を山に連れ帰りたいと熱望した。

「ダメよ。あたし、行けないわ」

「なぜ？山って、とっても素敵なんだよ」

「……一度この水に染まった女はね、もう山には戻れないの」

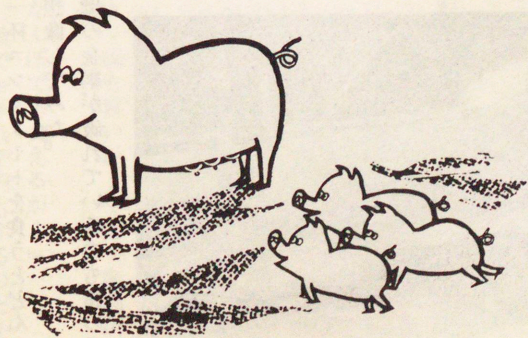
「そんな事ないノ愛があれば、ブヒッ……」

「私はねノ……今年の春にはイノブタを産むの、それでもよくなって？」

「……」

まあ、動物を擬人化するのはよくないことかもしれない。しかし私は、動物の習性を考えてやらずに飼うことは、もっといけないと思うのだ。猪にとっては、体温を下げたり、寄生虫から身を守ったりする泥ねい状の「ぬた場」が必要なのである。だからコンクリートをかじって地面を露出させたのかは、知らない。ただ、自分のつくった穴に、ふてぶてしく昼寝する猪の背中をみていると、何か、人間に対する動物の「意地」、を見るような

気がしてならない。



別海だより

「農大健児の意気を見よ」

酪農雑感

別海農協酪農協議会副会長

斉藤 忠 吉

私が牛に手掛けたのは、昭和11年であった。冷害凶作に依って畑作ではやって行けない根拠では、有畜農業が考え出され補助による乳牛が吾宗に入ってきたのである。だが、その当時は馬産が主であった。戦争がエスカレートして行く時代であったので、申用馬の生産使命があったのである。また、それと同時に昭和18年頃だったと思うが、飛行機の生産に一役買わされたのが牛乳の生産であった。カゼインを脱脂乳から作るとかで、今でも思い出されるのが標語に、『頑張れ牛飼い、飛行機たらんぞ』などと、牛乳生産に拍車をかけられた時代もあった。

終戦と共に牛飼いは下火になった時もあったが、食糧増産と言う掛声に畑作に力を入れるも草より収穫のない根拠では生活のすべもない有様であった。そこで、戦後は食糧としての酪農と云う型であられたのが、現在の酪農であったと思う。牛を飼うも人畜に係る農法である

がこれまた小規模経営であった。根拠P・Fが、機械開墾に依って開発されてから一般農家にも草地造成事業が入ってきたのであった。

私は、昭和28年に開拓者として一般既好農家の中に戦後解放になった軍用地跡に14・8ヘクタールの配分を受けて入植し営農を始めたのである。未經産牛一頭を本家より貰い受けて行ったのであったが、その牛も昭和29年春に分娩真近になって貯蔵飼糧の中毒によって死なせてしまつて、折角、搾乳が出来るし、子供に牛乳を飲ませる事が出来ると期待していたが、断腸の思いであった。

収隆昭和32年から搾乳をはじめました。中期資金を借り受け乳牛の増殖につとめるも、生れる仔牛は牝犢が多く自家繁殖ができず、隣近所から牝犢を購入して育成をしたものであった。

昭和42年に、構造改善事業による畜舎資金を借入れし、37頭収容の牛舎を建設し酪農専業に切替を行ったのであった。当時、成牛10頭・育成牛7頭であり、半分以上が使用していない建物で、どうするものかと世間の話題になった事がある。専業とはいいい、まだ低い生産であったが、トラクターは、昭和37年に8戸共同で利用組合を組織し、本機1台と作業機4台で、畜力から徐々に農機械に変わりつつあり、昭和40年に第二次構造改善事業に依ってトラクターが2台になる、昭和44年に道貸により3台目が入ってきたが、利用組合員は6戸となる。昭和47

年から組合の半数が独立し4戸共同となって行った。農業機械の導入が進むと共に経営規模も拡大され有林地や耕地防露林等も機械開墾によって牧草地と化して行った。規模拡大と共に農業の将来を見越してか、離農し他産業に転じて行ったのも此の頃が多かった。そんな事によって残った者が多少ながらも増反になった。

しかし、内陸は平坦な故に酪農経営には面積が少ない悩みがあった。私の前住地は、床丹川の水源地を背にした所であり開発が進むに、魚業の問題が生じて毎年春と秋に町役場保健所普及所の保健員が畜産公害の検査に来て町会名で改善勧告書が来たものであった。入植当時は水の便利さを求めて川端に施設を建設したのであるが、電気の導入によりホームポンプ等が出現し川は全く不用になったのであるが一度施設したら簡単に移動出来るものではない、自然に逆らっても高い所から低い所に流れるのが水であり、これを改善するには移転しかなかった。丁度その頃、根室中部地域農業開発事業が話題になっており、地元にとどまらず移動しても規模拡大の道はなし、開発事業に参加すべきか、地元止まるべきか、真剣に考える時であった。『どうせ一生の仕事として選ぶなら新酪に入るもよし』と、家族と相談の結果一大決心をして入植を決意し、関係機関に手続きを取り事情を分かっていただき、第一次入植者として香川団地に50年に入植した。

建売り牧場は、68頭収容の畜舎1棟に搾乳器具一式、

500 サイロー1基(自動給餌機つき)、糞尿処理施設、農機具庫1棟、農業機械は4戸共同によるサイレーンジ收穫一式等である。

入植して見て借入金償還を考える時に、再生産の費用も出して行かなければならない、その時の経営規模飼養頭数を考える時に公団の計画とは相反するが、増設農業機械の買増し等も止むを得なかったと今思う。

入植して早七年を経過し、いよいよ57年公団事業が完了売買して終って行くのであるが、最近の農家経済状況は極めて厳しいものである。5年据置き乳価は57年には50銭上げとなるが、物価の値上りに依って酪農経営者は頭を抱えておるのが現状である。これからの酪農は52年・53年と同じには考えられないが、消費者も無視は出来ない。生処販消は手とり合せてこの低成長時を乗り越えなければならぬと思う。経営の見直しと技術の向上による内部の拡大をして行かなければならぬし、思考模作をして行く考えであるし、微密な経営が求められる時と認識している。

自立して 年になるが、気持ちの安まる時のない農業事情を振り返る時に、明日はこうなるとの青写真はどうしてピンとがボケてしまっ傑作が出来ないものである。願わくば平穏な酪農事情を求めるのは私一人ではない事を知りつつ明日を待つ身に笑顔がほしい。

期待される育産基地 別海町から

別海町農業共済組合代表 監事
北 出 博

最近いろいろな立場の人がそれぞれの立場で農業や食糧問題を論じているが、農村や生産農民の間からは何ら積極的な問題提起は極めて乏しく過去いくどかの変革消長といったものは、すべて農民の自主的なものではなかつたように思えてならない。

こうした時点で次の提言で多くを学習できた、経団連の示した「わが国産業・農政の今後のあり方」と題する提言によれば、農業への財政負担を軽減し、農業の体質を強化して独り立ちした産業にするためには、政府による価格支持を減らして市場原理を導入し、大規模な専業農家を育成していくべきだとして、農業の自主的な体質改善を厳しく求めている。

しかし同時に、農業を重要な産業として日本経済の中に位置づけ、現在の農政の枠組みを大筋で認めたいうえで、生産性の向上を促す現実的な手だてを模索している。

この提言は「農業の年間産出額十兆五千億円に対し、国の農業関係予算は三兆円」と「補助金漬け」である点

を指摘。生産性向上により自立する方策として①経営規模の拡大②土地基盤の整備③コストダウンに目的を

つた研究技術開発④新しい農法の確立を挙げている。

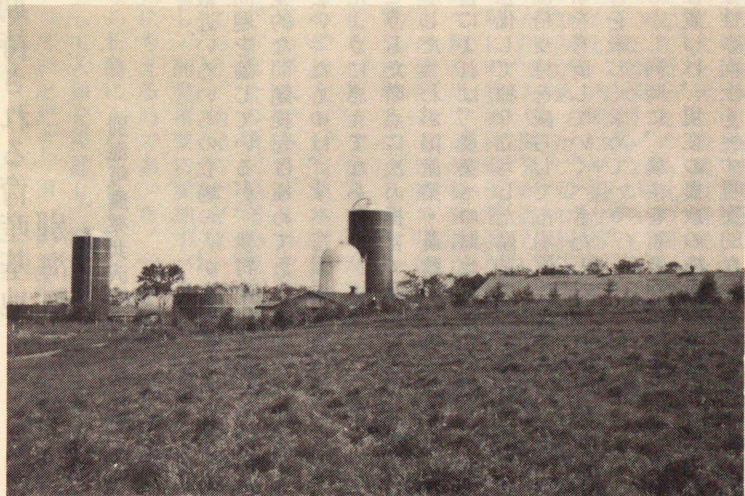
これまでの経済界の提言と違うのは、土地基盤整備に国費を重点投資すべきだ、としている点。農地は農民の個人財産であるため、基盤整備は補助金から融資制度へ切り替えるべきだ、との意見が臨調内にもある。

しかし提言は、土地に資金投下して優良農地を確保することは、生産性向上や食糧の安全保障にも有効だとの観点から、重点投資を打ち出した。

また、経済規模の拡大を目指しつつも、単純な兼業農家否定論はとらず、健全な農村集落づくりの大切さを認めている。

現実を見れば、畜産農家は牛肉、乳製品の輸入枠の拡大に絶対阻止と力み、裏では飼料基盤の貧弱さから濃厚飼料はもとより輸入粗飼料の継続的、安定的な輸入に完全に依存しようとしている。このような矛盾は日本の農業のいたる所に散見できることだと思ふ。

この矛盾を打ち破り真に独立した農業経営の確立が急務である。このために我々の農業に、いま最も求められるものは農業の哲学であり、農業の思想であり、そのことをよるこびをもつて実践する人たちを北海道の大地は「目的努力」求め続けることを励行している。



農場風景



実習風景

別海町で働いたこと

畜産学科二年 開 澤 浩 義

昭和五十七年八月一日、五時二十五分。とうとう北海道野付郡別海町に到着。実習させていただくのは別海町豊原（根釧バイロットファーム南一地区）の北田牧場。そこは行けども行けども牧場ばかり。澄みきった青い空と、緑の絨毯のような牧草地が地平線で一つになるところ。牛はのんびりおいしそうなお草を食べ、まるでここが本場に日本なのかと疑いたくなるような風景。やっとなついに別海町にきたんだ。

八月二日、午前四時半。緊張のためか目が醒める。牛舎の方からはもう何か物音がゴトゴト。急いで作業服に着替えて外へ出ると、さわやかな朝の空気に思わず体がびんと緊張。「おはようございます」と大きな声で奥さんにあいさつをして、別海町酪農実習の第一日がスタート。まずは飼料を配って牛を牛舎に入れる。乳房をきれいに拭きあげてから初めてミルクを使って搾乳。搾った牛から外へ出して牛舎内の除糞と掃除。後は牛を放牧地へ連れていったり、子牛の敷わらをかえミルクをやったりすると七時半。待ちに待った朝食はおいしすぎて

つい食べすぎてしまう。

一休みの後、十時から四時頃まで昼食をはさんで力仕事。晴れると牧草地で三軒共同のサイレージづくりや乾草の梱包上げ。それから肥料まき、草刈り、薪集め、その他いろいろ。雨ならのんびり牛舎の掃除や機械の整備。D型ハウスの改良、薪割りなど仕事はいくらでもある。

八月六日。今日は初めて乾草の梱包上げをする。特にこれは一年中で最もきつい仕事で、三軒の農家の親方や息子（ときには娘さん）、実習生などが総出で働く。実習生にとってはこれが晴れ舞台であり、遠く北海道まで来たかがあるというもの。その仕事というのは、グラウンドよりもっと広い牧草地で、前もって牧草を刈り取り、テッターをかけて乾草にしたものを、まずレーキで集草、ヘーベラーで圧縮・梱包する。そこまではたいたい機械作業であるが、それから次々と並べられていく乾草の梱包をトラックに積んで、D型ハウスや牛舎の二階に運び、もう一度積み上げるのはほとんど人力、人間の力にかかっている。最初のうちは力任せにトラックの荷台に放り上げているが、到底長くは続かない。いくら放り上げて落ちてくるといふ惨めな結果。選手交代で先輩の実習生や親方のやり方を見学している教員ももらう。さすがにうまくあつという間にトラックの荷台にみごとに梱包が積み上げられる。他の実習生に負けて

なるものか、がんばり、ようやく要領がわかりかける。昼食はその日に作業している家で、全員そろって御馳走になる。おもしろい親方ばかりなので話がはずみ、午前中のつらかったことなど忘れてしまう。それでも体の方はあちこちが痛む。一休みした後で今日の分の梱包をかたづけようと、若さと根性でまた梱包を放り上げる。

力仕事は遅くても四時頃までで、夕方の仕事のために一休み。親方たちは牧草や天気のことなどを相談して、明日からの共同作業の計画を調整。晴れば明日も乾草の梱包上げを続けることになって各自家へ戻る。ところでその間奥さんはひとりで家の仕事をやり、また自分の家で共同作業があるときは仕事を手伝ったり昼食やおやつを用意もしなければならぬのでたいへんだ。

五時からは朝と違って子牛にミルクをやり飼料を配ってから、今日放牧した牧草地まで牛を呼びに行く。放牧するのは家の回りにある八ヶ所の牧草地で、牧草の状態などを見て三日〜七日単位で順番に回るようにする。また牛を呼びに行く時間や牛を牛舎に入れる時間、搾乳やミルクをやる時間はきちんと決まっている。牛もよく調教されて知っているので仕事はとてやりやすい。しかし中にはおもしろい牛がいてときどき遊ばれることもあり、牛の方が頭がよいのではと疑ったことも何度か。搾乳が終わると、外がどんな天気であろうと夏の間は外に

放牧。かえって牛もその方がうれしらしい。一日のしめくりの牛舎の掃除をするころには、辺りはもうすっかり暗くなり、長くて短い一日が終わる。

九月五日。八月二日から今日まで本当によく働いたし、搾乳も一日も欠かすことなくやれた。何もかも初めてのことで無我夢中だった最初の頃より、仕事を覚えるにつれてつらかった仕事も楽しくなり、牛が可愛いくてたまらなくなつた。子牛のミルクやりや柵の中でいっしょに遊んだこと。どこまでも続く牧草地を地平線目指して歩いていって牛を呼んでくること。子牛が生まれたときのこと。病気になるた牛のこと。一日一日のことがありありと目に浮かぶ。とても明日帰ることなど考えられない。体はくたくたなのに、頭は何かで一杯で寝れない。

九月六日。いつの間にか別海町酪農実習最後の牛舎の掃除が終わわり、つらい別れがやって来た。一生ここで仕事ができたら……。透き通った空気と牛の糞の匂い。搾りたての牛乳。青い青い空。ぽっかりと浮かぶ雲。牧草地を燃やすような夕焼け。そして一日の仕事を終えてから入る風呂の気持ちよさ。すべてが最高だった。仕事はつらかったけど、それ以上のものがあつた。

今思うと、この実習で一番勉強になったのは、毎日真剣に働くことができたことだと思う。本当に働くことはすばらしい。実習に行つてよかった。

別海実習にて

畜産学科二年 林 弘 美

七月三十一日、15時30分発はつかり11号に乗る為に私達はなんと10時30分に上野に行った。大きな荷物を前におにぎりを食べながら5時間も待ち続け、ようやく乗り込んだ時は二人ともぐったり。心だけがすでに飛んでしまっていた私達は、切符を買うのを忘れていたのを思い出し、二十九日あわてて新宿へ行った。というわけで、指定席は取れず5時間も並んだ甲斐あつたか(？)、青森までは坐れたものの、函館から釧路までは立ちっぱなし。通路でうとうとしながら、なんとか釧路に辿り着いた。標津線の中から見えた牧草地。ああ、やっと来たんだな。果てしなく続きそうな牧草地に転っている草のロール。「なんだろうね、あれ、熊みたいだね」なんて話しているうちに、無事別海町到着。私がお世話になったのは、西春別の斉藤牧場。今回で2度目である。別海町役場まで迎えに来てもらい家に着いたのが夕方の6時頃。「又お世話になります」と牛舎に入っていくと、乳ふきをしながら奥さんが、「よく来たねえ」と笑顔で迎えてくれた。こうして私の北海道実習が始まった。

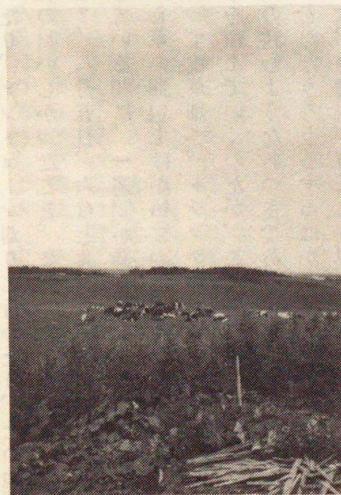
八月一日、すっきりと目が覚める。春の実習の時は、

興奮と不安と緊張の為、一睡もできなかったのを覚えている。牛舎へ行きまず乳ふきをし、ミルク、ルーサンをやり、青草をやる。朝食を終えた後は、牛を放牧場へ追って行き、それから除糞。通路を水で流したり、寝糞を敷いたり、デントコーン刈りに行ったり、その他諸々。夕食のおいしかったこと。2杯いや3杯くらい食べてたかな？。八月五日、六日と共進会があり、あれよこれよとしている間に、一週間が過ぎてしまった。そうして七日から草の梱包上げが始まった。朝食をすませ、4ト車に乗って牧草畑へ。トラックの上に乗りコンバクトされた草を積んでいくのだが、これが結構むずかしい。何しろ目の眩むようなあつさである。高く積み上げていく草の上をただらうろろするばかり。8段に積み上げた草を今度は、牛舎の2階又はD型ハウスに積み上げていく。あくる日の8日から15日までの一週間私は寝込んでしまった。結局一番忙しい時に何もできなかったわけである。なんとも情ない話である。

八月十六日、第一回目の麦乾運び。美幌峠を越えて、往復3時間の道程をカラオケをかけたながら行く。夕方4時頃、8段に積み上げられた麦乾の上から見た能取湖、丹頂鶴、トラックの中から見えた網走湖、原生花園、野上峠から見た屈斜路湖、一日の仕事を終えたという充実感まさに言葉にできない程。その後5〜6回麦乾運びがあつた。

九月十四日、4番目の子どもが入院したので、その日から、二十九日まで日中の仕事は一人でやることになった。朝食を終えた後、親方は牧草畑へ。私はまず除糞、若牛に乾草をやり、水をやり、昼食後は朝親方が刈っておいてくれたデントコーンをやり、ルーサン、人参をやる。(最初6人も人参をもらい、仕方なく3つくらいに切って、やっていたのがそのうち丸ごとポリポリ食べ始めそろそろなくなるといふ頃には好物になっていった。デントコーンよりも配合よりもまず人参を食べるので、今度人参運び。1t5千円だそうだ。)そして2時30分に牛を入れる。それから青草をやり、ミルカーを洗い、4時30分には搾り始める。搾り終わったあともう一度除糞。そして尿溝に草を敷き、後の通路を掃いて一日の仕事が終る。五衛門風呂に入り、夕食の時に飲むビールのおいしかったこと。そうこうしている間に2ヶ月が過ぎた。この2ヶ月の早かったこと。春の実習の時は、一ヶ月間があんなに長かったのに。2ヶ月間もいると、自分がそこにいるのがごくあたりまえのような気になり、こうやって、仕事をしたり、洗いのをしている自分ももうずっと前からこうやっているようなそんな気になってしまいうから不思議だ。この2ヶ月間いろいろな所にも連れていってもらった。密漁や運動会や産業祭も楽しかった。この2ヶ月の実習は、私にとっても勉強になった。

たくさんの人に出会い、話をいろいろな生き方があるのを知った。病気になるったり、怪我をしたりいろいろなことがあったけどそのおかげで、健康であることのありがたさ、親のありがたさもわかった。とにかく学校では学ぶことのできない何かを学んだ気がする。



集う学友

くわれら仲間く

農学に集う

― 軽薄的大学論 ―

日本大学農獣医学部拓殖学科二年

筋野 勉

農大の畜産学科の機関紙に、日大拓殖科の私が寄稿するとは何とも奇妙でして、農業という話題の他は共通項がないようなマイナーなとり合わせではありますが、そのマイナーとばかりも言ってもらえないのが農業であると思いません。農大の「青山ほとり」の歌詞にもあるように、人間食わずには生きられないわけで、そう考えるといささか過激な表現かもしれないが、農業イコール生活の根本とも言ってもよいのではないだろうか。

まだまだ偉そうに「農業とは……」などと語る身分ではありませんが、最近では軽視されがちだった農業が、多少なりともその食糧(本来は安く安全な食糧)を供給するという立場において、新聞紙的レベルでも話題というか、問題になってきたようです。毎日のように紙面に

のる農産物貿易問題、余剰米、「西暦2000年の地球」などでも反響を呼んだ将来の人口増加と食糧不足の危機飢えるアジアやアフリカの人々、「複合汚染」でも騒がれた食品公害など上げていったらきりがなくらいです。そういった意味では、これらの問題が我々の生活に直面している以上、「農学に学ぶ我々にとって、その使命は大きなものである」などと思うことも決して大げさではないし、また農学に学んだのだというそれなりの技術や知識を持っていてもバチは当たらないであろう。

話を表題の「農学に集う」ということにもどしてみます。なぜ大学に来たのか?、なぜ大学に来たのか?、と問われたら何て答えることができるだろうか。まあ適当にそれなりのことは言えるかもしれないけれど、本音はどうだろうか?。正直言って自分の場合よくわからないのです。農業という道を選んだのは自分でも納得できるけれど、大学という場を考えるとちょっと答えに困ってしまうし、20才にもなつて親に色んな面で負っているのは情けない話かもしれない。し・か・し、軽薄的自己弁護をすれば、それはそれでいいのかもしれない、と一言で片づけてしまうことだろう。私はケーハクそのもので、この場合は片づけさせてもらいます。

2年通ってやっとわかったが、大学というところは驚ろく程に休みが長いし、(このことは前から知っていた)

色んな意味で自由だと思ふし、それゆえその重みを痛感しました。形に残る、残らないは別としても、一応四年間というモラトリアムの中で何をやっていけるのかということアイデンティティなるものが試されるのだろうと思う。何を書いているのか自分でもわけがわからなくなってしまうが、そんなわけで結論、大学では、…目標を持っていないと張り合いがないし、本を読んでもないし、学生らしくないし、友だちがたっくんいないつまらないし、何をやっても楽しくやらないとおもしろくないのです……?。

肥育試験について想うこと

日本大学農獣医学部畜産学科二年
草地学研究室肥育班 菊池久美子

肥育試験の研究班に入ってから一年半になりました。私が所属している研究班というのは、乳用去勢牛の肥育平たく言うと肉牛の生産について試験をしています。

入った当初、恥しながら私は畜産とはどういうものかまったくわからなかったのです。当然のごとく、この研究班が行なおうとしていることの目的や具体的内容すら

胸をなでおろしました。

屠殺場まで見学に行き、今までかわいがってきた牛達が屠殺され(その時点では、とても暗く重い気持ちだった。)

“いい牛だ”と言われた時には、何とも言えず感動しました。今まで半ばベト感覚で飼ってきた牛達も、考えてみると経済動物。初めは、出荷するなんて……とセンチに思うこともあったけれど、経済動物としていいできであることが彼らの価値なんだと思ひ直しました。

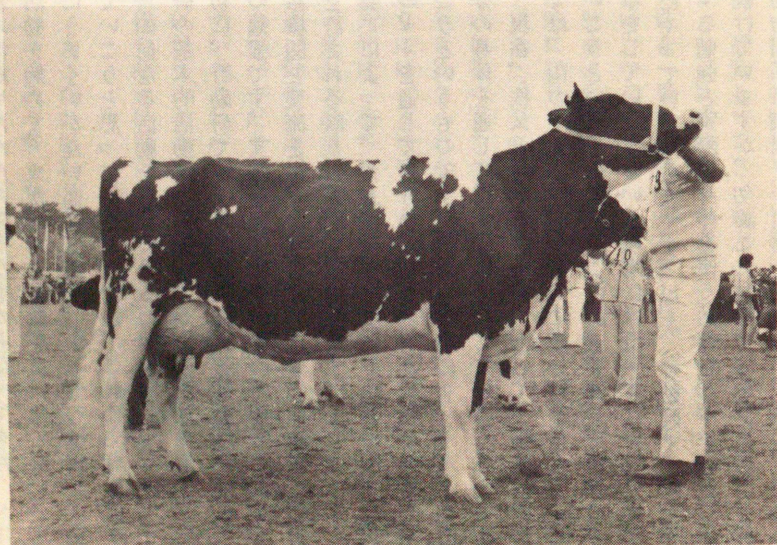
だから、感動したのだと思うけど、でも私は、自分が初めて育てた牛達を“経済動物”という目では思い出せない。やっぱりかわいい、かわいい牛達です。今でも。

いろいろ苦労話もあるけれど、それがあるから味も出てくるし、牛もかわいく見えてくる。なんて、生意気だったでしょうか、すみません。

もう、第二回の肥育試験も中期なのですが、私には他にとても気になる牛がいるのです。私の名前をとった牛で和牛とブリテッシュ・フリージャンのF1です。♀です。

本当は、彼女のことを書きたかったのです。私はもう母親の気持ちです。彼女がかわいくてしかたがないのです。彼女は、二月にいなくなりませす。そのことを思うと眼がぐしょぐしょになります。

終わり



わからなかったのです。

ただ、こういう学科に入ったのに何にもしないのは、もったいないし、毎日、牛に触れることができるんだなあという動機から入室したのでした。

歳月とともに私はどの位成長できたのでしょうか？それでは本題に移りまして……。

最近、家畜の飼養頭羽数の増加に伴い、輸入飼料、特に濃厚飼料の主たるトウモロコシやコウリヤンの輸入量が増加してきました。

これに対して、国内での濃厚飼料の自給率は、可消化養分総量に換算して二十五パーセント、飼料穀物では一・三パーセントにまで低下してきています。

飼料原料の約六十パーセントはアメリカから輸入しています。したがって日本の飼料の価格は主としてアメリカの穀物の生産量と相場によって影響されてきます。

私たちの試験は、そこに目をつけたもので、輸入物の濃厚飼料に代り、粗飼料であるサイレージを肉牛に代替給与するものです。そして、どの位の期間を要するか、肉質は代替しない通常のものにどれだけ迫れるか、経済的にうまく行なえるのか等と問題にしています。

具体的には、牛を試験区と対照に分け、試験区にはサイレージ給与を、対照区には配合飼料を給与しています。

第一回の試験も四月に終え、なかなかの成績でみんな

〜われら農大生〜

「この素晴らしき仲間達に」

野生動物研究会

生き物が、三度の飯よりも好きなんだ。けれども一人で勉強したのでは、その知識は自分の興味のある生き物の範囲で停まってしまう。もっと貧欲に多くの生き物達の事が知りたい。こんな悩みを持った奴が他にも居る筈だ……。類は友を呼ぶ”とはよく言ったもので、出来上がったのがこの野生動物研究会です。(以後、野動研と略する。)ここで、野動研とは一体どんなサークルであるのかをこの紙面をお借りして簡単に紹介してゆきたいと思います。

昭和54年「野生動物の観察を通して、自然と親しむ事を野動研、発足の主旨とする」を会員招集の合図とし我が愛すべき野動研は創設されました。とにかく暗中模索の状態で始められたサークル活動は、一時は、その響き故「夜動研」夜間活動研究会……夜になると酒を飲み経堂界限を騒がす変人の集まりと烙印を落され苦しく辛い

日々を過ごした事もありましたが、日を追うにつれてその基本活動もだんだん確実なものとなってきた。サークル活動を始めて、まだあまり年数がたっていないので今だにうまくいかない面もあるが、少しづつ改善して前進していこうと思っています。では、これから野動研が今日、如何なる活動を行っているのかを記してみます。野動研の基本的活動は、大きく二つに分けられます。先ず最初に、野動研では、自分の興味ある動物についての個人の勉強です。文献を調べたり、その方面で活躍している諸機関と交流を持ったりして、自分の興味ある動物の事を許される限りの範囲で勉強します。そしてゼミ(勉強会)によって、各人が今やっている勉強の事を発表し、そのゼミを通して自分の知らなかった動物の事を知って、いこうというものです。次に、実際にフィールドへ出て、自分の身体を通して野生動物に接していこうというもので、現在、秩父と丹沢をフィールドとして、毎月何回か赴いては、山の中を歩き回りそこに棲む動物達の姿を知って、いこうというものです。この調査を通して何か大きな仕事をしていこうという段階には至ってはいませんが地道にやっていくつもりです。以上、野動研では机上を主とする勉強と実際に身体を使う勉強を二本の柱とし活動を続けていますが、勿論これだけではありません、外部の動物関係諸機関との交流を深めたり、動物の研究をし

ていらっしやる著名な方々のお話を伺ったり、また動物園にも度々訪れては、海外のその地に行かなくては見ることのできない動物を観察し、その職員の方から色々なお話を伺い、動物園のあり方について考えたりします。また、フィールドを離れて、遠方まで観察に行ったりもします。例えば、対馬等にも赴き貴重な体験をしてきました。西表島・沖縄やオーストラリア・アフリカへ行ってみたいなどと会員の夢は尽きること知りません。

さて、私達は、昭和57年度の収穫祭の文展に初めて参加しました。何をやって良いのかも分らず当惑しましたが、文展初参加なのだからとサークルの紹介と、今、行っているフィールドに棲息する動物達の簡単な紹介という事になり「この素晴らしき仲間達に」をテーマにし文展を見に来てくれた方達に、動物の素晴らしさを一人でも多くの人に分って欲しいと願い文展を開きました。さて結果はどうだったでしょう。収穫祭が始まる前は不安で一杯でしたが、終了後、私達は、初めてにしては満足できる文展が出来たと思えました。私達が本当に嬉しかったのは、一般の人達の中に、動物に興味を持っていての方が、本当に多勢居らしたことです。確かに、私達の文展を見に来て下さった方達は、多少なりとも動物に興味を持っていらっしやる方達でしょうが、本当に小さな子供からお年寄りまで、皆さん様々な質問をして下さ

って、私達の勉強不足を思い知らされる様な事もありました。観覧して下さった方々の様々な意見、質問、感想によって、私達は来年の文展に対する抱負と動物に対する興味を一層かきたてられました。本当に生き物は素晴らしいものです。どんなにちっぽけな奴でも、大自然の中で懸命に生きています。その姿は、時に雄々しく、また時には見えない程弱々しくも私達の目に映ります。また、その姿故に忌み嫌われるへビやトカゲ達も実際に彼等の事を知り、付き合ってみると、こんなに面白い生き物なんだなど、愛らしくも思えてきます。私達の周りには、本当に多くの生き物が生きているのです。私達人間は、彼等の存在を全く無視して生きていく事なんて、果して出来るのでしょうか……。

私達、野動研は、発足四年目をようやく迎えようとしています。まだ本当にサークルの基礎が出来上ったばかりですが、これからもより一層、動物達の知識を吸収し彼等に対する考えを深めていきたいと思えます。今後の野動研の活動に期待しててください。

大自然の温かさを母とし

大自然の厳しさを父とす

私達は彼等の瞳の輝きを忘れてはならない

ああ 素晴らしき仲間達よ

「日本酪農の現状と展望」

牛 飼 の 会

私達、牛飼の会では主に酪農について勉強しています。今から約3年前に、牛飼の会は誕生しました。当時、山地酪農研究会の会員だった中沢真一郎先輩(当時一年)が山地酪農だけでなく色々な形態の酪農について勉強したいと考え、若月一之先輩(当時一年)小林 先輩(当時三年)らと語り合い結成されました。そして2年後第八十九回収穫祭に展示で参加しました。第一回目の参加で多くの反省点が出されました。そして第九十回収穫祭に「日本酪農の現状と展望」という題で展示発表しました。以上その展示の内容です。

「日本酪農の現状と展望」

一、はじめに

最近我国の酪農は急速な発展をとげ今や、国民の栄養上、また農業の構造改善上欠くべからず存在となっている。しかし今日、牛肉乳製品を含む農産物輸入の自由化枠拡大の問題が持ち上がった。

草地開発 通年サイレージ利用などの研究、拡充をはかるべきである。

三、生産

(前略)

生産関係では、現在、問題になっている「不足払い制度を国がどのように改善していくか、また各酪農家においては、生乳生産費をいかに低くしていくかであり、これにはまず自給飼料への依存度をふやし購入飼料をへらし飼料費をおさえることと、飼養規模拡大と省力化を目指すし、それによって労働費をおさえることが今日の重要な課題である。

四、消費

(前略)

現在、我国の酪農は乳のだぶつき、飼料の高騰、海外からの市場開放の要求等あらゆる諸問題をかかえている。これらの諸問題を打開し消費拡大を目指すためにはそれなりの条件が必要であることはいままでもない。そして基本的には国民所得の増大、安い消費者価格、牛乳の品質改善という条件がどれだけ満たされているかということによって規制されよう。したがって消費拡大と酪農発展のためのさしあたりの対策は決して生乳の生産調

何故、我国の酪農生産物は、国際競争力が劣るのか？
「飼料」「生産」「消費」それぞれの面から考えてみたい。

二、飼料

近年、我国の酪農経営は、急速に多頭化が進められ、それにともなつて重要な課題は、自給飼料の大量、省力低コスト、生産があげられる。北海道では恵まれた草地飼料畑を主軸に自給飼料依存の欧米型の飼料構造で発展しているのに対して、自給飼料の不足する都道府県では規模拡大と共に流通飼料依存の傾向を深めている。一方、世界的な人口の急増、異常気象、それにともなう食糧不足と調製貯蔵技術の不備などによって大量の輸入濃厚飼料に依存するなどのかたよが見られる。

(中略)

穀物の自給率の低下をもたらした最も大きな要因は、畜産物消費の増大と我国の畜産のあり方にあるという点である。具体的にいえば、国内における家畜飼料の増産を積極的にすすめることなしに、急激に畜産物の消費を増大させたことにより、飼料用穀物の需要の急激な拡大を輸入穀物の増大によってまかなわなければならないことになった。これが我国の穀物自給率の低下をもたらした最も重要な要因である。

そこで飼料自給率の向上をはかるためには、水田裏作

製などというものではなくて、安くて良い飲用牛乳の安定した消費拡大でなければならぬと思われる。ゆえにこのような方向にもっていくためには乳業独占の独走を許さない。また複雑怪奇で非近代的な現行の流通機構を根本的に改善する。またデタラメな品質標示や農業汚染などによって失われた信用をとりもどす等の処置が行なわれるべきであろう。

五、おわりに

戦後、我国の酪農は、大きな発展をとげたが、それは何と云っても、生乳が栄養的に優れて完全に近い食品であることと、草を栄養食品に変えることができるという経済性の利点、並びにこの点を着目した国を初めとする関係機関が積極的な後押しを講じてきたからである。今日の日本酪農は、生乳換算と国内生産量の約七割を自給しているがその元となる飼料のほとんどは海外からの輸入にたよっている状態である。そして、輸入自由化、枠拡大が実現されると、我国酪農は崩壊し、長期にわたつての努力も水泡に帰すことになりかねない。消てなくなつた大豆、ナタネの二の舞になるようなことは絶対にさけるべきである。ところで今、我国が自由化を要求されている農産物品目のうち乳製品では、生鮮ミルク、練乳の数種、プロセスチーズ等であり食糧安保より考えると

国民的安全性とは縁のうすい品目である。我国が将来にも貿易国でゆく限り遅かれ早かれ輸入枠拡大しなければならぬ。つまり、世界経済は各国の相互連帯を離れて一国だけが勝手気ままに振まうことはできないのである。牛飼の会は、我国の酪農生産物が国際競争力を増し、酪農家が安心して経営できる社会を築くように、政府、酪農関係諸団体、各酪農家の大きな努力を期待するものである。

※ ※
今回の展示に関しても多く反省事項が出ました。

今後牛飼の会は、机上だけの論理に終らずに、外へ出て、実習調査などをして広く酪農の勉強をしてゆきたいと思えます。

そして、第九十一回収穫祭に向けて、より以上に努力をしてゆきたいと思えます。



(おわり)

畜産学科二年 河野 真治

「農大には、農村調査部というクラブがあるということを知っていますか。」

農友会 農村調査部

さて、何やら長ったらしい題で、始まりましたが、本当に、皆様におかれましては、農友会農村調査部の存在を御存知でしょうか。

畜産学科で、多少とも情報通の人だったら、「ああ、あのよく酒を飲むクラブか。」「なんだ、ソフトボールばかりやってるクラブか。」などと、答えてくださるでしょう。しかし、本当の事を言うと、こう答えて下さる方は、実は、畜産学科に潜んでいる農村調査部々員と、多かれ少なかれ、かわりをもっていらっしゃる方達であって、ほら、ちょっとお隣りにいる方に、聞いてもらいたい。その存在感となると「無」に等しい状態なのです。

それも、そのはず畜産学科で部員として潜んでいるのは、3年生（昭和57年12月現在）四人、2年生になると一人と、いう有様なのです。今年度（57年度）私達、農村調査部畜産連合会（私達が勝手につけた名称）では、クラブに於ける畜産連合会の後継者育成を目的として、部員勧誘を行ないましたが、結果的には、新一年生で入

部を希望された方は「0」でありました。なんと、なんと、ついには、現在日本農業の抱えている後継者不足が私達のクラブ、及び農村調査部畜産連合会にまで押し寄せて来ました。これでは、私達農友会農村調査部、ひいては、日本農業の発展は望めるものではありません。さて、ここで考えなければならぬことは、数々の問題には、すべて原因なるものがあるということ。私達クラブにどうして新入部員（畜産学科入）がこないかが問題でありその原因としては以下のことが多少とも影響しているのではないのでしょうか。

それは、
一、農友会という肩書きが、皆様方に何かしら影響を与えている。

一、「農村調査部 なんだ そんなクラブ」と言う皆様方の私達のクラブに対する理解度のあまりにも低いこと
一、その他
等々であります。

そこで、以上の原因を、消し去る手だてとして、私達農村調査部というクラブを多少とも理解していただく上で、活動及び私達の部内での生活等を御説明させていただきます。

私達、農村調査部では、日頃、部員一人一人が、種々の農業問題（この中には、現在畜産界の抱えている問題

畜産物の自由化等）を考えて、その問題について、討論（表面的には、かっこいい言い方であるが、本当はけなし合い）を行なっています。又、私達、文化系のクラブは、体育系のクラブと違ってその活動は、ほとんどと言ってよいほど、目立たないのでありますが、しかし、私達は、収穫祭の文化芸術展の場をお借りして、やっことことで日の出を迎えるのです。けれども発表は結果であり、私達の本来の姿である。「農村を調査する」「農家の方々と一緒に働き、寝起きを共にする」という過程が大切であるのです。又、それに加え、最も大切なことは、調査結果を調査地に還元し、多少でも地域農業又は、個々の農業経営に役立ててもらおうことなのです。

以上、訳のわからない事ばかりを言ってきましたが、要は、私達、農村調査部々員は「農業」というものを学生なりに真剣に考えているという事を御理解していただきたいのです。以上が、私達、農村調査部の活動の一部であります。次に部員の把握できる限りの生活について、御説明してゆきたいと思えます。

私達部員は、日頃、あのだこかの会社かと思われる常磐松会館四階にある部員に集まっています。部室の雰囲気は本当になごやかです。先にも問題となっていた農友会という肩苦しさは感じられないのです。しかし、やはり一つの団体・組織ですから、規則や礼儀などは、しっ

畜友会だより

昭和 57 年度畜友会行事報告

- | | |
|------------------|----------------------------------|
| 1月10日 | 昭和57年度畜友会活動開始 |
| 1月18日 | 四年生送別会 |
| 3月20日 | 卒業生記念品贈呈 |
| 4月7日 | 入学式において畜友会の説明 |
| 4月15日
～16日 | 新入学生外オリエンテーションにおいて畜友会の説明 |
| 4月19日 | 新入生歓迎コンパ |
| 4月22日 | 役員補充(山田, 坂齊, 桜井, 高橋) |
| 5月16日 | 畜友会ソフトボール大会(第一回) |
| 6月～7月 | 夏季個人農場リスト作成及び紹介 |
| 6月10日
～19日 | 第12回学内スポーツ大会参加 |
| 6月28日 | 第一回講演会
＜近藤典生教授－生態系的生物生産の考え方－＞ |
| 7月15日 | 第22号「ふじみの」編集委員会発足 |
| 8月20日 | 1年生厚木農場において収穫祭の説明 |
| 9月20日 | 第90回収穫祭畜産学科実行委員会発足 |
| 10月上旬～ | 「ふじみの」原稿募集 |
| 10月9日 | 収穫祭本部開き
＜第90回収穫祭畜産学科統一本部発足＞ |
| 10月31日
～11月4日 | 第90回収穫祭参加 |
| 11月28日 | 畜友会ソフトボール大会(第二回) |
| 12月13日 | 昭和57年度定期総会 |

かりと存在しています。これはある程度の常識として規則は守るべきであるし、礼儀、これは人間として当然持ち合わせているものなのです。何も肩固しくはありません。少々話しがクサクなってきましたが、要は、私達のクラブは楽しさいっぱいのクラブということが言いたいのですが、著者の言い回しが下手な為、思っていることの半分も言っていないのです。

もう一つ、言っておきたいこととして、部員は、部活動とは別に自主的に、日本各地に実習に行き、農業をより身近なものといっていることです。北は北海道(酪農)南は沖縄、石垣島(バイナップル収穫)その他、群馬県のキャベツの産地として有明(?) 婦恋村(キャベツ実習)等々、それぞれ休暇中を有意義に過しています。机の上の農業に関する勉強だけでなく、実際に体を動かして、汗をかいて働くのです。(実際 北海道酪農実習などは初めての人のとってはきついと思われませんが、その後のビールの味がまた格別ですよ) 本当の農業を経験せずして、農業問題は語れないでしょう。

まあ、いろいろと訳のわからない事ばかり言ってきましたが、ただ単に私達農村調査部の内幕をお見せしただけのこと、何も、いや何ものですよ、私達のクラブに入

って下さいと言っている訳ではないのですよ。本当に。いや本当にですよ。

今回の御説明で、多少御理解していただけたと思いますが、詳細を知りたい方はお気軽に、常磐松会館四階農村調査部まで 足をお運び下さい。部員一同心よりお待ちしております。それでは……(乱文を御許し下さい)

畜産学科三年 織田充裕



第90回収穫祭畜産学科会計報告

収入の部	
畜友会よりの援助金	470,000
前夜祭本部よりの援助金	21,500
体育祭本部よりの援助金	47,000
特別企画本部よりの援助金	37,000
収穫祭本部より北門への援助金	170,000
宣伝隊本部よりの援助金	10,000
	755,500

支出の部			
	予算	援助金	決算
総務費	150,000		152,963
北門		170,000	178,621
前夜祭	28,000	21,500	51,830
体育祭	110,000	46,000	162,200
特別企画	32,000	37,000	84,231
宣伝ストーム	110,000	10,000	128,455
文化展	40,000		40,000
	470,000	284,500	798,300

(収入総額) 755,500 - (支出総額) 798,300 = 42,800 (赤字)

※赤字分は畜友会より補助されたい。

上記相違ない事を認めます。

4年 岩崎洋一	3年 菅野泰	
2年 君嶋正行	1年 菅原淳	

昭和57年度畜友会会計報告

収入の部		
	予算(円)	決算(円)
前年度繰越金	122,930	122,930
新入生	1,440,000	1,200,000 (8,000×150名)
転科生	0	6,000 (6,000×1名)
編入生	0	32,000 (4,000×8名)
利息	0	5,917
計	1,562,930	1,366,847

支出の部		
	予算(円)	決算(円)
卒業生送別会費	70,000	50,914
卒業生記念品費	40,000	42,500
新入生歓迎会費	70,000	92,206
新入生オリエンテーション費	25,000	21,320
「ふじみの」20号印刷費	316,000	316,000
講演会費	40,000	16,450
スポーツ大会費	100,000	99,901
学内スポーツ大会慰労会費	60,000	81,241
農場リスト費	5,000	2,980
収穫祭説明費	40,000	19,890
収穫祭援助費	470,000	470,000
コンパ援助費	55,000	0
総務費	50,000	71,973
予備費	221,930	0
計	1,562,930	1,285,375

(収入総額) 1,366,847円 - (支出総額) 1,285,375円 = 81,472円

上記相違ない事を認めます。

会計監査委員

4年 岩崎洋一	2年 菅野泰	
2年 君嶋正行	1年 菅原淳	

畜友会任期を終えて

畜産学科三年 小 澤 真 也

まず、最初に言っておきたい。自分は畜友会役員というものを二年間やってきた。やってきたことについては良かったと思う。それなりに勉強になったし、やりがいもあった。しかし、もう一年やってみようとは決して思わない。

自分が何故、畜友会役員になってしまったのか。それはだまされに他ならない。今思うと、一年の時に収穫祭を手伝ったのが間違いの第一歩だった。収穫祭中というのは、常に酒を飲むのだ。寒いからと言って飲み、それだからと言って飲み、仕事が進まないからと言って飲んでいくのだ。自分も、暇な時は、つき合っただけ飲んでうちに先輩に顔を覚えられてしまったのだ。

そして一年の終りの役員交代の時に声がかかったのだ。自分の所に来た男は、一年の時から畜友会に居る奴で、はなはだ軽薄な男であった。その男が言うには、畜友会は二年生が中心だ。だから、やりたいことをやっていけばいいし、酒だっただけで無理に飲ませたりしないんだ。というのであった。当時の自分は、山岳部をやめてバイトば

かりしていた。金銭的にはゴッソであったので、学校の行事にも何か参加したいな思っていた矢先であった。

自分は、まいつば臭いなと思いつつも、了解してしまっただけだ。それからというものは予想以上に苦勞した。何に苦勞したかと聞かれても、すぐに思い出せないけどとにかく苦勞したような気がする。

自分は、あの軽薄な男をうらんだ。そして自分の軽薄さにもいやになった。どうせ軽薄なら軽薄な同好会にでも入ればよかったと思った。しかし、どうすることもできなかった。畜友会は予想外に組織力があって、ひとたびOBになってしまおうと、その人は熱烈な畜友会支持者になってしまおうのだ。

OBの前に出るとノド元まで出かかった止めたいということばが、ひっこんでしまおうのだ。我ながら情けないと思うが、あのプレッシャーは大きかった。

今、自分は晴れて引退いたしましたので、熱烈畜友会支持者になろうとしています。現在畜友会をやっている人達も、ほとんどだまされて役員になった人だから、たいへんだと思う。できることなら止めたいと思うことだろう。自分は、これからその人達を、やさしく励まして、いん居しようと思っております。

畜友会員の皆様は、役員のたいへんさ偉大さを少しでも理解し、協力してやって下さい。

収穫祭を終えて

畜産学科三年 阿 住 進

私は三年間収穫祭に携わって来ました。ある面に関して今の収穫祭に対して否定的であった私にとって収穫祭とは苦痛であったかもしれないのであります。

そんな私が学科の統一委員長として、選ばれた(実際だれが委員長になってもよく、簡単に言えば一番仕事の出来ない人にやらせた理由で)とにかく私は頭として頑張ることにした。私の仕事の内容は酒を飲む事(各学科の統一本部開き)である、私は最初の本部開きの日泥酔状態になってしまい、ラーメンのドンブリに顔をっ、こんでねていた(ラーメンのつゆで溺れそうになった)etc、だそうらしい、いやはや自分でも先が思いやられたものでした。……、その時期をなんとか乗りきりようやく宣伝パレードの日を向かえた、宣伝は二日間に渡り成城学園、田園調布、目黒、恵比寿、桜商店街、翌日高円寺、新宿、銀座、渋谷、二子玉川、と各地を無料配布の野菜をかついで走り回る。二十二歳の私としてはハードな仕事であった。秋晴れの十月三十一日ついに収穫祭が始まった。空はあくまでも晴れていた。

「家畜苑を終え」

畜産学科三年 伊 藤 幸 他

知らない者同志が集って、無から何かを生み出すことは難しいことだと思えます。今回の収穫祭の家畜苑でも各研究室から集まったメンバーも初めて見る顔が多かったようです。そのためか、はじめのうちは集まりも悪く、思うように仕事はかどりませんでした。しかし、収穫祭が近づくにつれて、一つの目標に向かってみんなの気持ち一つにまとまってきました。いろいろな面で各個人の才能が生かされ、漠然としていたものが、はっきりした形になってゆきました。その成果としては、寒い中、徹夜をしてまで作りあげた誰にも親しめると評判のよかつた門や家畜の説明書にも現われていたと思えます。これらはみんなの協力があってこそできるものだと思います。

収穫祭中私たちが感じたことは、同じ日本に住みながら東京という都市の中では、家畜はあまりなじみが少なすぎると言うことです。家畜は日常生活において、たえず必要なものだし、かかせないものだと思うのに、どうしてなのだろう。説明をしていると横の方から、「私、

初めて牛を見たわ」とか「雄の牛は乳をしぼらないのですか」などと私たちにしてみれば冗談の様に聞こえるのですが言っている人たちは真剣なのは、驚きました。そもそも家畜は、動物園などでは見られない動物であるためかもしれない。

家畜苑に持ちよられた家畜は、同じ農大生でも畜産学科以外では、それほど見たことがないと思われる厚木農場の水牛を始め、いの豚、日本鶏などや畜産学科の私達でも見る機会の少ない各研究室の実験動物などの集りである。いろいろな面で家畜苑は、農大の収穫祭において、農大に畜産学科ありと表明しているようでもあった。また畜産学科の団結の強さを表していると言ってもおかしくないと思います。

今までは収穫祭のあと病気になることの多かった家畜も、みんなが交代で泊まりこんで世話をしてくれたおかげで、事故も起きず元気で農場に戻って行きました。家畜を返したあとには、誰もが一つのことをやりとげたという満足感と同時に、言葉で表わすことのできないような悲しみのような感情を抱いたことでしょう。収穫祭のあとには、収穫祭ボケになった人もいたのではないでしょうが、自分もその中の一人です。最近になって、ようやく収穫祭ボケがおとってきました。でも今回の収穫祭で私達が得たものはこれからの人生の上でも忘れられな

いものになると思います。それと最も忘れてはいけないことは、仲間のこと、私達をささえてくれた友だち、先輩方、先生のことです。

最後に、家畜苑委員がいろいろ皆様にご迷惑をおかけしましたことをお詫びするとともに、ご協力いただいた各研究室の皆様、諸先生方、馬術部の皆様から心からお礼申し上げます。また、農場の皆様、家畜をお返ししてからも大変だったと思いますが、これからもご指導いただこう、よろしく願います。皆様どうもありがとうございます。

家畜苑委員長



第九十回 収穫祭

前夜祭

脚本・構成

キャスト

「銀の笛」

脚本・構成

キャスト

演技賞

山田真寛 1年
瀬古真一 2年
山井美子 1年
岩辺絵里子 2年
山瀨守雅浩 2年
坂齊雅浩 1年

美人コンテスト「フォービュートイフルヒューマンライフ」

脚本・構成

キャスト

小池春彦 2年
小沢真也 3年
河野真治 2年
小池真也 2年
瀬古真一 2年
山田真寛 1年

野

脚本・構成

キャスト

「ケンタッキーの東」
脚本・構成
キャスト
山田真寛 1年
桜井美子 1年
岩下文雄 2年
五十嵐勝芳 3年
加藤章 1年
松永香 1年

先生のだ自慢

「知床旅情」
「北国の春」

石島芳郎 先生
栗原良雄 先生

体育祭

総合祭
バックボード

七位
「飛翔」
鈴木孝彦 2年
乾利雄 2年
石井康夫 2年
鈴木明彦 2年
福田洋人 2年
岩瀨守雅浩 2年
坂齊雅浩 1年
加藤正人 2年

製作

仮装行列
リレー女子
綱引き
農大競馬
マス・ゲーム
先生バンザイ
農大大蛇
忍者レース(女子)
教職員対抗リレー

出第2位
出第2位
出第3位
出第2位
出第2位
出第2位
出第2位

ファイヤーストーム

仮装青山ほとり大会

準優勝

昭和五十七年度第九回収穫祭
畜産学科統一本部役員

。統一委員長	阿住 進	3年
副委員長	臂 吉浩	3年
副委員長	岩 下文雄	2年
。宣伝ストーム委員長	瀬 古真一	2年
。前夜祭委員長	岩 下文雄	2年
。特別企画委員長	小 沢 真也	3年
副委員長	小 池 春彦	2年
。体育祭委員長	岩 渕 守男	2年
副委員長	坂 齊 雅浩	1年
。家畜苑委員長	伊 藤 幸他	3年
。會計補佐	山 田 寛	1年
。北門アーチ委員長	河 野 真治	2年
。文展模擬店委員長	臂 吉浩	3年
。書	阿 住 進	3年
。書	山 辺 絵里子	2年
。書	桜 井 美子	1年
。書	高 橋 美陽子	1年

昭和五十七年度畜友会役員

委員長	臂 吉浩	3年(育種研)
副委員長	阿 住 進	3年(飼養研)
副委員長	岩 渕 守男	2年
會計	瀬 古 真一	2年
會計補佐	山 田 寛	1年
企画	小 沢 真也	3年(飼養研)
企画	小 池 春彦	2年
書記	桜 井 美子	1年
書記	高 橋 美陽子	1年
渉外	岩 下 文雄	2年
渉外	坂 齊 雅浩	1年
庶務	山 辺 絵里子	2年
會計監査	岩 崎 洋一	4年(経営研)
會計監査	菅 野 泰	3年(育種研)
會計監査	菅 嶋 正行	2年
會計監査	菅 原 淳	1年

東京農業大学畜産学科
“畜友会”規約

第一章 総 則

- 第一条 本会は東京農業大学畜友会と称す。
- 第二条 本会は東京農業大学在學生、教職員、及び卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。
- 第三条 本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章 会 員

- 第四条 本会の会員は左記の三種をもって組織する。
- 一、正会員
 - 二、特別会員
 - 三、名誉会員
- 正会員は東京農業大学畜産学科在學生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。
- 第五条 会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章 役員及び機関

- 第六条 本会は左記の役員をおく。
- 一、委員長一名、副委員長二名、書記二名、會計一名、會計補佐一名、渉外二名、企画三名、庶務二名
 - 二、一年クラス委員四名、二年クラス委員四名、研究室委員八名
 - 三、監査員四名
- 第七条 本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。
- 第八条 一、委員長、副委員長、書記、會計、渉外、企画、庶務は選挙によって、計十四名選出する。なお選挙規約は別に定める。
- 第九条 一、二年二名、各研究室一名ずつ、監査委員は各学年一名ずつ選出する。
- 第十条 (なお、専攻生は、各研究室員の中に含まれる。)
- 第十一条 一、欠員が生じた場合は、速やかに補充しなければならぬ。
- 第十二条 役員は任期は原則として一年とする。
- 第十三条 総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。
- 第十四条 一、総会は正会員の三分の一以上より成立する。

二、委任状は署名捺印（拇印を含む）を必要とし、議長に一任する。

三、委任状は総会に際し定足数に含まれる。但し、委任状は議長委任とし、正会員総数の四分の一までとする。

四、委任状の検査は役員が行なう。

五、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもって追加し即日効力を発する。

第十二条 定期総会は年一回十一月に召集する。

臨時総会は左記に該当した場合一ヶ月以内に召集しなければならない。

一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。

第十三条 二、役員の上記の二以上が必要と認められたとき、総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条 総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五条 総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条 総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第四章 業務

第十七条 第六条第一項、第二項に定められた役員は

本会の最高執行機関たる委員会を構成し、

此の召集を委員長が行なう。

第十八条 本会の事業年度及び会計年度は十二月一日より翌年十一月末日までとする。

第十九条 本会は左記の業務を行なう。

一、会員親睦会

二、講習会及び研究発表会

三、見学調査

四、機関紙の発行

五、その他第二条に附帯する業務

第五章 会 計

第二十条 会費は年間二〇〇〇円とする。その納入は四年分一括し、入学時に納入のこと。

第二十一条 本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。

第二十二条 納入金の払い戻しは行なわない。

第二十三条 但し入学取消しの場合はその限りではない。決算報告は十月末日までに作成し公示する。承認は定期総会において行なう。

畜友会選挙規定

第六章 監 査

第二十四条 本会の業務を円滑、正常化する為監査委員をおく。

第二十五条 監査委員は、前条の目的達成の為、年度末に会計監査を行なう。

監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条 監査委員は第六条第一項、第二項の役員に兼任は出来ない。

第七章 附 則

第二十七条 本規定解釈の疑義は、委員会において、最終的解釈する。

第二十八条 本規定の改正、及び追加は総会においておこなう。

第二十九条 本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

第一章 総 則

第一条 この規定は、畜友会役員選挙に関し、選挙が公明、且つ円滑に行なわれることを目的とする。

第二条 この規定は、畜友会規定第六条第一項に基づく役員選挙に適用される。

第二章 選挙管理委員会

第三条 第一条の目的を達するために、東京農業大学畜友会選挙管理委員会を設置する。（以下本会又は単に選挙管理委員会と呼ぶ。）

第四条 本会は、畜友会役員選出に関して全ての権限を有する。

第五条 本会の委員は、各学年より一名ずつ選出し、委員長はその中より互選する。ただし、これに畜友会役員、及び被選挙人は兼任できない。ただし、各学年の在籍数の過半数によって選挙は成立し、三分の二以上の挙手二名以上の場合は挙手をもって最高点を当選とする。本会の委員の任期は原則として、畜友会の事業年度に準ずるものとする。

第六条

第七条 本会は選挙が公明且つ適正に行なわれるように常にあらゆる機会を通じて、公示及び選挙期日、方法、その他必要と認める事項を畜友会会員に周知させなければならぬ。畜友会規定第十六条によって、畜友会役員の不信任を審査し、成立した場合には、本会は新たに役員を選挙を行なう。

第三章 選 挙

第九条 選挙はクラス、研究室の移動投票により行なう。

第十条 一、投票期日並びその期間は事業年度終了日以前の日時を原則とし、選挙管理委員会がこれを定める。

なお、不測の事態が生じた場合は、選挙管理委員会の決するところによる。

二、畜友会役員の不信任が成立した場合には、二週間以内に選挙を行なう。

第十一条 選挙管理委員会は投票日の十日前に公示しなければならない。

第十二条 選挙人、及び被選挙人は、畜友会正会員とする。

第十三条 選挙は立候補制とし推薦者一名を必要とする。選挙管理委員会は立候補者に対して選挙宣伝の為、適切な援助を与えるものとする。

第二十二條

選挙管理委員会は開票後二日以内に適当な方法をもって、当選者を公表しなければならない。

第二十三條

選挙管理委員会は選挙記録を作成し、一年以上保管する。

第二十四條

選挙管理委員会は畜友会会員に選挙記録の提示を求められた時には、いかなる事情があってもこれに応じなければならない。

第四章 予算及び監査

第二十五條

畜友会は選挙管理委員会の必要とする経費を支出しなければならない。

第二十六條

選挙管理委員会は年度末に畜友会会計監査委員の監査をうける。

第五章 改 正

第二十七條

本規定は畜友会総会において三分の二以上の賛成をもって成立する。

第二十八條

本規定に疑義が生じた時は、選挙管理委員会が最終的に解釈する。

第二十九條

本規定は昭和五十年四月一日より施行する。

第十五條

投票に関しては左記の規定に基づいて行なう。
(イ) 投票は同一投票用紙において役員十四名については無記名で投票する。

(ロ) 投票は選挙管理委員会の定める用紙により行なう。

(ハ) 代理投票及び不在者投票は認めない。

(ニ) 投票箱は厳重に封鎖されたものを用い、投票終了後は封印され、開票時まで開くことはない。

(ホ) 投票場は選挙管理委員会が定める。開票は全投票終了後、ただちに行なう。

第十七條 開票は選挙管理委員会の定める場所において、立候補者またはその代理人の立合いのもとで行なう。

第十八條

左記の投票は無効とする。

(イ) 正規の投票用紙を用いていないもの。

(ロ) 立候補者以外の氏名を記入しているもの。

(ハ) 選挙管理委員会が不明と認められたもの。

(ニ) 畜友会正会員の二分の一をもって最低投票数とし、これに満たないとき、選挙は無効とする。

第二十條 当選は有効投票数の上位の委員定数までの者とする。

第二十一條 立候補者が定数のときは信任投票を行ない有効投票数の過半数をもって当選とする。

編集物では「ふじみの」第二十三号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとす為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いします。

記

募集期間 五十八年九月〜十一月下旬

要 項 。論文、随筆、紀行文、主張

四〇〇字詰十枚以内

。写真カット、は随意

。表紙図案、三色以内

宛 名 東京都世田谷区桜丘一―一

東京農業大学畜産学科内

畜 友 会

ふじみの編集委員会行

発行日 昭和五十九年一月予定

応募原稿は一切お返し致しません。

畜友会 「ふじみの」

編集委員会

田 (四二〇) 二二二一

編集後記

ここに無事第二十二号「ふじみの」を発行致しますことができ、編集員一同嬉しく思っております。

私達編集員一同は、今は、ただ読者の皆様が目を通し終えた後に少なからずも皆様の軌跡の一部となりえたならば、この上なき幸せと感ずるしだいではありますが、さてその様なものと成りえたでしょうか。

私達畜友会役員は、会員皆様の御支援、御協力の基により一層努力してゆく所存であります。

尚、この場をおかりいたしまして、原稿を頂きました学内外の諸氏、諸先輩に感謝すると共に、今後とも「ふじみの」及び畜友会への変らぬ御理解と御支援、御協力をお願い致します。

編集委員一同

ヤキトリ・惣菜

鳥よし

TEL (425) 0063

酒類・食料品

おりべ酒店

東京農大北門前

TEL 420-0359

昭和58年3月1日発行

“ふじみの”第22号

編集責任者 加藤 正人

発行者 臂 吉浩

東京都世田谷区桜丘1-1-1

発行所 東京農業大学畜友会
電話 (420) 2131 (呼)

世田谷区経堂1-6-13

印刷所 エルデ・タイプ社
電話 (429) 1067

毎度ありがとうございます

- ★ 日替りサービス定食 400円
- ★ やきそば 200円
- ★ 各種定食 300円より

農大一高正門前

コンパ
弁当も
承ります

キッチン ニ シ モ ト

TEL 429-0578

建築金物, 日曜大工用品
各種塗料, 砂利, 砂, 園芸用品
セメント, コンクリート製品 etc

稲毛屋商会

世田谷通り拓銀隣り ㊚ 426-0505~6
工場 ㊚ 420-1913

皆様の食堂

清潔な設備 明るいホール
低廉な価格

農大食堂

電話 420-4116

歓迎会・部会・クラス会等に御利用下さい

松木家

渋谷円山三業会館隣
電話 (461)2651
(476)4471

かどや酒店

東京都世田谷区桜丘3-34-1

電話 (429) 5175

風呂屋 (有) 神仙湯

世田谷区桜 2-15-16 420-3726

材木屋 (有) 丸美木材

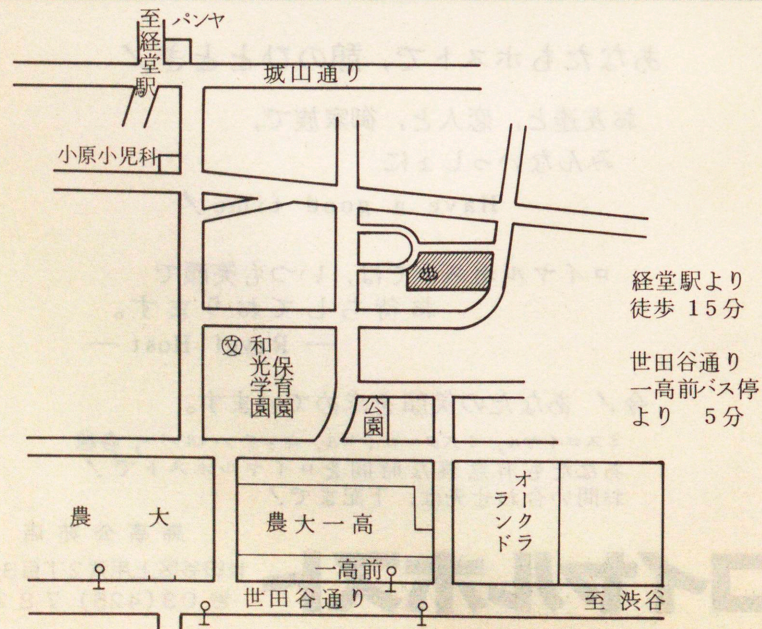
世田谷区桜 2-15-1 428-0521

不動産 東京商事株式会社

世田谷営業所

世田谷区桜 2-15-1 428-0521

代表取締役 深美博之



工業用・実験用・各種薬品のことなら

宮崎化学へ

有機・無機・「試薬」・化学工業用薬品

宮崎化学薬品株式会社

取締役社長 宮崎 宝

東京都板橋区小豆沢三丁目一番三十号

郵便番号 174

電話 03(966)8721(代表)

ロシア語を学びませんか!

本科(専門課程) 昼・夜間 2 部制

附帯教育

- 研究科(マスターコース 1 年制)
- 短期講座(3~6 カ月制・初心者から受講可)
- 春・夏集中講座・夏期大学(合宿講座)
- 学力検定試験(年一回)
- 通信講座入門~上級まで入学随時
- プーシキン大学私費留学制度有
- 東欧語講座開講中
チェコ, ポーランド, ハンガリー, ブルガリア語等

案内書 円共 300 円(切手可)

学校 日ソ学院
法人

〒156 世田谷区経堂 1-11-2

☎ 03-425-4011(代)

お食事各種

coffee



ホームメイド・ケーキ
セットサービス有ります。

あなたもホストで、憩のひととき！

お友達と、恋人と、御家族で、
みんないっしょに

Have a good time!

ロイヤルホストでは、いつも笑顔で
お待ちしております。

— Royal Host —

今！あなたの笑顔を求めています。

ミスロイヤル、ミスターロイヤル、キッチンヘルパー、各種
あなたも有意義な時間をロイヤルホストで！
お問い合わせ先は、下記まで！

馬事公苑店

ロイヤルホスト

世田谷区上用賀2丁目3-1
☎ 03(425) 7821

